

- 1 大島のとうどおくり
- 2 小鴨部のまんど
- 3 下難波の火やろ
- 4 寺村 山の神火祭り
- 5 川之江の秋祭り
- 6 新居浜太鼓祭り
- 7 西条まつり
- 8 神明さん
- 9 国津比古命神社例祭
- 10 吉田秋祭の神幸行事
- 11 愛南町のオハケの習俗
- 12 座敷雑
- 13 オトウの行事
- 14 弓削の宮座式・夜殿祭
- 15 綾延神社の頭屋制度と例祭行事
- 16 株祭り
- 17 アメリカごもり
- 18 いもたき
- 19 御面渡御
- 20 磐根神社の投げ奴
- 21 一人角力
- 22 お供馬の行事
- 23 乙亥大相撲
- 24 下灘の和船競漕
- 25 おみどり神事
- 26 宮島さんの麦藁船流し
- 27 五十崎の百八灯・虫送り
- 28 豊受山の風穴祭り
- 29 湯祈禱
- 30 八幡浜の十日えびす
- 31 多伎神社の笠鉾祭り
- 32 餅なし正月
- 33 日浦の川施餓鬼
- 34 山鳥坂の施餓鬼念仏
- 35 三津厳島神社秋祭り
- 36 三崎八幡神社大祭
- 37 和霊大祭
- 38 平城八幡神社大祭
- 39 保内の秋祭り
- 40 魚成の実盛り
- 41 五反田の柱祭り
- 42 高市の鬼の金剛
- 43 オハンニャ・ゾウリヅクリ
- 44 喜多浦八幡神社の弓放し
- 45 たのもさん
- 46 土手内の亥の子
- 47 吉田町東小路の亥の子
- 48 巳正月
- 49 岩屋寺のお水供養
- 50 大島の島四国へんろ市
- 51 石鎚神社のお山開き大祭
- 52 高山の石鎚講
- 53 目黒の盆行事
- 54 野村町惣川の接待
- 55 鹿島の權練り
- 56 大崎龍神社のオカゲン
- 57 興居島の管絃祭

詳細調査対象祭り・行事伝承地概略図

1. ^{おおしま}大島のとうどおくり

別称：とうどばやし 左義長

伝承地：新居浜市大島

実施時期：1月第2月曜（成人の日）

指定：新居浜市指定

テーマ：1・18

1. 地区の概要

新居浜市大島は、古くから海運で栄えた島であり江戸時代には西条藩第一の港「金島」と呼ばれた。村上水軍の伝説があり、庄屋村上邸が残る。市営渡海船（片道15分）で結ばれている。児童数の減少により学校はなくなり、診療所は1か所設置されている。人口159人（令和4年12月住民基本台帳）。

2. 実施場所

新居浜市大島 診療所前広場

3. 伝承組織

大島伝統行事保存会

大島交流センター

4. 由来伝承

とうどは、小正月に行われる火祭りの行事。起源は平安時代の宮中行事という。大島は京都の荘園だったため都から来た役人が始めたとの伝承がある。大島願行寺の本尊阿彌陀如来は、戦国時代に京都の戦乱を避けて山陽道から宇摩郡を経て大島に渡ったもので、これを安置するために寺を建立したという伝承が残る。神社記によると享徳3年（1454）11月15日火焼祭の記録が残るが小正月の行事ではない。昔は前日から子どもたちが仮屋に泊まり「とうじん おらんだ となりのおばあは ねこもけた ねこもけた」と叫びながら、とうどの見張りをした。

5. 実施内容

先人たちより受け継がれている大島の「とうどおくり」は、「左義長（さぎちょう）」ともいわれ、正月の注連縄・神札・年末大掃除に使ったすす払いの竹などを集め、小正月の早朝にはやし（おたきあげ）、無病息災を祈願する古式豊かな火祭り。本来は小正月の1月15日早暁に行われていたが、成人の日（1月第2月曜日）午前6時からに変更されている。

一辺が3m前後、高さ6～7mの四角錐を孟宗竹で組み、中心に10mの心棒を入れ、大幟を立てる。側は、すす払いの笹竹などを縄で巻き付ける。三分の一くら

いの横に筭（こうがい）を通して小幟を40本くりつける。大幟には「蓬莱山左義長」と部落名、小幟にはそれぞれの子どもの名前を書いていた。材料は子どもが集め、とうどは大人が組み立て、子供組が管理していたが、現在は少子化により大人の手によって行われている。過去には、各部落（5地区）の男児（小学6年～中学3年）が子供組を作り、「水くみ」「新入り」「大将」「食い抜け」に分かれ、大将を中心に作業分担を決めて運営した。

現在は人口減少と少子高齢化のため、とうどの数を減らして実施している。早朝、臨時の渡海船が出る。

（1）とうどばやしの準備

12月24日（土）午前10時

<笹（メダケ）取り>

大島の山中に笹（メダケ）を取りに入る。切り出された笹はトラックで運ばれ広場まで降ろされる。



<骨組作り 午前11時>

笹を取りに行っている間に、広場では孟宗竹でとうどの四角錐の骨組が組み立てられる。



<幟作り 12月下旬>

小幟はそれぞれ書いて現在は体育館で保管される。昔は各家に立て、前日に子供組が集めて回った。



(2) とうどの組み立て

1月7日(土) とうどの組立 午前10時

とうどの骨組は寝かせて置いてある。その4面に縄を絡めて笹を取り付ける。「蓬莱山左義長」と書かれた大幟を中心に左右20本ずつの小幟を竿に取り付け、天辺に松を付ける。



完成したら綱を取り付け、引き起こす。祇園祭の鉾立のような古式な立て方である。昔は人力で起こしていたが、現在は重機で引っ張って起こす。上から地面に斜めに綱を張り固定する。周りに各家からの正月の注連縄が取り付けられる。



(3) とうどおくり

1月9日(月) 成人の日 午前6時 点火



当日、餅を持ち寄り「とうど」の灰をのせ、持ち帰ってから食べる。はやされた竹を切って持ち帰り屋根の上へ上げておく。こうすると火災から免れると言われている。無病息災の火祭りである。



現在は、地域住民により、ぜんざいと甘酒がふるまわれている。

6. 参考文献

- 大島公民館 1984 『大島の昔あれこれ』
- 大島公民館 1986 『大島の昔あれこれ』
- 大島公民館 1988 『大島の昔あれこれ』
- 新居浜市文化財保護委員会 2022 『新居浜の文化財』

7. 調査日

令和4年12月24日～令和5年1月9日

(佐藤 秀之)

2. ^{こかんべ}小鴨部のまんど

別称：無

伝承地：今治市玉川町小鴨部

実施時期：8月14日

指定：無

テーマ：1・19

1. 地区の概要

今治市玉川町小鴨部地区は、今治市の中央を流れる蒼社川の右岸に位置する。230世帯、573人（令和2年国勢調査）が暮らす農村地帯である。

2. 実施場所

「まんど山」と呼ばれる高台の平坦地。その後方にも一段高い平坦地がある。まんど山からは墓地を含む小鴨部の集落を臨むことができる。

3. 伝承組織

子供組と小鴨部子供組保存会が実施している。子供組は小学4年生から中学2年生で、令和4年度は15人で構成されている。まんどでは、中学2年生のリーダーが「大将」となり、中学1年生が「副大将」で順送りとなる。中学3年生は「ノキ大将」として指導を行っていた。かつては男子だけであったが、少子化のため女子の参加も可能になった。

平成28年までは子供組だけで開催していたが、平成29年に子供組の保護者から、「子供組だけでの実施が困難になった」との相談があり、令和2年度に小鴨部子供組保存会が発足。保護者や自治会も協力して、地域を盛り上げていくまन्दの継承に努めている。

4. 由来伝承

『ふるさと年中行事調査報告書』によれば、盆の精霊迎えの大掛かりな行事で「万灯」からでたもので、お盆の迎え火に合わせて先祖の霊を自宅に迎え、ふもとの墓地を照らして霊の帰りを迎えると言われている。かつては14日の夜は先祖霊を家に迎える「迎えまんど」、15日の夜は先祖霊を送り出す「送りまんど」と2回行っていたが、現在では14日の夜のみ。

5. 実施内容

事前（令和4年度は8月6日と7日）にまんど山までの道の草刈りや、当日使用する竹トーチを墓の方向へ向けて9本設置し、麦わらでサイト（束にして棒の先につけた松明）の準備を行う。竹も本来は真ん中の竹を高く、山の形になるよう設置したという。まんど

は火を使う行事のため、水の準備も怠らず、まんど山にドラム缶を設置しモーターで水を貯めておく。平成2年頃まではドラム缶3本分の水を上へ上げるため、子供組が400mの山道をポリ容器を持って6往復し、最も辛い一日であったという。

昭和56年頃は、七夕の笹と麦わらを各家から子供組が集め、麦を作っていない農家は金一封を渡し、灯油や縄、飲み物の費用にあてられていた。現在では稲作が中心のため、麦わらは購入している。

また、昭和30～40年頃には、松の木を立て、竹を組んで麦わらを編み込んでクロ（小屋）をつくり、昭和40年代半ばまではクロの中で寝泊まりして肝試し等を行っていたという。まन्दの終わりにはクロに麦わらをいっぱい敷き詰めて「まんど、かかんど」と囃しながら燃やした。経験者は「やけどをする子どもはいなかったが、火事のような感じだった。」と火柱のあがる壮観な景色を話す。

14日の行事当日は各々が午後6時前後からまんど山に登り、地面に水を撒き、麦わらサイトは木の棒に縦にかぶせて準備をする。麦わらは80～90cmの長さの束で、棒にかぶせると、高さが170～180cmほどになる。一時期は麦わらサイトは行っていなかったが平成29年に復活した。



写真1 竹トーチと麦わらサイト（令和5年）

午後6時15分には事前に集めた七夕の笹飾りを少しくぼんだ場所で燃やす。高さ190cmを越える竹トーチに灯油を入れ、細いウエスを入れてまた灯油を入れる。



写真2 点火（令和5年）

午後6時45分に4人の大將が竹トーチに火を点け、子ども10人、大人18人で行事を開始した。

まんどの間は、「カン、カン、カン」と常に三拍子で鉦が打ち鳴らされる。昭和56年頃は、「シンテ」と呼ばれる小学4年生が鉦を叩いていたが、今は誰が叩いてもよいため、皆で交代しながら叩く。また小学校5～6年生は「チュウテ」と呼ばれ、火を消す役割を担ったという。

「小嶋部の人たちに聞えるように」と叩く鉦の音は麓の集落まで響き、この鉦の音を聞きながら地域の人々は道端や家の中からまんどを眺める。この鉦の音と炎の景色が小嶋部の盆行事である。

かつては道に縁台を出し、帰省していた親戚達と一緒にまんどを眺めたという。



写真3 麓からの眺め（令和5年）

午後7時5分、子どもが後方の高台に登り、竹の棒の先に麦わらをつけ、それに火を点けたものを2人で振りまわす「猫とねずみ」を始める。2人が同じ動きをする様子があたかも猫がねずみを追っているように見える。子どもの後ろでは、大人が「そろえて、同じように、右と左、右と左」と声掛けをしていた。



写真4 猫とねずみ（令和5年）

午後7時23分、猫とねずみが終了し、休憩をとる。途中で消えかけた竹トーチは、地面に竹を倒して中のウエスを引き出し灯油を足したりして調整を行う。麦わらサイトは、しばってある麦わらを切るとまた火が付く。燃え尽きると新しい麦わらに差し替える。このような調整は主に大人が先頭に立って子どもと一緒にを行う。

午後7時40分、竹トーチを背景に皆で記念写真を撮り、後始末を行う。竹トーチからウエスを取り出し、バケツリレーで水をかけて消火する。

午後8時15分に大將から挨拶があり、自治会長からも「まんどの間三拍子の鉦の音が聞こえると、まんどをやりよった、と思います。郷土愛を持てるように」と述べられ、無事終了した。

6. 参考文献

愛媛県教育委員会 1975 『ふるさと年中行事調査報告書』

南海放送 1981 「ぼくらのまんど山」

玉川町教育委員会 1986 『玉川町歳時記』

7. 調査日

令和4年8月7日・14日 令和5年8月14日
(松井 寿)

3. ^{しもなんば ひ}下難波の火やろ

別称：無

伝承地：松山市下難波

実施時期：8月14日・15日

指定：無

テーマ：1・19

1. 地区の概要

下難波地区は松山市北部に位置する。平成17年(2005)の松山市・旧北条市の合併に伴い松山市の一部になった。令和2年国勢調査によれば地区の戸数355戸・人口893人(外国人14人を含む)で、就業者数381人のうち第3次産業就業者が230人を占め農業就業者は44人に留まるが、旧集落部および周辺一帯には農村風景が広がっている。

2. 実施場所

下難波公民館脇の用水路沿いに、30～40m程度の範囲で行われる。子どもが多かった時代は地区の境まで列が達したという。

3. 伝承組織

現在は地区の愛護班が実施し、小1から中3までの小中学生が参加している。愛護班員は10～15人程度とのことである。体験者によれば、昭和60年頃までは小3または小4から中3までの小中学生のみで実施していたという。

4. 由来伝承

得居衛(1985)によれば、北条市には「古くから子供組という組織が自然発生的に」あり、「精霊の送り火迎え火を難波地区では『火やろ』と称し、この子供組が担当して来た[1985:19]」という。また、昔は旧暦7月14日-15日であったが、現在は8月14日-15日に行われる、とも記している。

5. 実施内容

8月14日・15日ともほぼ同様の内容で行われる。

3～4mほどの竹竿の先に1.5mほどの針金を付け、その先に直径10cmほどに丸めた布玉を吊るす。布玉はあらかじめ廃油と灯油を混ぜたものに浸し、十分に油を染み込ませておく。日没後、布玉に火をつけて釣竿のように用水路内でかざし、燃え尽きるまでゆっくり動かす。

8月14日は午後5時前から準備が始まった。愛護班員が三々五々公民館に到着し、早く来たものから準備



写真1 竹竿と布玉(8月14日)

備を始める。14日は直前に地区の役員会が公民館で行われ、その流れで地区役員らも「火やろ」に参加した。そのためか、14日は長机・椅子を玄関前に出して野外休憩所を設け、フライドポテト・揚げたこ焼き・かき氷等を提供していた。また大ダライに氷と水を入れて缶ジュース等を冷やしていた。公民館の和室はエアコンが入った待機場所になっており、庭の投光器も点灯され、子どもたちは開始まで自由に過ごしていた。



写真2 公民館から用水路脇に向かう(8月14日)

午後7時30分ころ、十分に暗くなった時間を見計らって用水路脇に移動する。公民館側から道路に出る橋のたもとで、愛護班員が竹竿の布玉に1本ずつ火を

第3章 詳細調査報告

移し、竹竿を受け取った参加者は、道路側から用水路内に火の玉を吊り下げ、ゆっくり上下左右に動かす。用水路は地面から見て深く掘り下げられており、基本的には堀の中だけで火を動かし、堀の上には出さない。



写真3 布玉に点火する様子(8月14日)



写真4 用水路内でゆっくり動かす(8月14日)



写真5 行事終了後の公民館庭(8月14日)

午後8時頃に行事終了の合図があり、係が公民館側から道路に出る橋のたもとで布玉の火を消して竹竿を

1本ずつ回収する。午後8時15分頃回収作業も終了した。使用した竹竿・布玉は20組であった。

翌8月15日は午後5時頃に準備が始まった。特に集合時間はなく、早く来た者から準備を始める。廃油に浸して置いた布玉を針金で竹竿に結び付ける。新規で10組を組み立て、昨夜未使用だった10組は布玉を改めて廃油につけなおし、合計20組を用意した。午後5時50分ごろ、いったん準備は終了した。この間、公民館内の和室にエアコンを入れて待機場所を作り、また、大ダライに氷を入れて缶ジュース類を冷やしていたが、野外休憩所は設けず、揚げ物類の提供もなかった。

午後7時30分頃、十分に暗くなった時間を見計らって用水路脇に移動し、1本ずつ火のついた竹竿を受け取って用水路に向かってかざす。午後7時50分ごろ、終了の合図があり、14日同様の手順で終了した。



写真6 火やろ(8月15日)

得居衛(1985)によれば、かつての火やろは竹の先にタイマツを結び付けたものを用いていたが、「今では石油をしみこませた綿ボールになり[1985:20]」と1985年時点で記している。また、得居は「火やろ、火やろ」との掛け声も記しているが、令和4年にはこの種の掛け声は聞かれなかった。

6. 参考文献

得居衛 1985 「報告 風早の火やろ」『伊予の民俗』第38号 19-20頁

7. 調査日

令和4年8月14日・15日

(村上 和弘)

4. 寺村 山の神の火祭り

別称：無

伝承地：内子町寺村

実施時期：8月15日（旧暦7月20日に由来）

指定：内子町指定

テーマ：1・15

1. 地区の概要

寺村は、明治22年（1889）に大平村・日野川村・町村と合わせて小田町村となり、昭和30年（1955）の合併で小田町寺村に、さらに平成17年（2005）の合併で上浮穴郡から喜多郡内子町寺村となった。山に囲まれた小田川流域に広がる小田地域のほぼ中央に位置する、191世帯、399人の集落である（令和5年4月1日住民基本台帳より）。地区の中心部には幼稚園や小・中・高の学校、JA支所などの他、昔ながらの店が並ぶ小さな商店街がある。近年は人口減少と高齢化が急速に進み、商業・農業・林業ともに後継者不足が深刻化し、また人員不足のため地域活動にも支障をきたすようになってきている。

2. 実施場所

六角山（標高約320m、県立内子高等学校小田分校西南）、及び、JAえひめ中央小田支所（喜多郡内子町寺村1018番地）周辺。

3. 伝承組織

祭りの世話は、寺村地区の部落6組が当番制で行う。どの当番の構成員も50歳以上である。

昭和57年（1982）発足の「花火実行委員会」から昭和63年（1988）保存会に移行した「山の神火祭り保存会」は、正副会長・幹事・会計・事務局を置き、主に関係機関への申請手続きや寄付金・氏子費の集金と配分などを行う。氏子の上部組織で、構成員のほとんどが60歳以上である。

4. 由来伝承

六角山山頂に祭る山の神に火を献じ、山の幸と秋の豊作を祈る行事である。また、愛宕様信仰と虫除けのための火祭りという生活の知恵の側面も合わせもつ。記録として文政6年（1823）から引き継いでいる「愛宕山歳々當人扣帳」

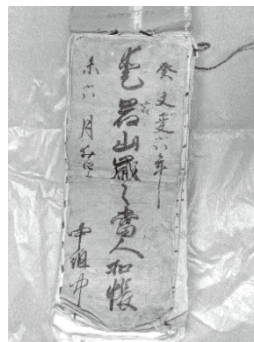


写真1 「愛宕山歳々當人扣帳」

（愛宕山当番帳）とゼニバコ（銭箱）を利用した保管用の木箱が現存する。その記述から祭り自体は記録以前から部落の行事として行われていたことがうかがえる。

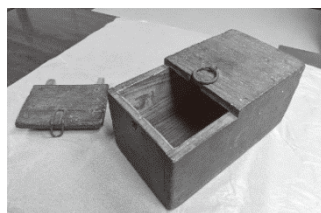


写真2 ゼニバコ

5. 実施内容

(1) 祭りの当番体制

祭りの当番は、もとは15戸の順送りであったが、昭和47年（1972）から組単位での輪番制になった。中通り1班、中通り2班、中通り3班、堂村、新田、林慶の6組が毎年1組ずつ当番になり、6年で一巡する体制であったが、組合同で行う場合も出てくるようになった。令和4年（2022）に「中通り2班・3班」「中通り1班・堂村」「新田・林慶」の3班に合同編成され、その1年目がスタートした。

当番は、該当の班全世帯が対象で、「宿」と「フレカタ」を置く。「宿」は、当番組の代表として祭り運行の中心役を担う。「フレカタ」は、連絡係であるが、現在は仕事内容はほぼないため、当番組によっては置かない場合もある。

(2) 祭りの当番運営

当番組は、山の神火祭りのオヒカリとお念仏に関するすべてを担当する。

<オヒカリの準備>

8月11日午前7時過ぎに当番組が集合し、百八灯と火文字「山の神」のオヒカリを準備する。

高齢者や女性陣は、紐の横に針金を通して芯を作る、空き缶に灯油を入れる、芯を垂らすなどの作業を分担して行い、約600灯分のオヒカリ缶を作る。男性陣は、火文字枠の補修、足場の整備、周辺の草刈りを行う。



写真3 オヒカリ缶作り

コロナ前の令和元年（2019）までは、オヒカリは百八灯や火文字だけでなく、火模様、

周辺の道路沿い、田んぼの中にも設置され、合計4,000灯ほどになっていた。そのため、火模様の図柄考案、オヒカリ缶の作成、それを吊るす単管組みなどの準備作業を6月に入ると開始していた。

第3章 詳細調査報告

<山の神のお念仏>

旧暦7月20日に山の神を迎える儀式を行う。8月17日午前8時、当番組の6名が山の神を祭る六角山に登る。先導する者がいなければ分からない獣道のような山道を15分ほど登った頂に、山の神である自然石を祭った小さな祠がある。まず、草を刈ったり掃いたりして祠と周辺の清掃を行う。次に、榊、御神酒、米、塩、水、夏野菜、いりこ、菓子、オヒカリを供え準備が整ったらお念仏を始める。二礼二拍手一礼の後に念仏を唱える。念仏は、「なんまいだ なんまいだ なんまいだんぶつ なんまいだ」の4回を1セットとして交互に唱和し、108回唱える。これを2度繰り返す。唱え方は、交互唱和であったり、一斉唱和であったりと当番によってさまざまである。念仏が終わると、皆で御神酒を酌み交わし、全員で一礼の後に下山する。



写真4 祠と周辺の清掃



写真5 六角山での念仏

念仏の前後には「ざんげ文」「そこ」「ふた」「前経」「心経」「たらん経」があり、住職を迎えていた頃にはこれらすべてをあげていたと思われるが、現在は省略され、鉦や太鼓もなくひたすら念仏を唱える。また、終了後に祠の前で車座になって御神酒やお供えを頂きながらゆっくりと神に向き合う「おこもり」はなくなり、この後にオヒカリ設置の作業が控えるため、その場に立ったまま少量の御神酒を交わすだけに簡略化されている。

<愛宕様のお念仏>

旧小田町の大字ごとに「愛宕山」と呼ばれる場所で防火・鎮火の神である愛宕様を祭っている。寺村にも愛宕山（内子高等学校小田分校東南）があり、当番組は、旧暦6月24日にここで念仏をあげ、防火を祈願する儀式を行う。旧暦で行うため本来は別日になるが、当番組の話し合いで、山の神のお念仏の日に合わせ、二手に分かれて同時に行うことになった。

8月17日の午前8時、当番組の5名が愛宕山に登る。比較的広い山道を20分ほど登った頂に、愛宕様の石像を祭った石板の祠がある。この愛宕様のお念仏の実施内容や方法は、山の神のお念仏と同じである。



写真6 愛宕山での念仏

<オヒカリの設置>

同日の午後4時、当番組総出でオヒカリの設置が始まる。高齢者と女性陣は、道路わきの水路に沿って百八灯のオヒカリ缶を並べていく。男性陣は、火文字枠にオヒカリ缶を取り付ける。



写真7 百八灯の設置



写真8 オヒカリ缶の火文字枠への取付け

<オヒカリの点火>

日が沈み、辺りが暮れ始める午後6時半過ぎ、オヒカリ缶一本一本に火を灯していく。

平成4年(1992)から寺村自治会が関わり、小学生が点火の儀式に参加するようになった。山の神のオヒカリから頂いたたいまつを持って下山し、オヒカリ点火のたいまつに火を授ける役目を担った。現在は、コロナ禍による祭りイベントの中止に合わせ、点火の儀式も中断したままである。



写真9 オヒカリに点火



写真10 薄暮に浮かぶ火文字

<火の番>

すべてのオヒカリに点火し終えると、当番組の人たちは火文字や百八灯が正面に見える倉庫前の広場に集まる。広場にはシートが敷かれ、座卓には料理と飲み物が並ぶ。当番組の人たちは、ここで会食をしながらこれまでの作業を振り返り、互いの労をねぎらいつつオヒカリが消えるまで火の番をする。

<片付け>

当番組は、翌日の8月18日午前8時に集合し、オヒカリを片付ける。回収したオヒカリ缶は木箱に入れ倉庫に保管する。

<「宿」の引継ぎ>

3月上旬に自治会関係の役が全て決まった後、当番組は次年度の「宿」候補を決め、「宿」が就任を依頼する。候補者が就任を承諾すれば、「宿」は当番組や資料を入れた「山の神 愛宕山 當番組箱」を手渡し、当番組のすべての仕事が終了する。

<今後の継続上の困難点、継続の見込み>

もとは旧暦7月20日に行うささやかな部落の行事であったものが、実施日をお盆の帰省客に合わせて8月15日に固定して以来、祭りは町おこしの一環として年々盛大になり、オヒカリの数も増大、様々な祭りイベントが催されるようになってきた。しかし、一方で地域の高齢化と人口減少による担い手不足は深刻で、祭り当番は運営に苦慮し、現在は組合同で当番を組むことでなんとか対応している。どんな状況下でもお念仏と百八灯という本来の祈りの行事だけは守り継いできたが、令和6年度(2024)の当番組はなんとか工夫して祭りを復活させたいとの意向をもっている。また、火祭り保存会も組織の見直しを決定している。コロナ禍以前の祭りの形に戻すことは難しいものの、違った形で祭りを開催し継続しているという住民の心意気を感じる。

6. 参考文献

- 小田町教育委員会・小田町の文化財編集委員会 1982『小田町の文化財』小田町文化協会
- 愛媛県 1993 『ふるさと愛媛学調査報告書 県境山間部の生活文化』
- 田中孝子 2017『愛媛 大洲・内子とその近辺の民間信仰と大師信仰』
- 内子町誌編集委員会 2018『内子町誌 うちこ時草紙Ⅱ民俗編』内子町

7. 調査日

令和4年8月11日・17日

(大森 希世)

5. 川のえ あきまつ 秋祭り

別称：川之江八幡神社秋季大祭

伝承地：四国中央市川之江町

実施時期：10月13日～15日

指定：無

テーマ：2

1. 地区の概要

明治31年(1898)、川之江村が町政を施行し川之江町が発足。昭和29年(1954)には二名村が編入される。同年、3町3村から成る川之江市となり、平成16年(2004)に伊予三島市、土居町、新宮村と合併して四国中央市となった。人口11,406人、5,211世帯(平成31年(2019)住民基本台帳より)。愛媛県東部に位置し、金生川下流両岸の沖積平野上に開けた地域である。近世には幕府直轄の代官所が、近代には宇摩郡役所が置かれるなど、古くから行政や陸海交通の要衝として栄えた。

2. 実施場所

川之江八幡神社(四国中央市川之江町)および川之江町内。

3. 伝承組織

川之江八幡神社、川之江太鼓台等運営協議会、川之江町愛護班連絡協議会(関船所有地区/東浜、大人太鼓台所有地区/中須、川原町、西ノ浜、旭町、農人町、鉄砲町、馬場、塩谷、栄町、大門、東町、古町、子供太鼓台所有地区/井地、山下、二名、大門、宮ノ谷、天生津、獅子舞所有地区/長須・中所)

4. 由来伝承

起源は定かではないが、川之江村大庄屋の公用記録『川之江村役用記』文化3年(1806)の「祭礼行烈次第」には「神輿太鼓」や「関船」の記述があり、この頃には既に太鼓台や関船(船形の山車)が運行されていたと考えられる。また、現在も川之江秋祭り(以下、秋祭り)で歌われる関船奉納歌は、江戸時代の藩主等が川之江から船出する際の祝唄であり、入港の際には伊勢音頭海老屋甚句を歌って出迎えたという。これらは明治期以降、秋祭りの祭礼行事として歌われるようになった。

5. 実施内容

10月13日～15日の3日間、川之江町民が町内を中心に神輿や関船、太鼓台等を運行し、五穀豊穰に感謝

して無病息災を祈念する。秋祭りに向けての協議は、川之江太鼓台等運営協議会を中心に4、5月頃から始まり、8月下旬からは各地区において打合せ、9月上旬には太鼓台のかき夫募集が行われ、10月初旬から主に集会所にて太鼓台の組み立てが始まる。現在、町内の太鼓台は地区の男性が中心に運行する大人太鼓台が12台あるほか、愛護班や子供等が運行する子供太鼓台が6台ある。太鼓台は、木枠の台の上に高欄と4本のかき棒を取り付けたもので、高欄の上に4本柱、七重受け、最上層に七重を乗せ、絹でできた八つ房を垂らし、頂上四隅に黒生地詰め物をしたとんぼが取り付けられている。その他、高欄部分の掛布団や七重部分の布団縮には龍や虎などの金糸の刺繍が施されている。また、各太鼓台には宮入りの順番を表す号数や屋号、配色が割り振られている。

コロナ禍のため、令和4年(2022)の秋祭りは太鼓台等の運行を川之江町内のみ限定し、夜太鼓は中止するなど、運行時間やルートを縮小して開催された。初日の13日(宵祭)は午前7時より川之江八幡神社に関船や太鼓台が順番に集まり、1地区あたり30分程の氏参りをする。この際、町内の新生児の氏参りも行われる。奉納報告と安全運行の祈願を行い、御祓いを受けた太鼓台等は、同社で授かった御幣を取り付け、夕方まで町内を運行する。



写真1 13日の太鼓台等の氏参り

かき夫等は太鼓襦袢という長襦袢を身にまとい、地下足袋を履き、「ハーリ ワーリ セーエ コーリ ワーリセ サーヨーイ ヨーイヨイ」という掛け声を発しながら太鼓台等をかいて練り歩く。途中、御花として住

民等から金品を受けた際には、「ホーリャサセー」の掛け声とともに太鼓台を上下に揺らしてお礼をするのが習わしとなっている。

14日（正祭及び奉遷祭）は、午前9時30分より川之江八幡神社の御神体を3基の神輿に遷す御霊入れが同社にて行われ、神主や巫女、各地区の氏子総代がこれを務める。太鼓台等は朝～夕方にかけて自由に町内を運行する。また当日には神事とは別の催しとして、栄町商店街に太鼓台等が集まり、差し上げなどを披露する統一寄せが例年行われているが、コロナ禍のため令和4年（2022）は中止となった。

最終日の15日（神幸祭）は午前8時30分より御神体を乗せた神輿3基が川之江周辺の海上や町内を巡幸する。神輿を先導する猿田彦や神輿のかき夫は町内の42、61歳を迎える厄年の男性が中心となって務める。川之江漁協では午前10時より海の安全と豊漁を祈願する海神幸（船渡御）が行われる。3基の神輿のうち2基を船に乗せて漁港を出航し、東は余木崎の沖合、西は大江地域あたりの海上を1時間程巡る。また、神輿の海神幸にあわせて現地には関船や太鼓台等が集まり、神輿の帰還を出迎える。



写真2 15日の川之江漁港での海神幸



写真3 川之江漁港に集まった関船や太鼓台

海神幸を終えた神輿は御旅所の1つである港内の競市場へと移され、午前11時30分頃より、巫女による浦安の舞などの神事が1時間程行われたのち、ほか2

箇所の御旅所や町内を巡幸する（陸御幸）。神輿が陸神幸に出発する際には、関船を運行する東浜地区の男性等が関船奉納唄を歌って神輿を見送り、続いて関船や太鼓台等も宮入り巡行に出発する。その後、午後3時50分頃より再び合流し、川之江八幡神社の「亀嶋」に集合する。亀嶋では敷地内に神輿を据えて、巫女による浦安の舞の奉納などの神事が30分程行われる（還御祭）。そして午後5時頃より、神輿、関船、大人太鼓台、獅子組（獅子舞を奉納する長須地区・中所在所が所有する獅子舞2体とだんじり）の順に宮入りし、拝殿にて奉遷祭が行われ、秋祭りの祭礼行事が終了する。なお、陸神幸の出発時と同様に、この時の奉遷祭においても東浜地区の関船のかき夫等による船唄が奉納される。その他、例年は川之江漁港および亀嶋での神事において中所の獅子舞（市指定無形民俗文化財）が奉納されるが、コロナ禍のため令和4年（2022）は中止となった。

秋祭り終了後、提灯を吊り下げた関船や太鼓台等は午後6時30分頃より宮入りをして各地区へと帰り、地区の集会所等に戻り次第、太鼓台等はその日のうちに解体され、翌日に片付けられる。

秋祭りにおける今後の課題としては、神輿や太鼓台等のかき夫の減少、特に少子化による若い世代の参加が減っていることが挙げられる。また、コロナ禍によって2年間秋祭りが中止となったことも、若い世代の祭り離れに影響したという声もある。太鼓台等の運行時間やルートを縮小するなど、実施方法次第では秋祭りを今後も継続して開催することは可能であるが、現在のような賑やかさは保てなくなるかもしれないと関係者は述べている。

6. 参考文献

昭和55年奉納太鼓台を愛して30年の男 1980『秋祭りの由来』

川之江市誌編さん会 1984『川之江市誌』川之江市
井原祥子 2019「平成30年（2018）写真で見る御神輿と船渡御」『川之江ふるさとの記憶を残す 令和元年度版』NPO 法人紙のまち図書館 川之江図書館

7. 調査日

令和4年10月13日、15日

（石川 桂）

6. 新居浜太鼓祭り

別称：新居浜の秋祭り

実施時期：10月16日～18日

伝承地：新居浜市

指定：無

テーマ：2

1. 地区の概要

新居浜市は、江戸時代の新居浜浦、金子村を中心とした新居郡東部の町村と宇摩郡別子山村が合併してできた市。北は瀬戸内海、南は四国山地が連なる自然豊かな工業都市。元禄4年（1691）の別子銅山の開坑以来、銅（あかがね）のまちとして発展した。世帯数51,205人、人口116,005人（新居浜市HP）。

2. 実施場所

一宮神社・工場前、八幡神社・多喜浜駅前・国領川河川敷、内宮神社・山根グランド・萩岡神社など。

3. 伝承組織

新居浜市太鼓祭り推進協議会、川西地区太鼓台運営協議会、川東太鼓台運営協議会、川東西部地区太鼓台運営委員会、船木地区・角野地区・泉川地区・中萩地区太鼓台運営委員会、大生院地区太鼓台運営委員会、各太鼓台運営委員会、大島連合自治会、各神社

4. 由来伝承

元禄の別子銅山開坑後、新居浜の町が発展し、一宮神社祭礼の渡御行列にだんじりが出るようになる。近隣の川東、上部地区でも祭礼が盛んになり、文政年間に新居浜に太鼓台が登場する。明治に入り住友の発展とともに太鼓台は大型化し豪華になり勢いを見せた。

5. 実施内容

「新居浜太鼓祭り」は、新居浜市の太鼓台が出る秋祭りの総称である。新居浜市近辺では太鼓台のことを「たいこ」と呼ぶため「太鼓祭り」という。太鼓台は高さ約5m、長さ13m、幅3.5m、重さ約2t。長胴太鼓を中心に据え、四本柱の上に赤い布団の形を九重に積み重ね、金糸の龍の布団締、飾り幕で飾る。幕の刺繍は龍や獅子、虎、鷲など勇ましい動物や竜宮城などの御殿、神話伝説の物語の人物などを立体的に金糸、色糸で縫い取る。重の上には紅白の天幕を張り、四隅の黒いくくりからは白や青の絹の大きな房を8本吊る。長さ12mのかき棒4本を前後4人の指揮者の下、ドンデンドンの太鼓のリズムと掛け声に合わせて、約150人で担ぐ。勇ましく手で差し上げる練りを「差し上げ」と呼ぶ。新居浜市内各地区で54台の太鼓台の出る祭礼が行われ、また大島には屋台の出る祭礼が残るが、ここでは川西地区一宮神社祭礼を中心に述べる。

(1) 太鼓台の準備計画

6月1日 今年度の祭礼行事の実施について川西地区運営協議会長より新居浜市太鼓祭り推進協議会に提言する。

7月29日 3年ぶりに通常開催にすることを新居浜市太鼓祭り推進協議会で決定する。コロナ対策をして各地区で運行計画を作成。

9月27日 新居浜市太鼓祭り推進協議会総会で54台の運行計画が了承された。

9月28日 自治会館2階で中須賀太鼓台虫干し。各地区で太鼓台、組み立て、幟立てなどを行う。

10月10日 中須賀太鼓台組み立ての後、お祓いを行う。

(2) 太鼓台の運行

10月16日 氏詣り 自由運行 町回り

17時～18時 昭和通り夜太鼓

19時～20時 フジグラン新居浜店での夜太鼓

大江・東町・新須賀・金栄（4台）

19時～21時 イオンモール新居浜店での夜太鼓

久保田・新田・庄内・江口・本町・西町・中須賀・西原・口屋（9台）

10月17日 例祭式（太鼓台13台）

8時00分に大江・東町・新須賀は港町丸二店を出発、久保田・新田・庄内・口屋は徳常珊瑚礁ビルを出発、敷島通りを東進、8時30



写真1 進行する太鼓台

分に金栄・江口・本町・西町・中須賀・西原は花園を出発、昭和通りを東進、港町丸二交差点を右折、敷島通りを東進、9時40分に球場通りを南進、新須賀入り。各地区で振袖姿の花娘から花束と御花をもらう。10時に平形入り、庄内入り。11時に金栄入り、久保田入り。11時20分に一宮神社南参道。氏子太鼓台は一宮神社拜殿前で神官よりお祓い、御札と御花をいただく。氏子外は御花のみ。12時 昼食。



写真2 一宮神社でお祓いを受ける太鼓台

13時30分 登道集合。14時に新居浜工業高校。庄内・新田・久保田・新須賀・東町・大江は西原交差点西から江口へ向かう。口屋・西原・中須賀・西町・本町・江口・金栄は西原交差点南から江口へ向かう。14時半に江口入り完了。工場前へ向かう。15時に工場前で車を外しかきくらべ。16時に西原へ向かう。17時に昭和通りを東進、帰落。18時～20時に各地区夜太鼓。

18日 神幸祭 7時半 大江・東町・新須賀・久保田・新田・庄内、金栄・口屋、マルナカ前集合、大江浜へ向かう。8時30分金栄・江口・本町・西町・中須賀・西原、マルナ



写真3 工場前で差し上げる太鼓台

カ前集合、大江浜へ向かう。9時大江浜かきくらべ。の予定であったが、大江、新須賀は解体、かきくらべは中止となる。

10時に海岸通西進 10時半に御神輿船御幸、太鼓台中須賀海岸。11時より帰落、12時半昼食。



写真4 大江浜の御旅所



写真5 御神輿行列の巡幸



写真6 船御幸の船に神輿を乗せる



写真7 船御幸 船首で宮司がお清め



写真8 中須賀御旅所での猿田彦



写真9 隨身門をくぐる太鼓台



写真10 一宮神社拜殿前で差し上げる太鼓台

15時に御神輿還御。西原、中須賀、西町、本町、江口、金栄の順で登道を南進、一宮神社へ向かう。16時30分に西原・中須賀・西町、本町・江口・金栄、東門から一宮神社を出る。口屋、庄内、新田、久保田、東町の順で登道を南進、一宮神社へ向かう。17時30分に口屋・庄内・新田・久保田・東町、大鳥居から一宮神社から出る。大鳥居から平和通りを東進、18時半に 全太鼓台運行完了。その後、片付け・解体を行う。

(3) 御神輿の御幸

18日 一宮神社神輿御幸(船御幸の年) 5:30 一宮神社神事 6:00 一宮神社社殿 6:20 一宮神社一の鳥居 7:45 金栄公民館 8:15 久保田公民館 9:00 江口太鼓蔵 9:45 大江浜 10:30 船御幸 11:10 中須賀 11:30 西原自治会館 12:10 新田自治会館(昼食) 13:30 磯浦自治会館 14:25 一宮神社一の鳥居 15:00 一宮神社社殿

(4) 他地区の祭礼

川西地区の他、川東、川東西部、上部、大生院地区でも同様に太鼓台の出る祭礼が行われる。大島では夜宮(だんじり)の出る祭礼が行われる(本年度は休止)。また、春祭りには市内全域、子供太鼓台で賑わう。

6. 参考文献

新居浜市立図書館編 1990『新居浜太鼓台』

新居浜市HP

<https://www.city.niihama.lg.jp/soshiki/kankou/taikomatsuri.html>

新居浜市一宮神社HP <https://www.ikkujinja.or.jp/>

7. 調査日

令和4年9月28日～10月18日

(佐藤 秀之)

7. 西条まつり

別称：西条の秋祭り

伝承地：西条市

実施時期：10月8日・9日、14日、15日～17日

指定：西条市指定 テーマ：2

1. 地区の概要

西条は江戸時代に西条藩庁が置かれ、明治以降も新居郡の中心地として栄えた城下町。伊曾乃神社氏子は、神戸・大町・神拝・玉津・西条校区。石岡神社氏子は、氷見、橋校区。嘉母神社氏子は禎瑞校区。飯積神社氏子は、玉津、飯岡、大生院校区（2004年の合併以前の旧西条市と新居浜市大生院）。令和2年の国勢調査では旧西条市の人口は57,305人。多くの生産物を供給する農業、水産業が盛んで、臨海部は工業集積地、「住みたい田舎」として近年注目されている。

2. 実施場所

伊曾乃神社、御旅所、御殿前、加茂川、石岡神社、御旅所、新兵衛橋、飯積神社、渦井川、八幡神社など。



写真1 伊曾乃神社

3. 伝承組織

伊曾乃神社、大祭委員会（年番）、常務総代会、鬼頭会、各町氏子（だんじり・みこし）。石岡神社、神社総代会、警備士会、各町氏子（だんじり・みこし）。飯積神社、神社総代会、運営委員会、鬼頭会、各太鼓台。嘉母神社、神社総代会、各子供太鼓台。

4. 由来伝承

伊曾乃神社祭礼、石岡神社祭礼共に古い歴史をもち、御神輿渡御の祭礼が室町期以前から行われていた。藩政時代となり、古文書によると城下町が発展した1750年頃、西条まつりに屋台（だんじり）が出現する。1820年頃には御輿太鼓が現れ、現在につながる。江戸時代の祭礼の様子を描いた極彩色の絵巻が2本残っている。飯積神社の太鼓台も幕末には出ていたものと想像される。嘉母神社の子供太鼓台は新しく1975年頃参加するようになった。

5. 実施内容

「西条まつり」は、伊曾乃、石岡、飯積、嘉母神社の4つの秋祭りの総称である。伊曾乃、石岡神社には「だんじり、みこし」が供奉される。飯積、嘉母神社には「太鼓台」が供奉される。「だんじり」は、二重、三重の高欄を持つ唐破風屋根の屋台で、高さ約5m。太鼓・縮太鼓・鉦を叩き、伊勢音頭を歌いながら50人程で担ぎ、差し上げる。花鳥や武者の彫刻で飾り、四本柱を刺繍や染などの幕で覆う。夜には100個余りの提灯を高欄に灯す。「みこし」も高さ約5m。太鼓・縮太鼓・鉦を叩き、伊勢音頭を歌いながら150人程で曳いて走る。赤い布団の形を九重に積み重ね、金糸の布団縮、飾り幕で飾る。四隅の黒いまくらから白い房を8本吊るす。夜には300個ほどの提灯を付ける。伊曾乃神社祭礼だけで、「だんじり」77台、「みこし」4台が奉納され、西条市全体では百数十台を数える。西条市内各地区で、だんじり・みこし・太鼓台の出る祭礼が行われるが、ここでは伊曾乃神社祭

礼を中心に述べる。例年10月15、16日と祭礼日が定まっているが、令和4年は土日と重なった。

(1) 伊曾乃神社祭礼の準備計画

7月16日（土）鬼頭総会

8月20日（土）秋季氏子総代会

9月4日（日）伊曾乃神社鬼頭・屋台総代総会

新型コロナウイルス感染拡大防止対策をして3年ぶりに斎行

10月8日（土）

14:00 伊曾乃神社祭礼事始め式。屋台神札、奉納許可証を受け取る。19:00 屋台運行説明会、昇き夫番号札交付。



写真2 伊曾乃神社祭礼事始め式

10月9日（日）

この前後で、各地屋台組立。



写真3 屋台組立

14:00 風伯神社安全運行祈願祭など各地小祭り

吉原三本松屋台 創建百年祭など各地式年祭

10月10日（月）喜多浜太鼓台 新調お披露目式

10月14日（金）15日の準備 青年団、老人会年番、お世話人、鬼頭らが奉仕準備。

18:00 宵祭り 20:00 提灯をつけて駅前などへ

10月15日（土）16日の準備

(2) 伊曾乃神社祭礼 主にだんじりの動き

10月15日（土）

0:00 伊曾乃神社お宮出し。御神輿の出御を、提灯を灯しただんじり・みこしが迎えに行く。神門前で差し上げを見せる。4:20

神職総代鬼頭参進 4:30 例大祭神事 6:00 出御祭 6:20 鳥居前
で一番神楽 7:30 だんじり帰着 9:30 花集め出発(町回り自由
運行 駅前、商店街など) 御神輿は夕刻 18:00 御旅所に到着。
21:00 だんじり運行終了。



写真4 御旅所

10月16日(日)

1:00～ 御旅所へ集結。御旅所からの御神輿出御を、だんじり・
みこしが提灯を付けて迎えに行く。御仮屋前で差し上げを見せ
る。最後に提灯を多数灯したみこしが走り、練りを見せる。



写真5 御旅所前 だんじりの差し上げ



写真6 御旅所前 みこし

4:35 行列を整え一番屋台から出発。御供屋台まで御神輿に供奉。
巡行路は20kmに及び、すべて担ぐ屋台もある。80台を越す屋台
行列が長いため、先頭が御殿前に到着しても、まだ後尾は御旅
所を出発していない。夜明けを迎える。6:25～屋台御殿前到着
(朝食)。西条藩の御殿前堀端に全屋台が練りを見せ、勢ぞろ
いする。大手門の前で差し上げを見せる。終盤、みこしが走り、
練りを見せる。朝日に輝き美しい見せ場。御神輿の行列が最後
に到着。

9:15 御殿前を出発し、城下町の水系を巡行する。11:45 玉津(昼
食) 13:00 出発。稲穂の田園を抜け、永易土手に整列。



写真7 大手門前の差し上げ



写真8 神輿渡御行列

15:00～お宮入り 18:00(夕食)。御神輿が渡御を終え、加茂川
を渡ってお宮へ入るのを夕日の中、土手に整列して見送る。川
の中で練り日が暮れ、提灯をつけて町々で最後の練りを見せる。
21:00 だんじり運行終了。

(3) 御神輿の御幸(みゆき)

鬼頭、御道具(地元中学生の奉仕)、御神輿(年番)、神官・巫女、
大祭委員長・副委員長(年番)がお供する。

神楽所では修祓、祝詞、神子舞、奉幣が行われ、各家庭への御札が
配られる。

10月15日(土)

4:30 例大祭 → 6:00 本社出御祭 → 6:20 鳥居前 → 7:00 船形 → 7:
30 釜ノ口 → 8:00 楠 → 8:30 かじ分 → 9:10 西田 → 9:50 東光 →
10:30 中西(昼食休憩) → 12:00 古川 → 12:30 古川新地 → 13:10
上川原 → 13:30 神拝小学校 → 13:50 古屋敷 → 14:10 上神拝 →
14:30 上喜多川 → 15:00 加茂町 → 15:20 大町小学校 → 16:20 地藏
原 → 17:00 新田 → 17:30 西之川原 → 17:50 御旅所(宿泊)

10月16日(日)

5:50 御旅所 → 7:00 駅前 → 7:20 湖日市 → 7:50 風伯神社 → 8:
10 本局前 → 9:30 御殿前 → 10:00 松之巻 → 11:00 喜多浜 → 11:30 下
喜多川 → 12:00 本町(昼食休憩) → 13:00 新地(弁財天) → 13:30 横
黒 → 13:50 市塚 → 14:30 玉津永易 → 15:30 澤 → 17:15 川入り →
17:30 中野青 → 18:00 本宮還御

2日間の巡幸を終え、加茂川を渡った御神輿は伊曾乃神社に帰り、
御霊は本殿に還る。

2日間の巡幸路は約50km。徒歩で行列する。

(4) 伊曾乃神社祭礼の片付け

10月15日(土) 伊曾乃神社境内の片付け

10月17日(月) 8:30 各所の片付け

10月22日(土) 18:30 集会所で打ち上げ

10月23日(日) 10:00 屋台解体 12:00 清酒販売

伊曾乃神社では鬼頭、西条年番が祭礼の片付け奉仕作業。境内を元に戻し、神輿庫へ大切に片付ける。

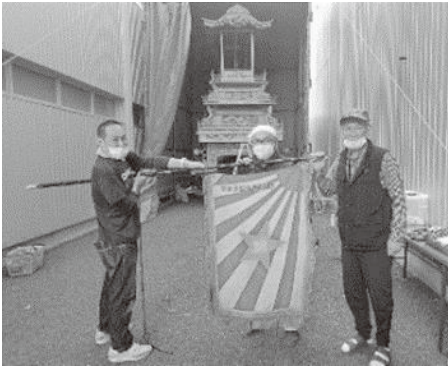


写真9 屋台解体

(5) 服装

寛延3年(1750)の古記録に「屋台宰領の者は袴着用と小脇差帯刀を許可」とある。絵巻にも警固の4人は袴姿で描かれる。明治以降は紋付羽織、背広に総代の袴姿になった。早き夫の姿は幕の中で見えないが御輿のテギに付く若者のように動きやすい着物姿だったようだ。大正時代にラクダの袴裃に股引、腹巻にネルの腰巻、兵児帯、地下足袋、中折帽、烏打帽という服装が流行。現在では古典的な衣装として引き継がれる。温暖化とともにラクダは廃れ、ダボシャツに変わってきている。昭和戦後に法被が取り入れられ、現在は各町のユニフォーム化している。

(6) 鬼頭(おにがしら)



写真10 鬼頭

伊曾乃祭礼を取り締まる組織として鬼頭会がある。絵巻にも鬼の面をつけ、房の付いた股引、袴纏を着た鬼の姿が見える。昔は赤鬼ばかりで、次第に五色の鬼になったが、現在は黒装束ばかりである。喧嘩・口論を取り締まる警察的な役割であったが、近年、祭礼神事全体を統括するようになった。大総取締、総取締などの階級があり神輿係屋台係に分かれ、禰をかける。

(7) 伊曾乃神社祭礼の神事

以下に、伊曾乃神社例大祭の主要な祭礼神事の式次第を記す。

「宵宮祭」10月14日17時 手水、着席。開式太鼓、修祓、宮司一拝、神饌供す。宮司祝詞奏す。宮司玉串拝礼。神饌撤す。宮司一拝。閉式太鼓。退席。

「例大祭」10月15日4時30分 宮司以下祭員・常務総代社務所前から祓所へ参進、修祓。開式太鼓。着席。宮司一拝。宮司神殿御扉を開き側に候す(奏楽、諸員磬折)。祭員神饌供す(奏楽)。宮司祝詞奏す(諸員磬折)。大祭委員長氏子幣を献ず(奏楽)。大祭委員長折誓詞を奏す。宮司玉串拝礼。祭員列拜。大祭委員長玉串拝礼(副委員長

列拜)。参列者玉串拝礼(常務総代、鬼頭会長、市長、議員、神戸敬神会代表ほか)。氏子幣を撒す。祭員神饌を撤す(奏楽、神酒と水器に蓋す)。宮司垂簾畢りて本座に復す(奏楽、諸員磬折)。宮司一拝。宮司挨拶。来賓挨拶。

「出御祭」例大祭後 修祓。宮司祝詞を奏す。出御の儀(宮司手袋覆面をして神殿内に入る。奏楽、拝殿外扉を閉ざし消灯して御霊を神輿に遷す。低音を発す。布を敷き権禰宜神輿扉を開く)出御。神輿を祓う。輿丁・参列者を祓う。

「御旅所祭」10月16日4時50分 宮司以下着席。修祓。宮司一拝。献饌。宮司祝詞を奏す。奉幣。神子の神楽(太鼓)。宮司玉串拝礼。参列者玉串拝礼(大祭委員長、昨年年番常務総代、鬼頭会々長、松平家、お旅所管理委員会、大町校区氏子総代表)。撤饌。宮司一拝。御立。



写真11 神楽場の例(15日東光)

「還御祭」10月16日18時頃 本宮着御。宮司以下着席。入御(太鼓)。祭員神饌を供す。宮司祝詞を奏す。宮司玉串拝礼。参列者玉串拝礼(大祭委員長、筆頭常務総代、鬼頭会長)。祭員神饌を撤す。閉扉。宮司一拝。挨拶(宮司、大祭委員長、鬼頭)。退下。

10月15・16日に行われる御幸については、(3)で紹介された巡幸路で巡幸し、各神楽場で「御旅所祭」に準じた神事が行われる。玉串拝礼する参列者は、各地区氏子代表である。氏子には各町・各家へ護符が配られる。

伊曾乃神社祭礼の特徴は、祭礼絵巻の残る江戸時代の祭礼神事の様子を色濃く残していることである。神輿を中心に、屋台が供奉し、鬼頭が支える運営の姿。城下町の複雑な街路を含む旧街道を進む行列の伝統。氏子の町をくまなく回り、神事を行う伝統。華麗な屋台に目を奪われがちであるが、今でも神事が祭礼の中心となっている。

さらに、祭礼神事は年中行事の中に位置づけられることも重要であろう。(1)で述べられた祭礼準備以外にも、元旦の歳旦祭や11月23日の新嘗祭等にも、宮司以下神職、常務総代や大祭委員長、鬼頭等が正装で参加している。

6. 参考文献

福原敏男 2012 『西条祭礼絵巻』
西条市教育委員会 2013 『西条市の文化財』

7. 調査日

令和4年7月16日～10月16日

1～4、5(1)～(6)、6～7 (佐藤 秀之)
5(7) (胡 光)

8. ^{しんめい}神明さん

別称：神明神社祭り、ヒッチャコチャン

伝承地：今治市波止浜地区、龍神社境内など

実施時期：1月第3日曜午前・午後（山車の運行）

指定：今治市指定

テーマ：2

1. 地区の概要

波止浜は天和3年（1683）の入浜塩田開発によって誕生した松山藩有数の港町で、かつて全国有数の塩田産地で知られた。明治期以降は造船業や海運業などが栄え、昭和30年（1955）に波止浜町は今治市に編入合併された。塩田は昭和34年（1959）に廃止となるが、跡地は小学校・造船工場・商業施設・宅地などに再開発されて現在に至る。

この祭礼は、港町の旧市街地（波止浜／丁目）と塩田跡地（波止浜／番地・地堀・中堀）に居する龍神社氏子らの信仰を集める。該当する校区の世帯数は2,348戸・人口は4,791人である（今治市住民台帳／令和5年1月31日時点）。

2. 実施場所

祭典は波止浜龍神社境内及びその境内社の神明神社で執り行われる。山車は神社を出発し、波止浜地区の旧市街地を最初に運行し、後半は塩田跡地の地堀や中堀の住宅街などを運行する。

3. 伝承組織

龍神社氏子及び波止浜地区住民

4. 由来伝承

当社は火難除け・悪病退散の神として、波止浜の地に勧請以降、長く住民の信仰を集めてきた。安政6年（1859）のコレラ流行や文久2年（1862）の麻疹流行の際、疫病退散の祈祷をかねて山車の運行が盛んに行われ、波止浜5町（本町・新町・片原町・問屋町・山下町）に各1台あったという。明治以降は、このうち新町の1台だけが残り、波止浜の年中行事として継承されている。古くは旧正月14日、以前は旧正月15日に実施されていた。旧市街地から現在地に社殿が移設



神明神社の山車（2020年1月19日）

されるのは神明橋架設の明治42年（1909）頃と思われ、それ以降、現在のような形態をとるようになったと考えられる。塩田廃止後は運行エリアが広がった。

5. 実施内容

山車は、龍神社境内の神輿庫に格納され、龍神社（別府聖治宮司）の所有・管理となっている。現在の山車は平成3年（1991）に新調され、車輪はゴムタイヤで木造の本体を幕で着飾っている。山車の大きさは、全長4.3×幅1.3×高さ3.0（m）である。

山車運行の前日に社殿で祭典を行って御霊を山車に載せ、神社総代が幕などの飾りつけを行う。山車には2条の綱がつながれていて、これを波止浜小学校区6年生以下の子どもたちが午前10時頃から午後1時頃まで市街の決められたルートを曳いて練り歩く（9時40分出発式を行い、餅投げを行う）。この際、「ヒッチャコチャン、エイヤナー」の掛け声をともなうことから、この祭礼は「ヒッチャコチャン」の愛称で地元住民に慕われている。

山車の意匠は、前方部の勾欄に松・竹・日の丸扇などの飾りつけをし、後方部はその歳の干支の絵馬が飾られる。絵馬は干支歳の人の寄付で制作される。旧山車も現存し、そちらは立体的な装飾が施されていたが、新調するにあたって現在の絵馬の形態となった。絵馬以外で寄付のあった個人・法人については、前方・後方の腰回りに寄付札が垂れ下がる。

幕に隠れた台の下には太鼓と鉦が設置され、12歳（干支歳）の小学生が交代で音を奏でる。台上後部には御霊を納める祭壇が備わり、山車運行が終わると御霊を降ろし、社殿で祭典を行う。

6. 参考文献

1934 『神明宮由来』

7. 調査日

令和5年1月聞き取り ※令和3～5年実施されず

（大成 経凡）

くにつひこのみことのじんじゃれいさい

9. 国津比古命神社例祭

別称：風早火事祭り

伝承地：松山市北条校区、難波校区、正岡校区

指定：無

実施時期：10月第2月曜を含む土曜から月曜の3日間（平成12年までは10月10、11、12日）

テーマ：2・9

1. 地区の概要

松山市の北部、旧北条市地域の祭りにはダンジリが運行される。南側の旧松山市地域には見られず、東予地域や瀬戸内海島嶼部に多いダンジリ文化圏の境界に位置している。人口は、北条地区7,719人、正岡地区1,920人、難波地区1,772人（令和5年8月時点）。

2. 実施場所

国津比古命神社（以下国津社）、櫛玉比売命神社（以下櫛玉社）とその氏子地域にあたる松山市北条校区、難波校区、正岡校区。

3. 伝承組織

難波校区（大浦、下難波、中通、上難波、庄）、正岡校区（宮の上、八反地、中西内、中西外）、北条校区の北条区（新立・日出町、辻北、浜町、北本町、本町、上町、新町、栄町、一番地、風早タウン）、辻区（朝養、辻町、新玉、港通り、浜、上辻、新開、南町、上辻柳会）、土手内区（土手内、片町、大町）の各地区がそれぞれダンジリを所有し運営している。

4. 由来伝承

ご神体がかつて海に流れたという伝承があり、それを通りがかった立岩区の猪木地区の若者が引き上げたと言われ、それ以来神輿の先導を務めるダイバは猪木地区または猪木地区出身者に限られている。

この地域のダンジリは北条区の4体の引きダンジリから始まったと云われている。のち昇きダンジリが各地区で作られた。半鐘と太鼓を激しく打ち鳴らすことから「風早の火事祭り」とも呼ばれる。

神輿を石段の上から落とすことで知られているが、その由来は不明。その意味としては神の力を強く発動させるための霊振りと、神事に毎年新しいものを使うという意味合いがあると云われている。

5. 実施内容

地区によって多少の差異はあるが、かつては小学校3年生から中学校3年生で組織された少年団が多くの準備を担ってきた。現在は子どもの人数が減っており大人が関わる部分が多くなっている。

8月からダンジリの筐に付ける日の丸の旗づくり。イモ判やナス判で日の丸を作り、また生漉紙を細く切ったもので紙繕りを作る。日の丸の旗に紙繕りを貼り付けて旗の完成となる。現在は印刷した日の丸と出来上がっている紙繕りを購入し旗を作製する。

9月からは祭りの準備が本格化し、ダンジリの金具部分を磨く作業や道具類の点検などをする。早めの点検、注文が必要となる提灯などはもう少し早めに点検を行う。

10月に入ると半鐘と太鼓の練習が解禁となり、夜にはその音が響き渡る。ほとんどの地区でお祭りの前週の土日にダンジリの組立が行われる。

ダンジリ本体の左右に昇き棒（長さ約14m～18mの丸太）を取り付け、ロープで固定する。棒鼻（棒の先端）近くに丸太を挟み、ロープを巻き、2本の棒が暴れないよう固定する。本体の上部の4隅には四本棒を立て、その上に装飾をした笠木を渡す。笠木に提灯を取り付け、天幕を巻く。

本体の中には半鐘を吊るし、太鼓を据え付ける。ダンジリの大きさによっては太鼓を外に付けるところも多い。

本体の下にはタイヤを取り付ける。かつてはタイヤなしで昇っていたが、人手が少なくなった地区が取り付けようになつたといわれ、今はすべての地区のダンジリがタイヤを付けている。タイヤを付けることでダンジリの巨大化が可能となり、多くの地区で競うように大きなダンジリの作製が進んだ。組立が終わると地区によってはその日から毎晩運行が行われる。

3連休初日の土曜日の夜が宵の明星神事。正岡校区のダンジリが19時頃から国津社の馬場に集まり練り合わせる。21時頃から宵の明星神事で、櫛玉社から神輿が1体静かに出発し旧風早郡大庄屋門田家まで渡御する。この時の昇き手は八反地地区だけで行う。現在はその様子を集まった人たちは見学しているが、昔はこの神事のお神輿の渡御を見ると目がつぶれるとされ、参道に面した家々でも見ないようにしていたと云われている。

日曜日の早朝が宮出しで、午前2時頃から徐々に各地区のダンジリが馬場に集まり、練り合わせる。宮出しからダンジリに日の丸の旗で飾られた4本の筐が立てられる。ダンジリが鳥居に迫る大きさになったため、一の鳥居を過ぎてから筐を立てる地区が多い。

令和4年は集まったダンジリは八反地、宮の上、中西内、中西外、上難波、下難波、中通、片町の8地区とコロナ禍の影響で少なめで統一練りも見合わせだった。

令和5年は例年通りの統一練りが復活し、正岡小学校校庭へダンジリを入れ、横並びに集合し、4時頃から統一練りが行われた。参加地区は並んだ順に北側から新開、片町、南町、辻北、八反地、宮の上、中西外、中西内、辻町、上辻、風早タウン、大町、柳会の13地区、並ぶ順番は特には決まっていなかった。

6時から宮出し。国津社、櫛玉社からそれぞれ2体の合計4体の神輿が各地区の渡御へ出発する。北条区へ2体、難波区、正岡区へ2体渡御をする。

宮出しの後すぐに国津社前で宮獅子として八反地地区の獅子舞が奉納される。八反地は宮獅子なので国津社より上側の地区では獅子舞はしないという。

神輿の渡御は正岡区・難波区の場合、高田、院内、神田、庄、上難波、中通、下難波、大浦、中西内、中西外、八反地の順に回る。6時50分頃高田、12時頃中西内、14時20分頃八反地へと渡御される。

令和4年の場合、15時20分頃正岡・難波を回った神輿が、15時50分頃北条を回った神輿が馬場へと到着。16時頃から宮入で例年行われる神輿おとし無しで御霊移しが行われた。

例年は一体ずつ順番に石段の上から落とされる。当番地区が持ち回りで決まっており、1回目はその当番地区で引き上げられ、落とされる。2回目以降は地区関係なくそこにいる人たちが引き上げ、オショウネ（ご神体）の入った箱が出るまで何度も落とす。飛び出したオショウネを石段上まで上げるとその年は無病息災といわれ、奪い合いながら取った者が石段上の神主へ手渡す。それを4体終わるまで行い宮入が終了となる。令和5年は例年通り行われた。

宮入後、馬場ではダンジリの練りが行われ、名残を惜しむように徐々に各地区へと帰っていく。

なお獅子舞の伝承地区は八反地のほか庄、中西外、浅海がある（北条南中校区にも数地区ある）。

中西外小山獅子舞保存会で行われる演目は親爺、三番叟、山探し、ぬたば、いなまきがある。大太鼓と小太鼓、笛のリズムに合わせて舞う。親爺から始まり親爺と猿が登場する。その後獅子が登場し何れかの演目を舞ったあと、狩人が登場し獅子を退治して終了する。中西外は栗井区の河原地区から習ったと云われている。旧北条市地域の獅子舞は獅子の顔も胴の油単も緑色の典型的な松山型の獅子である。

6. 参考文献

北条市誌編集委員会 1981 『北条市誌』

7. 調査日

令和4年10月7日～10日

令和5年10月6日～9日

(竹島 大祐)



写真1 猪木ダイバ



写真2 宮出しに向かう中西内地区大ダンジリと小ダンジリ



写真3 統一練り



写真4 神輿落とし①



写真5 神輿落とし②

10. 吉田秋祭の神幸行事

別称：吉田秋祭り

伝承地：宇和島市吉田町吉田・立間

実施時期：11月3日

指定：愛媛県指定

テーマ：2・22

1. 地区の概要

吉田秋祭の神幸行事（八幡神社祭礼）が執り行われる宇和島市吉田町は、平成17年の市町合併により宇和島市となったもので、宇和島市の北部に位置する。山々に囲まれ、集落はその谷間に立地している。西部には法花津湾、吉田湾など複雑に屈曲するリアス海岸があり、宇和海が開けている。急傾斜地が多く、柑橘栽培が盛んな地域である。

2. 実施場所

八幡神社は吉田町立間地区にあり、そこから神輿が出御して、吉田町吉田地区の各町から出る練車や牛鬼等と合流して吉田地区の町、つまり江戸時代から続く旧陣屋町（旧家中町、旧町人町）を練り歩く。

3. 伝承組織

平成29年に設立された「吉田秋祭保存団体協議会」（事務局は宇和島市教育委員会内）は文化財保護の立場における各種連絡、調整役の団体である。行事の執行については八幡神社に「八幡神社総代会」があり、氏子域の各町から神社総代が選任され、神職と協力しながら神社の護持に関する活動を行う。神社総代会は一年の様々な行事を執行する組織であり、総代会会長は慣例で神社が位置している立間地区から選出されることになっている。氏子総代は、立間地区6区より3年任期で6名が選出され、全員が総代会の理事を兼ねる。吉田地区は、21の自治会より各1名の21名が選出され、このうち桜橋を境に橋上（家中町）・橋下（町人町）より2名ずつの4名が総代会の理事となる。八幡神社の運営については、立間と吉田両地区の理事10名を中心として運営され、立間地区より総代会長と副会長1名、吉田地区より副会長1名が選ばれる。

そして神社総代会に並列し、協力する組織として「吉田秋祭り振興会」が設立されている。神社総代会の役員に加えて、この振興会には立間の「神輿奉賛会」、同地区の「鹿の子保存会」、吉田の「吉田町おねり保存会」、元町、鶴間、浅川が輪番で務める「牛鬼保存会」を統括する組織となっている。また「吉田秋祭り振興会」は観光振興に関する活動を行う「吉田町秋祭り実行委員会」（事務局は吉田三間商工会内）に対してその年の祭りの運行予定などの情報を提供し、対外的な情報発信等を行っている。

そして、吉田秋祭の「おねり」に関する組織は、吉田地域で練物の巡行に参加する地区で構成される「吉田町おねり保存会」であり、各町の役員（自治会長、神社総代等）が会合に出席し、祭りの事前協議をして運行の順序、方法などを決定する。その会合を統括する責任者が「大世話番」である。

吉田地域からは大世話番を出し、神社総代長は立間地域から選ばれるが、祭りの責任者は総代長、「おねり」の責任者は大世話番となっている。

各地区（自治会）の伝承組織については、練車を出す本町一丁目の事例を挙げておく。本町一丁目は関羽の練車を出している。保管場所は本一集会所である。江戸時代から商人中心の町であり今も商店が多い。令和2年には人口は53名、世帯数は22戸である。保存団体は特別な保存会が組織されているわけではなく、祭りの準備、運営は自治会で担っている。そのため祭り運営の責任者は自治会長（慣例で「区長」とも呼ぶ）である。自治会長は任期1年で、それが終わると任期1年の安藤神社総代、その次の年に八幡神社総代（任期1年）に就くという慣例になっており、現在もそれが踏襲されている。自治会長は70歳定年との慣例があるが、それは若い住民が多かった頃の話で、現在、それは必ずしも守られているわけではない。区長の下に副区長の役職がある。本町一丁目は2つ（北、南で一班、二班）の班にわかれ、それぞれに班長がいる。班長を務めると次年度に自治会長等になるというわけではない。各班の中での輪番で決めている。秋祭の練車には準備、当日とも10人程が参加している。練車の曳き手は8人で曳いている。練車の巡行を管理するのに「ケイゴ（警固）」という役割がある。この役を務めるものは2名で袴（かみしも）を着る。なお、自治会の行事としては秋祭以外に毎年5月に溝の清掃作業があり、本町と裡町の境の排水路を掃除する。各町の境を南北に通る排水路のことを「オオミゾ（大溝）」と呼び、江戸時代に町が造成されて以来の排水路である。その管理、清掃作業を行うなど、江戸時代からの町割りの維持に祭りだけではなく、町の環境整備も自治会の中で受け継がれている。

4. 由来伝承

元和元年（1615）、仙台藩主伊達政宗の長男秀宗が宇和島藩10万石の大名として入部、明暦3年（1657）に秀宗の五男宗純が3万石を分地され吉田藩が成立する。この際に現在の吉田町の中心部に大規模な造成がなされ、現在に至ってもその町割りにはほぼ踏襲されており、そこを神幸行列が進む。伊達家が入った直後の寛文4年（1664）に神輿渡御の祭礼が始まり、1700年代後半には牛鬼、1800年代前半以前には練車が行列に加わるなど次第に賑やかな祭礼になっていった。

八幡神社の氏子は、吉田町立間地区全体と同吉田地区の大部分が範囲となっている。江戸時代初期以前は立間が中心集落であった。平安時代の『和名類聚抄』にその地名が見えており、江戸時代初期、吉田藩伊達家が入ったことにより、武家の町並みに加え、本町、裡町、魚棚町といった町人町が形

成された。17世紀半ばに成立した町割り、現在もほぼ残された上で「おねり」、神輿渡御が行われていることも、他の祭礼と比較すると稀有な事例といえる。しかも、ももとの在地の立間地区が、神幸行事の最初の宮出しにあたって「卯之刻相撲」を行い、神輿を担ぎ、そして立間内の17集落それぞれの旗を持って練り歩く。吉田秋祭を執行する祭儀の基本部分は立間地区の住民が担い、そして練車といった豪華なお供を町人町が担い、それをかつては、藩主、武家の町を練り歩いて多くの方々に見てもらう形式となっていて、それが今にも継承されている。このような吉田秋祭の在り方は、江戸時代初期からの吉田の町の成り立ちの歴史を反映しているといえる。

5. 実施内容

吉田秋祭は、宇和島市吉田町立間の八幡神社の11月3日秋季例大祭における神幸行事である。江戸時代後期に成立した祭礼風流であるねり行列（おねり）の形態を天保年間から明治時代に描かれた複数の絵巻物で確認できるとともに、近世祭礼の姿が江戸時代と変わらない町割ちにおいて現在まで継承されていることや、愛媛県南予地方の祭礼に登場する練り物の要素が広範に含まれて構成されることが特徴である。おねりには、御船（船型屋台）、練車（人形屋台）、鹿の子（東北地方から仙台伊達家の繋がりで伝播した鹿踊）、牛鬼、宝多、御用練りなどがある。牛鬼、鹿踊など南予地方独特のねりを見ることができるとともに、贅を凝らした練車には、人形だけではなく、彫刻や立体刺繍幕が飾られており、吉田藩以来の町人の財力を物語るものである。曳く形の人形屋台である練車の静的な運行に比べ、牛鬼や神輿は激しく、賑やかに運行し、多くの観客が集まる祭礼として、現在に受け継がれている。

実施内容については、宇和島市教育委員会編 2018『吉田秋祭の神幸行事総合調査報告書』に詳細に報告されており、そちらを参照いただきたいが、ここでは令和4年の行事次第を記しておく。

吉田秋祭は早朝の卯之刻相撲に始まり、日中は楠木正成や豊臣秀吉、武内宿禰らの人形を載せた屋台（地元では「練車（ねりぐるま）」と呼ばれる）を曳いて町内を練り歩く「おねり」が名物で、本町、魚棚、裡町など町ごとに様々な練物、屋台が町内を歩き、夕方に八幡神社に神輿が帰って祭りは終わる。詳細な時間は以下の通りである。

11月2日には14時から例祭神事が行われ、その後の伊勢踊り保存会の13人により伊勢踊りが演じられる。拝殿中央に太鼓演奏者が1人座り、その左右に6人ずつ計12人が、手に御幣と歌詞の紙を持ち本殿に向かって立ち、伊勢踊りが始まる。太鼓の演奏に合わせて、踊り手は唄いながら足を交互に出し、調子を取り、神事参列者は踊りを見守る。踊りが終了すると、御神酒と御札が洒られ、参列者は札を受けとり、例祭神事が終了となる。この伊勢踊りは江戸時代初期に宇和島藩領内で伊勢信仰が隆盛した際に始まったものとされる。そして2日夕方には、子ども達による宵宮宝多が夜の町を練り歩

く。主催はおねり保存会で、獅子頭に似た張り子製の宝多（ほた）を各人が持って、家々を回って魔払いをする。

11月3日の5時から卯之刻相撲が行われる。神輿への神霊奉遷に先立って神社拝殿で行われる神事相撲である。立間地区の住民で組織する卯之刻相撲保存会が担う。行司以下力士は、紋付袴の正装で、取組は三番、八幡様を中心に、東・西の地区の神様たちによって行われ、三番目の大関同士が対戦している途中で行司が割って入り「いずれも名人同士にて勝敗決せず、この相撲明年まで預り」の判定し、勝負は決せず引き分けにして、翌年に受け継がれていく。



写真1 卯之刻相撲

7時から八幡神社にて立間地区から出される鹿の子（鹿踊）が奉納される。鹿踊は宇和島・吉田をはじめ、南予地方の旧両藩領内で約90ヶ所に見られる民俗芸能で、宇和島が八頭立て、吉田が七頭立てである。その他はたいてい五ツ鹿である。ももとは仙台から伝播したものである。雄鹿が2頭、雌鹿が1頭、若鹿が2頭（大人が演じる）に小鹿（小学生が演じる）が2頭の合計7頭によって踊られる。鹿頭を被り、胸に太鼓を据えて、赤、青の縞模様の前幕を覆って踊る。雌鹿隠しなど、東北地方と共通する歌詞、リズムが見られ、南予地方を代表する郷土芸能となっている。



写真2 鹿の子

8時30分に神輿の宮出しが行われ、11時から「おねり」が開始される。「おねり」の順番は以下のとおりである。先触れ：四ツ太鼓 宵宮宝多、一番：御用練り、二番：御船、三番：猿田彦・御神餅（裡町三丁目）、四番：練車（裡町一丁目）、五番：宝多（魚棚二丁目）、六番：練車（魚棚二丁目）、七番：練車（裡町二丁目）、八番：練車（本町一丁

第3章 詳細調査報告

目)、九番:七福神(魚棚三丁目)、一〇番:練車(魚棚三丁目)、鹿の子、牛鬼 神輿。以上の順番である。吉田秋祭の人形屋台は古くは「遼車」と表記し、「ねりぐるま」と読まれ、現在では「練車」と書くようになっている。練車の構造としては屋根付き二階建て四輪車で、二階に人形を飾り、一階を幕で覆い、なかで囃子方が奏す屋台となっている。本町一丁目(人形は関羽)、魚棚一丁目(八幡太郎義家、現在はおねりには参加せず、祭り当日は宇和島市役所吉田支所前に飾られる)、魚棚二丁目(太閤秀吉)、魚棚三丁目(恵比寿)、裡町一丁目(武内宿祢)、裡町二丁目(楠木正成)の練車が現在も登場している。練車は収納箱には江戸時代後期の墨書も見られ、200年以上にわたり継承されている。



写真3 練車の組み立てと人形



写真4 おねりの様子

牛鬼は、南予地方独特の造り物で、牛の胴体に鬼の頭で体長7mもある。町内の各家々に首を突っ込み、悪魔払いをしてまわる。担い手は旧立間尻村にあたる元町・鶴間・浅川の自治会が交替でつとめている。

13時から、家中町と町人町の境に位置する桜橋において各練りの披露や走り込みが行われ、おねりは桜橋を渡って、町人町の本町、裡町、魚棚町をとおる、15時30分におねりは終了する。そして16時から住吉神社境内の御旅所神事が行われ、17時30分に宮入りとなって祭りは終了する。



写真5 牛鬼

6. 参考文献

宇和島市教育委員会編 2018『吉田秋祭の神幸行事総合調査報告書』

森正康、大本敬久、宇和島市教育委員会監修 2019『令和元(2019)年吉田秋祭の神幸行事伝承記録』吉田秋祭保存団体協議会

7. 調査日

令和4年11月3日

(大本 敬久)

11. 愛南町のオハケの習俗

別称：一部地域でご神木

伝承地：南宇和郡愛南町の各地

実施時期：11月2日・3日の秋祭りの前後

指定：なし

テーマ：3

1. 地区の概要

南宇和郡愛南町の地域は、元の宇和郡の南部に位置するところから、新たに明治期の郡区町村編成に伴って南宇和郡として分郡された地域に当たる。この南宇和郡地域では、大正初期に当時の郡長の主導による生活改善推進のために秋祭りの日程が地域全体で統合され、今日まで11月3日を中心として実施されている。町の中心部に当たる御荘平城および城辺地区が市街地を形成するほか、近世以来の農山村や本浦から分村した枝浦の農漁村が多く、これら村浦ごとに氏神社が置かれている。

秋祭りは、地区ごとに祭祀される氏神単位に例祭として実施されるが、この内オハケが設けられるのは限定的である。現在もオハケの設置が確認できるのは、御荘平城・城辺緑のほか、一本松地区の広見・中川、西海地区の船越・久家・内泊・中泊・外泊・福浦の地域である。各地区とも急速に過疎化が進んでいるが、当面の維持継承は可能と思われる。また、県下において今日も集中的にオハケの設置と習俗を残存させるのは、この愛南町の地域のみである。

2. 実施場所

愛南町における地区別のオハケの設置場所は大きく二分される。農村部に当たる御荘平城・城辺緑および一本松地域は、神社境内地ないし御旅所近くの田である。これに対し、農漁村として発達した西海地域の各浦は、神社前の地形が埋め立てや護岸工事のために大きく変化しているが、元の浜辺であった辺りに立てられることは共通している。

3. 伝承組織

オハケの設置は、いずれもその年の祭り実施の当番組に当たった地区ないし氏子地域の各部落から出てきたその年の当番の者で担当する。したがって、オハケの呼称については、しだいに伝承が困難になるとともに、一部では形状の変容が進みかけている。

4. 由来伝承

オハケを立てることについての由来伝承は聞かれない。ただし、コロナ禍でオハケが中断されていた理由として、神輿や牛鬼、山車などの祭りの練り物が出ないからオハケも立てないのだとの理解が広く聞かれた。なお、愛南町においては、オハケに関わる文献史料も確認されていない。

5. 実施内容

愛南町におけるオハケは、内陸部と海岸部では設置場所に加えて形状にも大きな差異がある。内陸部のオハケは、孟宗竹の枝を数段残して立てられるが、海岸部では枝を落とした棒状の竹に白木綿を巻き付け、先端に幣串を刺した形式が一般的となる。

城辺緑のオハケ

内陸部の城辺緑では、弓削神社の例祭準備に当たり、10月31日のオタバタテに緑の産直市場前の田に御旅所の施設が設けられるが、これに合わせて隣接地にオハケを立てる（写真1）。オハケは、上部の枝を数段残した高さ10mほどの孟宗竹を立て、根元を杭に固定し、上方より四方に注連縄を引いてシデを垂らす。また、中央には長く白木綿を垂らす。11月3日の午後に神社を出御した2体の神輿は、オハケの周囲を廻ってから御旅所へ入る。御旅所からの還御に際しても、オハケの周囲を廻ってから神社へ向かう。なお、オハケは翌日の4日に片づけられる。なお、オハケを立てる場所は、以前は現在地より200mほど神社寄りの田んぼで、ここをオハケ田と称していたが、圃場整備に伴って現在地に変更された。

御荘平城のオハケ

御荘平城では、11月1日に行われる八幡神社の例祭準備をオハケオロシと称し、この日に社殿前の境内西側の広場に高さ8mほどのオハケ竹が立てられる（写真2）。真竹の上部の枝を数段残し、3方向へしめ縄を引いてシデを垂らし、高さ3mほどの位置で境内の樹木に固定する。オハケの根元は、竹杭を打ち込んで固定する。なお、平城では、例祭当日に神社を出発して地区内を廻っていた神輿や様々な練り物の宮入に際し、先頭に神社へ入る八幡野地区の牛鬼がオハケに体当たりして押し倒すことになっている。

一本松地域のオハケ

旧一本松町の地域では、広見地区と中川地区にオハケが伝承される。広見では、10月30日の祭り準備をミヤブシン(宮普請)と称し、地区内6組より当番の者が出て行く。日枝神社境内の社殿に向かって右側の隅に、高さ3、5mばかりの神の木を立て、上部から3方向に注連縄を引き下ろし、先端には高さ3mほどの笹付き竹を立ててシデを垂らしている。11月3日の例祭神事に続いて神職によりオハケ神事が行われ、代表者が玉串拝礼を行う（写真3）。オハケは、3日の午後に神輿の宮入と前後して取り除けられる。また中川では、熊野神社の例祭に合わせて、社殿南側の境内広場に高さ7～8mほどの笹付きの孟宗竹が立てられ、10mほど離れた境内の樹木や社殿の三方向に注連縄を張って固定している（写真4）。全体的に簡略化が大きく、オハケの名称も失われている。10月30日に立て、11月3日に神輿が竹の周りを左回りに3回廻ってから御旅所へ向かうことになっている。祭りの後、11月4日に倒される。

西海地域のオハケ

一方で海岸部の浜辺（現在は埋め立てられている）に立てられる旧西海町内のオハケは、福浦を除いていずれも先端の枝を切り落とした棒状の竹に白木綿を巻き付け、先端に藁束を取り付けて幣串を4本刺したものが基本形となっている。

第3章 詳細調査報告

船越では、船越若宮神社から下りた町役場支所の広場に高さ7mほどのものが立てられ、先端の藁束には幣串と榊が刺し立てられている。先端には幣串を4本刺し、ここより四方(ほぼ東西南北)に注連縄が張り下ろされて高い位置で竹杭や電柱に固定し、周囲を周回できるようにしてシデが垂らされる。また、オハケの下部にはワラを巻きつけて大きな幣串2本と榊を指し、散米やイリコが供えられる。11月3日の午後、神社を出発した神輿や牛鬼、四つ太鼓などの練り物は、オハケの周囲を左回りに3周したのちに御旅所へと向かう(写真5)。

船越に隣接する久家も同形式のオハケで、久家若宮神社より少し離れた広場に高さ5mほどの白木綿を巻いた竹が立てられ、四方に幣串を立てて注連縄を引き下ろして数本ずつのワラを垂らしシデが付けられている(写真6)。先端部には、ワラ束を縛り付けて榊を取り付けている。

内泊および中泊では、調査に当たった令和4年、5年ともオハケが設けられなかったため、コロナ禍以前の状況を記しておく。内泊の若宮神社では、神社前の漁港の広場に立てる例である。オハケの構造は、孟宗竹の枝を払い落した、高さ7mほどのオハケザオに白木綿を巻き付けて立て、杭に固定して先端より四方(南東・南西・北東・北西)に注連縄を引き下ろす(写真9)。オハケザオの先端には、ワラを束ねたホテをつけて5本の幣串を刺し、下部と四方の注連縄の端にも幣串を立てている。オハケザオの根本は、直径50cmほどに大きめの荒縄で土俵状に囲み、内側には浜の小石を敷き詰めている(写真10)。オハケが立つと、神職が塩祓いをして米を散供し、神事を行う。11月2日のヨミヤ(宵宮)の日に立て、翌3日の午後に神社を出発した練り物のうち、牛鬼が注連縄を切ったところで神輿が倒すことになっている。なお、倒したオハケザオは、付近に納めておき、祭りの終了後に希望者に払い下げられる。漁船のマストに縛り付けて置くと大魚になるといふ。また、オハケザオに巻いた白木綿は、妊婦の腹帯にすると安産になるとされた。

内泊から分村した中泊では、西宮神社前の漁港の広場に立てられる。オハケの大きさや構造は内泊とほぼ同様でオハケの本は土俵状の太い縄で囲み小石が敷かれる。オハケザオの本と四方に引いた注連縄の本には、幣串とともに榊を立てる。なお、中泊では、神輿が神社を出た後に、牛鬼がオハケを倒すことになっている。

さらに枝村である外泊にもオハケが立つ。天満神社の下に位置する外泊集会所の広場に立てられるが、構造はオハケダケと四方に引いた注連縄のみとなり、下部の敷石や荒縄の囲い、白木綿も省略されている。

さて、旧西海町内で少し異なった形態のオハケが立つのが、西海半島先端部の福浦である。若宮神社の参道入口の個人宅の敷地に立てられるが、かつて祭りに四つ太鼓を組み立てていた所とか、鳥居のあった場所だともいふ。高さ9mほどの桧竿に6mばかりの若宮神社の幟旗を立て、竿の上部には笹竹と榊を取り付けている(写真7)。先端部より四方に長く注連縄を引き下ろし、ワラ・シデ・榊を垂らしている。また、

下部を固定した周囲には、およそ1m四方に杭を立てて榊を添えて注連縄を張り巡らし、シデを垂らす(写真8)。内部には、鶏卵大ほどの浜の丸い石を100個余り敷き詰めている。福浦でのオハケの呼称は聞かれなくなっているが、地区を6組に分けたその年の当番組の者が、11月1日に立て、祭り後の4日に倒すことになっている。



写真1 城辺緑のオハケ



写真2 御旺平城 八幡神社のオハケ



写真3 一本松 広見の日枝神社オハケ神事

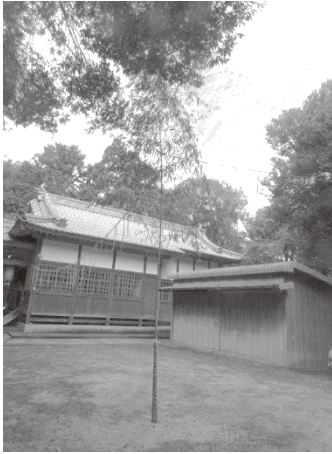


写真4 一本松・中川
熊野神社のオハケ



写真8 福浦
のオハケの下部
構造



写真5 西海・船越のオハケと周囲を廻る神輿や牛鬼



写真6 西海・久家のオハケ



写真9 西海・
内泊のオハケ
(1989年)



写真7 西海・
福浦のオハケ



写真10 内泊のオハケの下部
構造 (1989年)

6. 参考文献

森正康 1990 「愛媛県下の祭りの標示物」『民具マンスリー』23巻1号

7. 調査日

令和4年11月2日、3日、令和5年10月31日、11月3日
(森 正康)

12. ^{ざしきびな}座敷雛

別称：ひなさま

伝承地：八幡浜市穴井

実施時期：4月2日～3日

指定：八幡浜市指定

テーマ：4・12・20

1. 地区の概要

八幡浜市の南部に、宇和海に面する穴井集落がある。江戸時代、宇和島藩の領地であった穴井浦は、明治22年（1889）、市制町村制施行により西宇和郡真穴村となり、昭和30年（1955）、八幡浜市に合併した。現在、真穴地区穴井には209戸、473人が暮らし、就業者の約半数は農業、漁業を生業としている（令和2年（2020）国勢調査）。入り江の常夜燈からは大島や佐田岬半島が一望できる。段々畑で温州みかんの銘柄真穴みかんが栽培され、漁港に養殖筏が並び、絹子網製造会社のある地区である。

2. 実施場所

穴井の雛祭りは家の表座敷に盆栽や石等を配置し、山水の情景の中に雛人形が飾られる。4月2日・3日にお披露目され、家の庭や通りは見物人で賑わう。近年はみかん倉庫等で行われる場合もある。

3. 伝承組織

長女の初節句を迎える家々で親類縁者が集まり、座敷雛がつくられる。製作の中心的な役割を担う人は棟梁と呼ばれ、地元では「ひなさまを建てる」という。穴井集落の各戸で雛祭りにつくられてきた座敷雛は、やがて隣接地の真網代等でもつくられるようになり、平成8年（1996）、真穴座敷雛保存会が組織された。

また、平成15年（2003）には保存会の研究機関として、真穴座敷雛研究会が設立された。

4. 由来伝承

『八幡浜市誌』では、

「この行事がいつごろから始められたかははっきりしないが、土地の古老の話によれば、江戸時代の天明三年（一七八三）村の青年芝居穴井歌舞伎が創設されたころからひな祭りが年々派手になり、穴井歌舞伎の全盛期明治初期に至り現在の座敷雛の形を整えたといわれる。」

とある[1975、P947]。

真穴小学校『開校百周年記念誌「まあな」』では、

「加藤房太郎氏の実母タツノ文久元年生今より一六年前、その人の雛祭りに縁故者後藤某たる者、山より二・三の松の枝やら枯木を持ち帰りそれを雛段に飾りつけたのが、当時世人の好評を博することになった。」

という伝承や大正2年（1913）生まれの「富永ヒサミ氏の雛祭りの写真を見ると背景に屏風や唐紙障子が使われ」とおり、「雛段ごとに雛人形が飾られ、波濤に浸蝕された島石」や「盆栽枯木を配して」いる様子が見て取れると記述されている[1976、P107]。

5. 実施内容

令和3年（2021）7月、T家の県外在住の長男夫婦に女の子が誕生した。令和4年（2022）4月、両親の住む郷里穴井へ帰り、長女の初節句を祝った。

令和4年（2022）1月20日頃から女性達は桜の花づくりを始め、男性達は3月10日頃、山へ竹切りに



写真1 T家長女の座敷雛

行き、木材や幕類等も取り揃え、敷地内に十畳の舞台を設えた。棟梁の構想でテーマを「春爛漫」として、3月20日過ぎには盆栽や石等が配置され、3月30日、山水庭園の情景の中に雛人形が飾られた。緋毛氈を敷いた雛段に内裏雛、官女、五人囃子、隨身等のほか、雛道具が並べられた。脇には尉と姥や市松人形も飾られた。遠くの山々は魚網にタオル等の布を被せて起伏をつくり、着色した大鋸屑で山肌を表現している。里山の田園は粃から育てた稲の苗が使われた。ティッシュペーパーでつくられた桜の花は本物の桜の木に飾り付けられ、中央の池には生きたメダカを泳がせていた。天幕には帯地が使われ、舞台前面の蹴込は笹柄の小襖で目隠しされていた。建具を装飾の小道具として用いる趣向が面白い。

4月2日・3日のお披露目は新型コロナウイルス感染拡大防止のため公表せず、内々で行われた。お供えに菱餅、ひな豆、鯛、伊勢エビ、サザエ、アワビ、味噌とワケギ等が並べられていた。



写真2 座敷雛の製作過程

4月4日、早朝より座敷雛は取り壊される。その後、本来は親戚や手伝いの人達を招き祝宴が催されるが、コロナ禍のため御膳を配り、「ひなあらし」とした。

課題としては集落の人口減少、少子化により伝承の機会が激減している。令和4年は1軒、令和5年は2軒で座敷雛がつけられた。最近では手伝いの関係者も限られ、準備期間も短くなる傾向にあるようだ。また、家屋の建築様式が変わり、座敷や縁側のある家も少なくなっている。一方、みかん倉庫等を利用した座敷雛もつけられるようになってきた。令和5年、「富士春陽」を題材に倉庫でつけられた座敷雛では、中央に柱が立てられ、着物の帯が巻かれていた。座敷と縁側の柱が再現され、広間を見るようであった。

最後に、聞き取り調査で知り得た昭和時代の座敷雛について記録し、結びとする。

昭和22年(1947)に誕生したS家の長女の初節句では、庭園のように設けられた座敷に御殿や雛人形が飾られ、ミッキーマウスの細工を施した垣根が並んでいた。青年時代をアメリカで過ごした父親の手作りで、厚紙で形作られ彩色されていたという(長女本人談)。

昭和40年(1965)に誕生したO家の長女の初節句では、座敷に松の木を配置したところ、雛人形に影が映り、棟梁から相談を受けた男性は10Wと15Wの電気スタンドで、ライトアップの工夫をした。これを手掛けた男性(明治44年(1911)生まれ)によると、間接照明を取り入れた座敷雛になったという。

穴井集落の座敷雛には人々の創意工夫と女の子の誕生を祝い、健やかな成長を祈る心が息づいていた。

6. 参考文献

- 八幡浜市誌編纂会 1975 『八幡浜市誌』 八幡浜市誌編纂会
- 真穴小学校百周年記念事業記念誌委員会 1976 『開校百周年記念誌「まあな」』 八幡浜市立真穴小学校
- 穴井区常夜燈建設委員会 ふるさとを美しくする 1977 『ふるさと讃歌 第二集』
- 明日葉の会 1999 『穴井歳時記』
- 大本敬久 2005 『民俗の知恵—愛媛八幡浜民俗誌—』 創風社出版
- 真穴座敷雛保存会・研究会 2010 『真穴の座敷雛関係資料集』
- 福原敏男 笹原亮二 2014 『造り物の文化史 歴史・民俗・多様性』 勉誠出版
- 是澤博昭 2015 『子供を祝う 端午の節句と雛祭』 淡交社
- 真穴座敷雛保存会・研究会 2015 『真穴の座敷雛関係資料集』
- 中廣和彦 2022 『湊帆の雛祭り』 DVD映像資料

7. 調査日

- 令和4年(2022) 4月2日
令和5年(2023) 3月11日・28日、4月1日・2日

(坂本 真理子)

13. オトウの行事^{ぎょうじ}

別称： 御頭祭・オトウ

伝承地：今治市別宮町

実施時期：6月第1日曜日

指定：無

テーマ：6

1. 地区の概要

今治市別宮町は、今治市の中心街地の中央よりやや北部に位置し、国道317号が地域を貫通する。元の越智郡別宮村に当たり、戸数60戸ほどの農村であったが、日吉村の一大字を経て大正10年(1921)に今治町と合併して市制を施行した。近代以降の今治市街の発達とともに都市化が進み、昭和後期には約1,600世帯に増加した。その後、市街地の空洞化が生じ、令和5年3月現在の人口は1,768人、1,047世帯となっている。

2. 実施場所

オトウ行事は、別宮大山祇神社での参拝行事と境内での記念撮影、ならびにこれに隣接する別宮集会所でオトウワタシの神事と賄いが実施される。もともとは、個人の座敷や庭先に座を組んで行われていたようであるが、戦後は集会所が用いられるようになっていた。近年では、オトウ行事の後、市内の料理屋で会食を実施していたが、コロナ禍により中断している。

3. 伝承組織

別宮大山祇神社は、今治市別宮町3丁目に鎮座する別宮地域の氏神である。大三島に鎮座する大山祇神社の地御前として、和銅5年(712)に祭祀されたと伝える。例祭は5月の第2日曜日であり、その後にはトウモトの引継ぎ行事としてのオトウワタシが、6月の第1日曜日(元は5月第4日曜日)に行われる。また、オトウ行事の加入者は長らく60戸程で維持されてきたが、現在の加入構成員は24戸と激減している。なお、オトウに加入資格として、旧来の構成員であっても、オトウ行事に参加できることが条件に含まれている。

さらにトウモトの任務も、以前とは大きく変容しており、現在の役割は大きく軽減され、以下の事項のみとなっている。

- ①4月に支配人2人とトウモト2人が打ち合わせを行い、オトウの案内状等について決定する。
- ②案内状の返事が届くころに第2回目の打ち合わせを行い、出席の取りまとめとオトウ行事の供物について相談する。

- ③オトウワタシの終了後に、経費の精算をして報告する。

4. 由来伝承

オトウの組織に関する由来伝承は聞かれないが、オトウ連中として「大山積神社御當記録」と題された、慶長9年(1604)以来の「御頭帳」を伝えている。記載内容は、基本的に座元(座本)と寄頭(寄当)の名前を記すのみであるが、天保中期以降には今治地方の社会情勢の概要も記述されるようになる。また、近代には加入者の連名簿も記されており、明治33年(1900)には3戸の新規加入を合わせて60戸の加入者名が記録されている。

なお、近代に入った一時期に賄いが奢侈に流れたため、明治43年(1910)には、「御頭改正規約」を定めてこれを戒めている。さらに大正10年(1921)には、「御頭改革規程」が新たに定められ、より厳密に実施方法を規定している。その他、オトウ行事を実施するための味噌醸造用具や賄いのための大釜・膳椀・大徳利・湯桶などの用具類も所蔵されていたが、近年になり保管場所や使用頻度の喪失により廃棄されてしまった。

5. 実施内容

オトウの当日、午前7:30に男性たちが別宮集会所(中央消防会館)に集合してオトウ祭りの準備を行う。集会所前に幟旗を2本立て、広間の床に祭壇を設ける。祭壇は、床の正面に「大山積神社」の神号軸を掛け、その前に八脚を置いて供物を献じる。供物は、米・酒・魚・餅一重ね・野菜・水と塩の三方6台であった。なお、道具類はオトウ行事用のものが集会所で保管されている。

オトウ行事の関係者が集合すると、先ず午前9時より隣接する神社においてご祈祷が行われる。支配人2人が前列に着座し、次に新旧のトウモト4人、その後ろにオトウの参加者が着座する。神事は、開式太鼓、修祓、献饌、祝詞奏上、玉串拝礼、撤饌、閉式太鼓の順に行われ、還曆以上の関係者の年祝いのご祈祷が併せて行われる。玉串拝礼は、支配人・旧トウモト・新トウモトの順に行われる。

神前でのご祈祷が終了すると、拝殿前で記念写真の撮影が行われ、続いて集会所に移動して、9:40よりオトウワタシ神事が行われる。集会所の12畳の広間の床に設けた祭壇の前に、左座の上座に神職が着座し、その下手に旧トウモト2人が左座、新トウモト2人が右座にて向かい合わせに着席し、祭壇正面の下座に支配人2人が着席する。また、オトウワタシの神酒を注ぐ酌人が参列者席の横に控えて着席する。その他の参列者は、一段下がった板張りの大広間に着席する。

オトウワタシの神事は、修祓、献饌、祝詞奏上の順に行われ、神職・旧トウモト・新トウモトが玉串拝礼を行った後にオトウワタシの儀礼として神酒の拝戴が行われる。酌人が祭壇より神酒を下げ、旧トウモトA→新トウモトA→旧トウモトB→新トウモトB→支配人の順に神酒を拝戴する。この間、謡曲の高砂が謡われる慣例であったが、現在は唄える者がなくなったため、CDに録音されたものが流される。神事は、この後に神饌を撤して終了する。

オトウワタシに続いて、10:00よりオトウの令和4年度総会が開かれる。総会では、オトウ関係者で前回以降に亡くなった関係者への黙祷が捧げられ、中止されていた過去3年分の行事報告がなされ、年祝い該当者に記念品が手渡される。続いて、オトウ会計の報告および監査報告がなされ、異議無く承認された。また、役員(支配人)の改選が諮られ、支配人2人の留任が決定した。さらに、令和5年度のオトウの運営に関して、親睦旅行が予定され、総会を終了した。

オトウ行事が終了すると、幟旗や会場の後片づけをなし、参加者に賄の仕出し膳が配付される。なお、膳には、小餅一重ねとハンペン1つが添えられた。平成19年頃より、集会所での賄を取り止めて市内の料理屋にて会食を行っていたが、コロナ禍以降はこれも中断している。令和5年も会食は中止とし、仕出し膳が配られて解散となった。

6. 参考文献

愛媛県史編さん委員会編 1983 『愛媛県史 民俗上』
記念誌編集委員会(越智悦男) 2012 『大山積神社御
當記録』

7. 調査日

令和5年6月4日

(森 正康)



写真1 新旧のトウヤによるオトウワタシの神酒拝戴



写真2 別宮集会所前に立つ御頭祭の幟



写真3 オトウワタシの祭壇とハンペン(左下)

14. ^{ゆげ} ^{みやざしき} ^{よどのさい} 弓削の宮座式・夜殿祭

別称：弓削の宮座式・夜殿式

伝承地：越智郡上島町弓削佐島

実施時期：10月の3連休

指定：無

テーマ：6

1. 地区の概要

上島町は、25の島々で構成される離島の町であり、瀬戸内海のはぼ中央に位置する。芸予諸島の愛媛県側では最も北東にあり、広島県との県境にある。平成16年10月1日に、弓削町・生名村・岩城村・魚島村の町村合併により誕生した。人口6,509人、3,207世帯（令和2年国勢調査による）。

調査対象地である佐島は弓削地区に含まれる。島の周囲9.8km、面積2.67km²。人口は423人（令和4年12月時点）。弓削島へは弓削大橋により架橋され、生名地区へは生名橋により繋がっている。

2. 実施場所

八幡神社（越智郡上島町弓削佐島638番地）

3. 伝承組織

佐島地区

八幡神社（佐島）

4. 由来伝承

貞享2年（1685）8月「今治領内寺社明細言上書」において、当時の上弓削の高浜八幡神社、下弓削の弓削神社、佐島の八幡神社についての記述が遺されており、これら三社は、それぞれの村の氏神として祭祀され、一定の規模の境内地と社殿を構え、専任の神職、社家が置かれていた。

5. 実施内容

佐島の八幡神社では、10月の3連休に3日間かけて秋祭りが行われる。調査を実施した令和4年（2022）は10月8日・9日・10日に行われた。昔は10月15日に近い土曜日・日曜日・月曜日が秋祭りの開催日であった。いつごろから現在の開催時期になったかは不明である。

初日の朝は、境内の清掃の後、9時から湯立神事が行われる。拝殿の前に注連竹を立て、平釜を据えて湯を沸かし、米と神酒を3度に分けて入れ、両手の笹で湯を撒いて舞を舞う。その後、柄杓で湯を掬い、桶に



写真1 湯立神事（神事後）

3回汲み入れて、これを神前に供える。湯立神事の終了後は、例祭式が行われ、午前は終了となる。

夜7時になると、参拝者が境内に集まり、夜殿祭が開始される。氏参りの神事が行われた後、「おのぼりさん・おくだりさん」と呼ばれる神事が行われる。神社の社殿にて、その年の当屋、区長、地区長、会計、神社総代などの役員と、その他参拝者などが社殿内にて左右に対面の状態で列座し、地区から選ばれた巫女となる2人の子どもが左右の上座から神酒をついでいき、対面した者同士がお互い合眼し、同時に飲んでゆく。下座まで到達すると、巫女がお互いに神酒をついで飲む動作を行い、同じように下座から上座に向かって神酒をついでいく。上座に戻ると、再び巫女がお互いに神酒をついで飲む動作を行い、2人が左右を入れ替わり、再び上座から下座、下座から上座へと神酒がつかれる。これを3回行う（参拝者は計12回神酒を飲む）。神酒を飲む際は、小・中・大の3種類の金杯が



写真2 夜殿祭

用いられて回し飲みが行われる。1回目は小杯、2回目は中杯、3回目は大杯が用いられる。(2回目は、下座から上座、上座から下座へと神酒が注がれる。)

おのぼりさん・おくだりさんの終了後は、参拝者が社殿から拝殿に移動し、散米の神事が行われる。神主は、祝詞を唱えながら東西南北の四方向へ三宝に盛った米を手で散米する。その後、「剣の祓い(つるぎのはらい)」と呼ばれる祝詞を唱えながら、神前に向かって、短刀を使用して散米を行う。



写真3 夜殿祭の散米神事

散米神事の終了後は御霊移しが行われ、1日目の神事は終了となる。終了後は、御霊が御神輿に入ったことを地区に伝えるため、輿丁数名は神社を出て、ホラ貝を吹きながら地区を練り歩く。また、1名ないし2名の当屋による宮番(社殿での寝泊まり)も行われる。宮番は、2日目に神輿が上がってくる18時ごろまで続けられる。

宮座式は、秋祭り3日目の朝に行われる。8時ごろから参拝者による境内の清掃が行われ、その後社殿に集まり、神事が行われる。神事では、夜殿祭と同様に、おのぼりさん・おくだりさんが行われる。夜殿祭では2名の巫女が神酒をついで周ったが、宮座式では参拝者から選ばれた女性2名がこれを務める。



写真4 宮座式(おのぼりさん・おくだりさん)

神事の終了後は、翌年の当屋を決める「クジトリ」と呼ばれるくじ引きが行われる。当屋を経験していな

い氏子の数だけくじが作られ、その中に15の当たりくじが入られる。クジトリの際に、区長が当屋未経験の氏子の名前を読み上げ、その度に旧当屋の方が代理でくじを引いていく。当たりくじが出れば、名前を呼ばれた氏子が新年の当屋となる。15の当たりが出るまでクジトリが続けられる。



写真5 クジトリ

近年は、新型コロナウイルス感染症の流行拡大により、祭りの規模の縮小が行われている。令和4年の秋祭りでは、2日目に時間短縮が行われ、ダンジリの練歩きが中止された。また、夜殿祭・宮座式のおのぼりさん・おくだりさんでは、3種の金杯による神酒の回し飲みは行わず、かわらけを各人に配するなど、感染予防対策のために内容の変更が行われた。

6. 参考文献

愛媛県 1983 『愛媛県史 民俗上』

愛媛県教育委員会 2002 『しまなみ水軍浪漫のみち文化財調査報告書—民俗編—』

有馬啓介・曾根大地編 2020 『弓削島庄総合調査報告書』愛媛県越智郡上島町教育委員会

7. 調査日

令和4年10月8日～10日

(有馬 啓介、曾根 大地)

15. 綾延神社の頭屋制度と例祭行事

別称：田野市（例祭行事） 伝承地：西条市丹原町田野上方、西条市今在家

実施時期：10月第1日曜日～第3日曜日の翌日 指定：西条市指定 テーマ：6

1. 地区の概要

綾延神社の氏子区域は、周桑平野の西部に位置し、中山川の両岸に開けた元の周布（豊）郡田野郷のうち山間部を除いた田園地帯である。近世村の田野上方（南田野・田野村東）・北田野（田野村西）・長野・石経・来見・湯谷口・志川・寺尾・安井・明徳・大頭の11か村に当たる。天明年間の「周布郡寺社堂庵帳」にも、氏子11か村として上記の村名が記される。このうち、大頭村が小松藩に属したほかは全て松山藩領で、同藩の周布郡代官所の庇護を受け、入用には大庄屋の管理する年貢米が綾延米と称して充当された（周布郡手鑑）。近代以降は、氏子地域の村の一部が頭屋制度を離れて独立し、明治16年に長野、昭和29年に大頭、昭和40年代に明徳のうちの安養寺地区が、村としては氏子を離れた。また、祭り行事の主たる部分も、昭和33年より、当時の中川村・石根村地域7大字が秋祭りのトウモトの担当から外れた。以後は、神社の地元当たる田野地区2大字のみがトウモトを務めることとなり、田野上方(230戸)と北田野(180戸)が交互に隔年担当し、今日に至っている。なお、田野上方地域をさらに東西に2分して、それぞれ4年に一度ずつトウモトを担当している。

2. 実施場所

令和4年は、田野上方西自治会(110戸)がトウモトに当たった。自治会では、神社の上(三天・馬場)と下(宮下・古市)に地域を二分しており、この順番によると、宮下部落(26戸)・古市1部落(14戸)・古市2部落(5戸)より頭屋を選出する廻りとなる。また前回も古市1部落から選定したので、今回は宮下部落より選定することとなった。

また、祭神のうちの一柱とされる綾延姫命の漂着伝承地である西条市今在家の黒須賀の浜は、綾延神社より東8kmに位置し、現在は干拓により内陸の水田地帯となっている。例祭行事に深く関与する汐崎(嶋崎)家一族は、黒須賀より1kmほど離れた今在家の集落中央部に居住する。なお、汐崎離を取る場所も、干拓による影響を受けて今在家の海浜から広江川河口へ移動し、さらに現在は東予港対岸に当たる広江地区の産業道路沿いの遠浅海岸で行われている。

3. 伝承組織

綾延神社の氏子区域を指して、人々は江戸時代より地域の米の収穫高から「六千石」と称してきた。氏子11か村を村の石高千石を基準に6つの地域に区分し、単独でほぼ千石を産する田野上方・北田野・長野・大頭の他は、3か村ないし4か村で輪番にトウモトを務める仕組みとなっていた。神社に掲げられていた「六千石頭元順番」の板書によると、「巳亥 田野村西(田野上方)、午子 田野村東(北田野)、未丑 長野村、申寅 大頭村、酉卯 明徳村・安井村・寺尾村、戌辰 志川村・湯屋口村・来見村・石経村」と定められていた。

また、氏子11か村のうち、大頭村は東部が吉田郷に、来見村は北部が池田郷にまたがったが、いずれも村としては綾延神社の氏子として位置づけられた。さらに各村は、村の石高に応じて年々の祭礼費を

負担するなどして頭屋祭祀を担うとともに、定期的にトウモトを務め、その内より頭屋を選定した。

4. 由来伝承

当社の祭神の一神とされる綾延媛命は、往古に瀬戸内海を漂流して西条市今在家の浜に漂着し、土地の旧家である汐崎家の先祖を迎えられ、田野の地で綾織の技術を伝え、亡くなったとされる。人々は、その徳を慕って墓辺に祠を建立したのが創祀と伝えられる。この由来伝承により、関係者は現在も例祭に際して祭神の漂着地近くで汐崎離を取って祭祀を行い、所縁の汐崎本家を訪問する慣例が続く。

なお、汐崎氏系図によると、同氏は乎知氏の支流の一つで、神功皇后に仕えて朝鮮半島に出陣し、皇后は志神天皇を出産後とともに都への帰途に立ち寄られたと伝える。これによって今在家に応神宮を祭祀し、後に田野郷へ遷して綾延八幡宮と称し、汐崎氏が代々の神主職を務めたと系図は伝える。豊臣秀吉の四国攻めによって敗走し、故地の今在家に帰農したとする。

また、八幡宮を勧請したことで中世末から近世には近隣の道満寺のちに浄明寺(真言宗)を別当寺として付属し、神仏習合した祭祀儀礼が行われた。頭屋制度に基づく頭屋の祭祀儀礼とお仮屋の設置を継続するとともに、氏子区域外の特定旧家が深く関与する祭祀が継続し、近代以降も神仏が分離した以外は、ほぼそのままの祭祀形態を今日に伝えている。なお、綾延神社の例祭に関する文献資料は、浄明寺に伝わるころの寛永5年(1628)に道満寺によりまとめられた「綾延八幡宮祭祀御神事定式」の写本が最古である。

5. 実施内容

頭屋の選定 令和4年に綾延神社大祭のトウモトが当たっている田野上方西自治会では、先ず令和3年末の自治会役員会にてこのことが確認された。これまでの慣例によると宮下部落から頭屋を選定する見込みであることから、部落の正月「初寄り」(1月9日開催)にてその旨が部落内にも伝えられた。その後、現世代の中で頭屋を経験していない家々より、適当であると思われる家を選定して部落長が引き受け方を打診し、候補を一戸に絞り込んだ。

また、5月23日開催の田野上方西自治会総会にて令和4年大祭のトウモト奉仕に関する協力が自治会内に改めて依頼された。こうして6月には、大安吉日を選んで自治会長・部落長・協議員が頭屋の予定者として絞り込んだS家父子宅を訪問し、正式に依頼するとともに了解を得た。頭屋の選出結果については、7月土用の定例の宮下部落会にて報告され、部落長より頭元地区における頭屋部落としての中心的な対応方が要請された。

設えの準備作業 8月に入ると、注連縄に用いる稲わらの青刈りを行い、丹原文化会館駐車場にて天日干しを行う。その後にはわらの選別作業を行ってしめ縄用の材料を整えた。

9月に入ると頭元地区として戸別徴収する祭典費の金額を3,000円と決定し、部落ごとに協議員によって集金がなされた。さらに18日には、頭元役員および神社総代など関係者が綾延神社社務所に集まり、

しめ縄ない作業を行った。また、榊指し神事に用いる俵およびしめ竹の根元を巻くためのワラ薦5枚も編み上げた。

10月1日には、頭屋の注連上げに用いる真竹の伐採と搬出・搬送作業を行う。なお、伐採した竹が長すぎて頭屋門口の電線に接触するため、改めて近隣の竹藪より現場に合致する高さ10メートルの孟宗竹を伐り出した。また、榊指し神事に用いる高さ2メートル弱の大榊を宮下部落の提供者方にて伐り取り、水に浸けおく。

頭屋の注連上げおよび榊指し神事 10月第1日曜日の2日には、午前8時に宮下集会所に集合したのち、頭屋のS家において榊指し神事および御飯屋の舗設と注連上げを行う。お飯屋は組み立て式として平成14年に復活したもので、神社より運び込む。

頭人を務めるのはS家の当主であるが、頭屋の場所設定は在来の日本建築である母屋の息子宅が当てられた。南面する座敷の真上の棟の両側に藁を束ねた直径50センチほどの俵を置き、棟の上にも俵を置いて、これに榊も南面させて指し立て、四方に針金を引いて固定する。最後に宮司が榊に御幣と麻を結び付けて完了となる。また、座敷の南前の軒下には、お飯屋を組み立てて日々の祭祀の場とする。お飯屋は、間口1.8メートル、奥行き1.5メートル、棟高2メートルの杉皮葺きで、周囲は板囲いで、前面のみ上半分が開放されて幕が張られる。なお、お飯屋の内部には10cmほどに砂を敷き、奥側には柵が設けられている。お飯屋は元々、毎年新たに作り替えたものであり、明治42年の規定では、「仮宮ハ藁囲ニシテ長五尺巾四尺ノモノヲ建設スル事」とあり、稲干し用のいなきの足などを骨組みにし、周囲をわら薦で囲い、屋根はわら葺き若しくは杉皮葺きのものであった。昭和36年を最後に途絶えていたが、平成14年に文化庁の助成事業として、継続使用のできる組み立て式として現在のお飯屋を再興し、使用している。



写真1 頭屋のお飯屋と棟に指された榊

また、母屋西側の門柱の傍に注連竹を立て、根元部分には砂を詰めた俵を設けている。注連竹は、中ほどより左右それぞれ三方向に往來の縄を引き、固定する。なお、榊指しと注連上げは、元は別の行事で日程も異なっていたが、昭和中期より現在のように注連上げの日程を早め、榊指しに合わせて行っている。

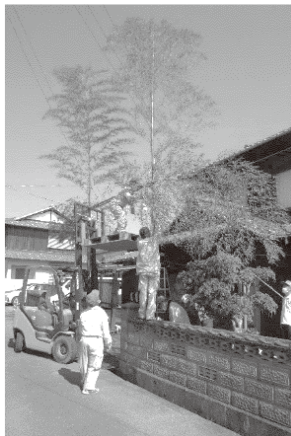


写真2 頭屋の注連上げ風景

頭屋の準備が整うと、お飯屋に神饌を供え、関係者が参列して宮司による綾延神社の神霊の頭屋への勧請儀礼が行われ、祝詞が奏せられ、頭屋および頭元代表者による玉串拝礼がなされる。なお、毎日の供物として、この日以降、祭りの終了するまで頭屋の家人によって洗米1合を13枚の土器に盛り別けて供える。土器13枚は、綾延神社に祀られる祭神の数に境内末社の数を足したものとされる。

田野市原の草刈りと清掃 10月第二日曜日の9日には、午前8時より、神社の地元である宮下部落・古市部落において御旅所の草刈りを行った。総勢40名余りにて、午前中いっぱいをして御旅所広場7,500㎡ほどの除草と刈り草集め、清掃作業を行った。お旅所は、祭礼市が立ったことから、一般人々は「市原」ないし「田野市原」と呼称しており、神社総代会による春草刈り、馬場・三天部落による夏草刈り、および宮下・古市部落による祭り前の秋草刈りによって維持管理されている。

汐垢離取りおよび汐崎家訪問 10月第2日曜日の翌日10日(スポーツの日)の午後1時30分、宮司・頭屋・頭元代表者(自治会長)・駕輿丁人代表・総代会代表者・青年部代表者6名が神社に集合し、西条市今在家の浜(東予港対岸の西条市広江の海岸)へ汐垢離を取りに出かける。宮司および駕輿丁人代表と青年部代表者が津姿にて海に入り、禊を行って身を清めるとともに、祭り当日に駕輿丁人の汐水祓いに用いる汐水を一升瓶に汲み帰る。汐垢離に続いて、祭神である綾延姫命の漂着伝承地(今在家黒須賀)の若宮社および今在家の集落内に祭祀される応神宮にて神事を行う。その後、祭神である綾延姫命を黒須賀の浜で迎え、田野郷まで案内したとされる、ゆかりの汐崎・塩崎家の本家を訪問する。



写真3 今在家の海岸で汐垢離取り

汐崎本家では、玄関にて潮水にて浄めたのち、本家当主・子息・および分家代表者の出迎えを受ける。着座後に宮司より恒例に基づく訪問の旨が述べられ、頭屋・頭元関係者等の紹介がなされる。続いて、本家当主より汐崎家側の紹介がなされた。挨拶に続いて、頭元代表者より恒例の三つ物(米・酒・肴)として、大重に入れた米3升、清酒2本、肴料2万円を汐崎本家へ納める。汐崎家では、これを祭壇に供え、宮司による神事が執り行われる。座敷の床に設けられた祭壇には、綾延神社の掛け軸が掛けられ、汐崎本家の系図および伝来の鈴が祀られている。神事では、汐崎家の祖先に例祭が無事に執り行われる旨が祈願され、祓いを修して順に玉串拝礼を行う。神事に続いて宮司の手によって巻子および冊子になった系図の開帳が行われ、綾延神社と汐崎本家の関係が説明されたのち、汐崎・塩崎家に対して例祭への参列案内がなされる。その後、汐崎本家より宴席が設けられて賄を受

第3章 詳細調査報告

け、懇親を深めたのち夕刻に神社へ帰った。なお、汐崎本家では、このとき以外の系図の開帳を禁じている。



写真4 汐崎本家での神事

神社の注連上げ・幟立て・提灯吊り 10月13日の午前8時より、当年の頭屋選出地域である宮下・古市部落より40名ほどと、氏子地域の神社総代会よりも30名余りの総勢70名ばかりにより神社および御旅所、境内末社のシメアゲ、参道の幟立て、神社の清掃・雑巾がけ、提灯吊りや幕張り、しめ縄の取り替えがなされた。コロナ禍もあり、今年も幟は例年の半分の9対・18本のみが立てられた。注連竹は、高さ12、3mほどの真竹を5m幅で2本立て、これに8mほどの横竹を高さ5mほどの位置に渡して固定したもので、これに左縄・右縄2本を合わせた注連縄（これを綾じめと称している）が張り渡され、4垂のシデと3本の榊の枝が取り付けられる。神社の神門前とお旅所のお飯屋前の決まった石柱に設置される。

作業分担は、神社の神門より外側の準備を頭元地区で担当し、境内は神社総代会が担当して行うことになっている。最後に300mの参道を竹箒で掃き清めて外部の準備を終えると、神輿を神輿蔵から出して掃除と飾りつけを行い、拝殿に据えて正午過ぎに総ての準備を終了した。

なお、この日に地元の酒造会社（西条市周布の成龍西造）に醸造を依頼している、当年の祭りに供える濁り酒（神かぐら）も届けられた。これも、明治期の酒税法制定までは頭元にて濁酒を醸造していたが、甘酒となり、昭和以降は中断していたものを、平成になって現在の方法に改めた。

宵宮祭・神酒の口開き 10月14日の午後7時より宵宮祭が行われ、頭屋・頭元関係者・神社総代や氏子ら30名ほどが参列した。宵宮神事に併せ、神酒口開き神事として今年醸造した濁り酒を神前に供えた後に宮司と頭屋で拝戴する。その後小学生の巫女4人による鈴神楽が奉奏され、参列者が玉串拝礼する。なお、今年は、例年行っている殿中奴と獅子舞の奉納も行われなかった。

宵宮神事に続いて、翌日の神輿の氏子区域（六千石）渡御である「郷廻り」のために神輿前方の鳥居に榊を取り付け、本殿より「神霊移しの儀」が行われたのち、社殿の戸締りをして翌朝の宮出し準備を終えた。

神輿の郷廻り 10月15日（土）の午前6時40分に頭元関係者および神社総代らが集まり、田野郷六千石の郷廻りのための神輿の宮出しを行う。郷廻りの行列は、先導の軽四トラックに太鼓を積み、続いて1トン車に大神輿を積載し、次いで小神輿を積載した軽四トラック、さらに供奉の神職を乗せたワゴン車および神社総代の乗る乗用車が続く

編成で構成される。7時40分に神社を出発し、8時の小松町明徳のお旅所から始まり、同安井、丹原町寺尾・志川・湯谷口・来見・石経のお旅所を30分間隔で廻り、それぞれに神事を行って代表者による玉串拝礼と参列者への御幣および神酒拝戴および神札の配布がなされた。その後、一旦神社に戻って昼食を取る。午後は0時40分より地元の田野上方・北田野の15集落を古市2・古市1・宮下・福田・光下田・筋違・辻堂・八反地・土居・国広・北野・奥明・三天・馬場の順に廻り、夕刻5時に神社に戻り、一旦宮入となる。午後からの田野地区では、田野上方・北田野の上・下で1か所ずつの御神楽所が取られて神事を行うが、その他は修祓と玉串拝礼、御幣および神酒拝戴のみとなる。また、途中に協賛企業への神輿の立ち寄りもある。宮入後は、翌日の例祭式参列者の座席確保のために、神輿は一旦、神輿蔵に移される。その後に神職により例祭式のための諸準備が調えられる。

なお、御旅所神幸祭に先立つ変則的な神輿の郷廻りは、氏子地域の要望により近世末に始まったもので、元々はお旅所への神幸のみであった。

また、頭元の関係者は神輿が郷廻りを行っている間に、翌日の田野市において参拝者に配る餅の袋詰めを行うとともに、例祭式および御旅所神事に供えられる餅として、一升5合餅を2重ね、境内末社などへの1合餅を10重ね準備し、新米2升とともに夕刻までに神社へ届けることになっている。

例祭式 16日には、午前8時前より、神職・頭元地区や総代会関係者が神社に集まり、境内の清掃や例祭式のための準備を整える。午前9時30分に煙火2発が上がり、参列者50名ほどが社務所前の祓い所に整列し、修祓ののち神社へ行列にて参進する。社殿では、汐崎本家および分家代表者が上座に着席し、続いて頭屋・総代会長が神職と対面して着座する。各自治会代表者以下、各自治会の役員・神社総代・駕輿丁人・奴連中・獅子連代表など80名ほどが拝殿に参列した。

10時より例祭式の神事が斎行され、引き続き11時より神輿を拝殿前に据えて神霊が移される。

頭屋神幸祭 神輿の出御準備が整うと、獅子舞・殿中奴の順に奉納されて、獅子・奴とともに榊台・大神輿・小神輿の順で200mほど離れた頭屋へ向かう。

令和4年は、コロナ禍でもあり、台車を用いた渡御となる。今年は頭屋父子の家の間の広庭に神輿が据えられ、頭屋の神事と鈴神楽の奏進が行われた。また、神事の前後には、獅子舞と殿中奴が奉納された。なお、神事を行っている間に獅子連中や奴連中、神輿のカヨチョウニン（駕輿丁人）や関係者は昼食を取り、再び神社へ戻って神輿を拝殿前に据え直し、午後1時の宮出しに備える。

なお、御旅所へ向かう前に頭屋への神幸が行われるのは、昭和30年代以降のことで、元は郷廻りに合わせて立ち寄っていた。また、昼食の賄いも頭元地区から神社へ運んでいたものが、頭屋への神幸を兼ねて頭屋で昼食を摂るようになったものである。

御旅所神幸祭（田野市） 午後1時の煙火2発を合図に神門より獅子の走り込みが始まる。大太鼓・締め太鼓に合わせ、梵天を持った二人のなぶり子に操られた雌雄二頭の獅子が神輿の前まで練り込んで来る。なぶり子は小学校低学年の男児で、赤い女兒の着物を着て、たすき掛けの帯を後ろに垂らし、わらじ履きである。獅子はムカデ獅子で、ユタンには通常6～7人が入るが、コロナ禍のために今年は4人

程度に減らして行われた。終わると、獅子は社殿を右回りに一周する。



写真5 宮出し獅子の走り込み

続いて、神門前より殿中奴が走り込んで来る。今年は、お箱(狭み箱)2人、長刀1人、大鳥毛2人、小鳥毛2人、白毛2人、黒毛1人で正規の編成(白毛・黒毛とも4人)には足りなかった。先ず、神輿の前でお箱2人が肩を揃えてゆっくりとした仕草で演じる。続いて、腰を落として控えていた長刀および毛槍は、長刀の先導に合わせて、大鳥毛以下の者が順に立ち上がり、毛槍を右腰後方に構え持つ。「えーよいとなー」「えーしーのえー」の掛け声を長刀と毛槍が交互に掛け合いながら演じる。これを2度繰り返して終了となり、獅子と同様に社殿を一周する。

その後、獅子と奴は神門の内側で外を向けて同様に演じ、終わると神門をくぐって参道へと進んでいく。奴は、神門を出るに際して、毛槍を高く擡げ上げて倒しながら肩に乗せ、姿勢を低くして神門を走って潜り抜ける所作を行う。これをモンクグリ(門潜り)と称し、毛槍を遣うなかで一番の見せ場となっている。



写真6 宮出し殿中奴奉納

獅子・奴が門を潜って参道に出ると、神輿が出御となる。子ども2名ずつに担がれた一対の轎台を先頭に、大神輿・小神輿の順に社殿を一周し、神門を潜って参道へと出て行く。参道に出ると、コロナ禍のために今年は台車を用いた少人数の運行となった。神輿の後方には、先導神職・宮司・供奉神職・巫女、汐崎家・頭屋・氏子10自治会の代表者が御幣を持って続き、神社総代により威儀物として菅のサシバ1対・紫のサシバ1対、台傘・立傘が奉持されてこれに続く供奉行列が整えられ、300mの参道をお旅所(通称、田野市原)までゆっくりと1時間余りかけて進む。途中、境内に入れなかったダンジリが合流し、最後尾に付く。御旅所までの道中、注連石の場所で遣う獅子は、シメノモトと決まっており、ここではなぶり子は御幣を持って踊ることになっている。これより獅子・奴が数十mごとに演じられ、御旅所入口の通称「ドバシ(土橋)」の手前で奴は一旦立ち止まる。例年ならば、神輿は、先に進めないで奴を突っ切ろうと突入するが、当年は台車を用いていることから形式のみとなり、奴は毛槍棒でこれを押し

返す所作が演じられた。その後、殿中奴が演じられて鳥居を潜り、神輿も御旅所へと進み、注連竹を潜ってお仮屋内部に安置される。中央に大神輿、向かって左に小神輿、威儀物などは大神輿にもたせ掛ける。轎台は入口左右に置かれ、毛槍等は、御仮屋にもたせ掛ける。

お仮屋に安置された神輿に対して、獅子舞と殿中奴が御旅所入り口の注連竹から走り込んで奉納される。この間、神職により御旅所神事の準備がなされ、供奉した関係者50名ほどは、お仮屋前の長椅子に着席して、御旅所神事が斎行され、鈴神楽の巫女舞や代表者による玉串拝礼がなされる。神事に続いて、お仮屋西側の専用土俵で奉納相撲が行われるが、今年はコロナ禍により、じゃんけんによる勝負となった。東側の広場では、例年は獅子舞の競演がなされるが、今年はお道前太鼓の奉納演奏のみとなった。御旅所での賑わい行事に続いて、餅撒き・菓子撒きが行われるが、これもコロナ禍を考慮して、頭元が用意した3斗余りの餅と3万円分の袋菓子が参拝者に配られた。続いて、還御に当たり獅子舞・殿中奴がお仮屋前にて入口の注連竹に向かって演じられ、神輿の宮入となる。

還幸祭 行列は、足早に神社へと帰り、汐崎家・頭屋・頭元代表者が参列して還幸祭が行われた。神輿を拝殿内に据えて神霊が本殿に還御したのち、汐崎家および頭屋が玉串拝礼を行い、終了後に最後の獅子舞と殿中奴が奉納された。続いて宮入の投げ菓子が、これもコロナ禍のため参拝者に配付されて神幸行事を終了した。なお、宮入後には駕輿丁人・奴連中・獅子連中には、神札と紅白餅が配られる。

また、例祭式および神幸行事の終了後、汐崎家に対して軒数分の神札と神前に供えられていた1升5合餅一重が下げ渡される。分家の代表者が餅を切り分けて神札とともに全ての汐崎・塩崎家(この年は20戸)に分与される。

幟倒し・注連下ろし 例祭翌日の17日の午前8時に頭元役員・神社総代および準備に当たらなかった地域(馬場・三天部落)の人々が集まり、幟倒しや注連竹の後片付け(注連下ろし)を行った。先に注連竹を下ろし、幟は朝日に当てて夜露を乾かした後に倒す。神社境内の提灯の片づけや清掃は総代会が担当し、注連竹などは、お焚き上げの場所へ運ばれた。神輿も飾りを取り除いて点検し、覆いを掛けて神輿蔵に収納する。また、駕輿丁人や奴連中・供奉者の衣装を仕分けして確認し、クリーニングに出す準備を行った。こうして、神社や参道・御旅所の片づけが11時前に終了すると、続いて頭屋の注連下ろしとなる。頭元地区役員が参列し、宮司により、お仮屋に奉斎する神霊を神社へ奉遷する神事がなされた後、注連竹を倒し、棟の榑や俵を取り除けて下ろし、お仮屋を解体し神社の神具庫へ収納して、正午過ぎに終了となった。

6. 参考文献

- 愛媛県史編さん委員会編 1983 『愛媛県史 民俗上』
- 愛媛県史編さん委員会編 1984 『愛媛県史 資料編 学問・宗教』
- 森正康 1990 「愛媛県下の祭りの標示物」『民具マンスリー』23巻1号
- 森正康 2021 「近世周布郡における神仏習合と分離の展開」『小松史談』148号

7. 調査日

令和4年10月2日、10日、14日、15日、16日、17日

(森 正康)

16. ^{かぶまつ}株祭り

別称：無

伝承地：松山市中島大浦・小浜・神浦・睦月

実施時期：各株の祭礼日等

指定：無

テーマ：イ

1. 地区の概要

現在、株祭りが行われているのは、旧中島町の中島大浦・小浜・神浦・睦月地区で、睦月地区以外は、中世の忽那嶋東浦に属した地域である。旧中島町の人口は3,079人（令和5年8月時点）。

2. 実施場所

各株の祖先を祀る祠や石碑の前で、神事などが行われる。場所は、各株によって異なる。

3. 伝承組織

先祖を同じくする者の同族組織で、特に明文化された規約等はないようで、代表者や世話役は、慣例により、数年ごとに交代する。

昭和42年（1967）頃の調査では、中島大浦に15株、小浜に数株、睦月に25株あったとされるが、平成25年（2013）時点では、中島大浦に9株、小浜に3株あったが、住民の高齢化等により、令和4年（2022）時点で、実際に株祭りを行っているのは、中島大浦が5株、小浜が2株に減っている。神浦や睦月でも、同様の株祭りを行っているらしいが、詳細は不明である。

近年の過疎化等により、存続が危ぶまれる株組織も多い。

4. 由来伝承

株祭りの由来については、今のところ、明文化された古文書等は確認されていない。しかし、各株とも、先祖を同じくする一族の祭りであると固く信じられている。遅くとも、江戸時代の終わり頃には、株祭りが行われていた可能性があり、さらには、中世の忽那氏との関連が注目される株もある。



写真1 祖霊を祀る石碑（しめ縄をはる前）



写真2 宮司による祖霊を祀る神事

5. 実施内容

株祭りは、毎年、祖霊を祀る祠や石碑等の前で行われ、祭礼日は各株によって異なる。各株の祭礼日は、概ね決まってはいるが、最近では、関係者の都合等により、祭礼日に近い日などに、株祭りを行う株も多い。

各株の世話役等は、株祭りの実施日時等を、関係者に通知し、株祭り前に、供物等を準備する。

祭礼の主な手順は、しめ縄・御幣の交換、宮司によるお祓い・祝詞の後、参加者による玉串の奉納へと続き、最後は、世話役の家などで、祖霊の位牌参拝・直会となるが、近年は、新型コロナウイルスの流行により、直会中止とする株が多い。

現在の株祭りは、神社の宮司による神事として行われるが、昭和42年（1967）頃には、ごく少数の株では、お寺の僧侶による仏事として行われていたところもあった。

6. 参考文献

愛媛大学農学部附属農業高等学校郷土研究部 1968
「忽那諸島の民俗」愛媛大学農学部附属農業高等学校郷土研究部 部報8号

7. 調査日

令和4年5月7日（写真も同日）

（能田 筆和）

17. アメリカごもり

別称：アメリカ講・萬歳講

伝承地：八幡浜市真網代

実施時期：1月26日（令和5年）

指定：無

テーマ：イ

1. 地区の概要

八幡浜市の南部。宇和海に面し、「真穴みかん」で全国的に知られる程、柑橘栽培が盛んである。人口631人、204世帯（令和4年）。

2. 実施場所

真網代の氏神である住吉神社で行われる。

3. 伝承組織

真網代出身の海外移住者の関係世帯が当番制で世話役を担当し、出席者も100人を超えていたが、世代交代が進むにつれて徐々に減少し、平成8年から地元の地域文化振興協議会「北針」が伝統行事継承のため、移住者関係世帯に代わって実施役を引き受けている。

4. 由来伝承

明治30年頃から真網代からアメリカ西海岸に渡航する移民が増加した。長男が真網代で家を嗣いで次男三男が経済的な理由から渡航する者が多かった。大正時代にはアメリカで排斥運動が高まり、それでも密航という形でのアメリカ渡航が相次いだ。隣の穴井地区では明治38年（1905）にアメリカ渡航者の家族を中心に渡航者の無事を祈るアメリカ講（萬歳講（ばんざいこう））が始まった。家族が毎年正月、5月、9月の3回、天満神社に集まって御守をもらって、アメリカの親族の元に送っていた。真網代では昭和17年（1942）以前から「アメリカごもり」が住吉神社で行われている。明治時代に始まったという説もある。現在も続いており、いまなおアメリカの親族に御守を送っている。



写真1 アメリカごもりの神事

5. 実施内容

真網代の住吉神社で毎年1月下旬から2月の週末（以前は旧暦1月23日）に、地区出身の海外移住者とその家族、子孫の健康



写真2 渡航者に渡す御守

と安全を祈願する行事である。

移住者の多くは帰国、帰郷しているが、帰国後はアメリカの文化や産業、生活様式など進歩的なものを真網代に取り入れたことが多かった。その一つに農道の整備がある。昭和8年に渡航経験者の寄付や指導で着工し、その距離は全長18kmにも及び、この農道が急傾斜地での柑橘農業の発展の礎にもなったと言われている。

1月26日は、10時30分に家族、親族に海外渡航者やその子孫が居る住民6名と神社総代、地区役員らが住



写真3 直会

吉神社に集まり、海外渡航者のいる住民の名簿を基に、最近の状況を確認して、名簿を更新する。11時に神事が始まり、11時15分に終了する。そして御守が配られ、その御守を海外渡航者やその子孫に送る。その後に、直会が始まり、飲食しながら互いの渡航者たちの様子について情報交換している。

6. 参考文献

愛媛県史編さん委員会編 1988『愛媛県史社会経済5 社会』愛媛県

7. 調査日

令和4年8月14日

（大本 敬久）

18. いもたき

別称：無

伝承地：大洲市菅田町村島区

実施時期：9月下旬の土曜日

指定：無

テーマ：5・8

1. 地区の概要

いもたきが行われる菅田町村島区は、大洲市の中心市街地から肱川沿いに約9km遡った場所で、神南山及び富士山の北部に位置する菅田地区のうち、肱川左岸の山裾に位置する集落である。集落は、現在65世帯126人が居住している。

また、肱川下流左岸に位置する下須戒にある郷区でも実施されている。

2. 実施場所

村島区はいもたきは、集落中央部に位置する村島集会所（村島公会堂）で行われている。郷区は大和公民館で行われている。

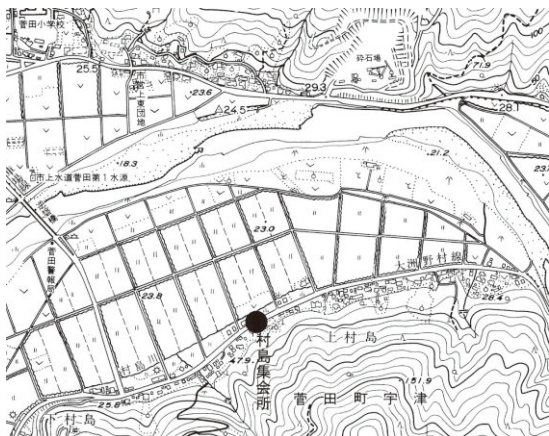


図1 村上集会所位置図（大洲市都市計画図部分）

3. 伝承組織

村島区では、上流部から下流部にかけて4班（約15世帯前後）に区分し、9月下旬の土曜日にそれぞれの班ごとで実施されている。郷区においては、9月第3日曜日に5つの区の住民約100名が集まり実施されている。なお、新型コロナウイルス感染症の影響によりこの数年は開催されていない。

4. 由来伝承

元々、区の各班では日帰り旅行を実施していたが、区内住民のコミュニティーを維持するために、大洲地域の各家庭で食されているいもたきを約45年前から

各班で行うこととされ、隔年で芋炊きと忘年会を実施するようになった。

5. 実施内容

【準備】

前日までに区内の作付者からいもたきに使用する里芋の調達を行う。

11時頃

班の班長及び副班長が中心となって、機械を使用した芋洗いをを行うほか、市内店舗から具材に使用する食材の買い出しを行う。

購入する食材は、油揚げ、椎茸、コンニャク、鶏肉、ハスイモである。

なお、郷区では、里芋以外に油揚げ、コンニャク、鶏肉に白玉団子が具材として加えられている。

14時頃

班内の女性を中心となって、いもたきの調理や、机、椅子出しなどの会場準備を行う。鍋数は参加人数にもよるが、大鍋2つに分けて作る。大鍋には、醤油をベースとした出汁に調理した里芋などの食材を入れて煮込む。

18時30分

班の家族約15世帯25人ほどが集会所に集まり、会食が始まる。

会食では、いもたき以外に地元農家の人が収穫した野菜を中心に白和え、枝豆、練物（蒲鉾、じゃこ天等）等のほかに乾き物が添えられる。

21時頃

会食が終了する。食器、机等の片付けは参加者全員で行う。残り物は、各世帯が持ち帰る。

6. 参考文献

大洲市誌編纂会 1996 『増補改訂版 大洲市誌 上巻』

7. 調査日

令和5年10月

（白石 尚寛）

19. 御面渡御^{おめんとぎよ}

別称：御面渡御祭

伝承地：東温市牛渕及び野田

実施時期：12月20日

指定：無

テーマ：9

1. 地区の概要

伝承地の東温市牛渕地区及び野田地区は重信川が形成する扇状地底部に位置し、田園風景を残しつつも高度経済成長期から宅地化が進み、近年は商業施設等の進出が目立っている。令和2年10月の世帯数は1,035世帯、人口は5,246人(東温市ホームページ参照)。

2. 実施場所

- (1) 神事：浮嶋神社と徳威三嶋宮
- (2) 渡御：神社間の道路(東温市牛渕～野田 約1.6km)

3. 伝承組織

- (1) 浮嶋神社、徳威三嶋宮
- (2) 浮嶋神社氏子(牛渕、牛渕団地、上樋各地区)
- (3) 徳威三嶋宮氏子(南野田、北野田、新村、中野各地区)
- (4) 浮嶋神社、徳威三嶋宮各総代会

4. 由来伝承

浮嶋神社宮司家には『浮穴郡牛渕村三社御面之記録』や松山藩寺社奉行発行の『御面御定書』など御面に関する古記録が多数現存し、その由来や渡御祭の経緯について詳細に伝えられている。

それら資料によると、御面は、伊予国主河野氏が海上から授かったという伝承を持ち、松山藩が催す祈雨祭に欠かせない神の依代として崇敬を集めてきた。河野氏滅亡後、御面は久米郡河之内村雨籠大明神(現東温市河之内)に納められていたが、その社家が断絶したとき、姻戚関係のあった牛渕村の三嶋宮(現・浮嶋神社)の社家が引き受け、同神社で祀られることになった。



写真1 浮嶋神社拜殿 (奥に中殿と本殿)

ところが、同神社社家が分家し、野田村に造営された三嶋宮(現・徳威三嶋宮)の社家を新たに興した際に、御面も牛渕村三嶋宮から野田村三嶋宮へ移されたという。牛渕村三嶋宮の社家は野田村三嶋宮側へ御面の返還を請求したが、実現せず、松山藩寺社奉行に訴え出るようになった。

享保17年(1732)5月、松山藩は両社家に対し、12月20日を期限に御面を一旦牛渕村三嶋宮に渡し、以降は1年ごと相互に受け渡すよう裁定を下した。それ以来、毎年12月20日に両神社の間で御面渡御が行われるようになった。

なお、『重信町のむかし話』には御面が徳威三嶋宮にもたらされた経緯について『伊予温故録 続』の記述と同様の伝承が収録されている。

5. 実施内容

(1) 行事の概要

浮嶋神社と徳威三嶋宮に隔年鎮座する御面の受け渡しと、それに伴う神事が毎年12月20日に行われる。その際、御面を納めた辛櫃が神職と氏子総代に付き添われながら神社の間を渡御する。令和5年度は浮嶋神社から徳威三嶋宮へ渡御が行われた。

なお、実施日について、明治25年(1892)当時は旧暦に実施していたことが浮嶋神社宮司家の日記(『浮嶋神社勤式記』)から分かるが、いつ新暦に改められたのかは分からないという。



写真2 田園風景の中を渡御する御面の列

(2) 準備の状況

浮嶋神社では渡御祭当日までに神職や氏子の手で境内や拜殿、中殿、本殿を清掃する。当日は午前中

に次の準備を行なう。

ア 浮嶋神社神職は本殿内陣に納められている三体の御面を箱から取りだし、内陣前に設置した案(台)上の雲脚に安置する。箱には各々「表筒男命」「中筒男命」「底筒男命」の墨書きがあり、本殿に向かって中央に「表筒男命」、右側に「中筒男命」、左側に「底筒男命」を祀る。また、中殿に神饌を供え、榊、胡床などを準備する。

イ 氏子総代は拝殿に神紋を染めた幕を張り、入口に「浮嶋神社 徳威三嶋宮 御面渡御祭」と大書した小幟(長さ約2m)を左右に1旒ずつ立てる。これは祭礼の周知を目的に20年ほど前に用意したものだという。また、参拝者のために拝殿階段に莫菴を敷く。

ウ 境内から御旅所までの参道に大幟(浮嶋神社と大書されたもの、長さ約10m)を2旒立てる。これは氏子総代によって当日午前中に準備されたものである。

なお、渡御先の徳威三嶋宮でも同様の手順で神事の準備がされている。



写真3 浮嶋神社拝殿に立てられた幟(左)

写真4 浮嶋神社参道に立てられた幟(右)



写真5 中殿に供えられた神饌

(3) 当日の行事次第

ア 神職及び参拝者着席

午後1時40分ごろ境内に氏子ほか参拝者が参集し、拝殿を通過して中殿の胡床に着席する。午後1時50分ごろ浮嶋神社と徳威三嶋宮の神職は参進、手水をして本殿前の内庭から中殿に入り席に着く。席の配置は、中殿前方向かって左側に浮嶋神社の神職(斎主)、右側に徳威三嶋宮の神職、中殿後方に牛淵地区氏子総代及び野田地区氏子総代と各地区の区長、関係者である。

イ 開式(午後2時)

浮嶋神社及び徳威三嶋宮の神職が大太鼓、小太鼓を打ち鳴らし、御面渡御祭の神事を開始する。なお、神事の進行は浮嶋神社の神職が担当した。

ウ 修祓と本殿開扉

浮嶋神社神職が祓詞を奏上し、神饌や玉串、神職及び参拝者を祓串(榊)で祓う。祓い終わると、浮嶋神社宮司は中殿を降りて御面が納められた本殿へ向かい、扉を開ける。その際、参拝者は一同起立し、神職は警蹕をかける。

エ 献饌と大祓詞

献饌の後、両神社の神職4人が声を合わせて大祓詞を奏上する。



写真6 両神社の神職4人で奏上される大祓詞

オ 奉幣行事

両神社神職が太鼓を鳴らす中、浮嶋神社宮司が金の御幣を捧げ、祈念する。

カ 祝詞奏上と奉幣頂戴

一同起立し、浮嶋神社宮司が祝詞を奏上する。内容は御面の由緒と御面渡御の経緯を述べるもので、浮嶋神社から送り出した御面が「来年には無事帰り来ませとかしこみ申す」で結ばれる。

祝詞の後、神職は警蹕をかけ、浮嶋神社宮司が金幣を捧げて左右に振り、参拝者に神徳を授ける。



写真7 金の御幣を振り祈念する浮嶋神社宮司



写真9 御面を確認し箱に納め辛櫃に入れる

キ 玉串奉奠

浮嶋神社宮司から順番に玉串を捧げる。氏子が奉奠する際は、まず総代会長が代表して捧げ、その間、地区総代は起立して拝礼し、その後、各地区区長が拝礼する。

ク 撤饌と辛櫃披露

撤饌の儀式が行われ、斎主一拝を以て浮嶋神社での神事は終了する。なお、神事後、新調された辛櫃が参拝者に披露された。これは本行事が伊予銀行地域文化活動助成制度の令和4年度助成対象事業に選ばれ、辛櫃及び御面を納める三つの箱を新調したため、例年、辛櫃は本殿内に御面とともに安置されている。また、新調された辛櫃の様式は従来と同様であるが、内部の仕切や注連縄を通す穴が追加されている。



写真10 御面の由緒を参拝者に説明する浮嶋神社宮司



写真8 新調された辛櫃



写真11 両神社神職の立会のもと辛櫃が閉じられる(左)

写真12 両神社神職によって本殿から運び出される辛櫃(右)

ケ 昇殿(午後2時40分)

両神社の神職は本殿へ移動し、本殿内陣前の案上に安置された御面の前に着座する。座る位置は浮嶋神社神職が内陣に向かって右側、徳威三嶋宮神職が左側である。参拝者が本殿入り口に集まると、浮嶋神社宮司と徳威三嶋宮禰宜(宮司代理)が御面を確認しながら一つずつ箱に納める。このとき、御面が参拝者に公開され、浮嶋神社宮司の説明を拝聴することができる。御面を納めた箱は辛櫃に封入され、両神社神職に担がれて本殿から中庭に下りる。

コ 渡御(午後3時)

本殿から運び出された辛櫃は中庭東側の門を出て、拝殿前の境内へ移動する。そこで両神社の総代と合流し、15人程度の列を作りながら徳威三嶋宮まで渡御する。

列の先頭は渡御先の総代1名が掲げる小幟1旒で、これは拝殿に立てられていたものである。続いて浮嶋神社宮司が祓串を持ち、徳威三嶋宮禰宜が切麻を撒いて参道を清め、御面を先導する。次に両神社の神職に担がれた御面の辛櫃、

その後ろに両神社の総代が続く。なお、送り出す側の浮嶋神社総代は同神社の御旅所で御面を見送り、その後は徳威三嶋宮の総代のみが随行することになる。なお、徳威三嶋宮から渡御する場合、徳威三嶋宮の総代は同神社前に架かる由流直橋で御面を見送るといふ。

浮嶋神社から徳威三嶋宮へは御旅所から県道193号線へ出て、JA えひめ中央南吉井支店前を県道に沿いに南西へ進み、近藤歯科クリニック付近の路地を北に折れる。路地の先には田畑が広がっており、その中の農道を北西へ向かって移動する。行列はハタダお菓子館西交差点付近で国道11号線に合流し、そこから南西へ向かって約350m先の由流直橋に至る。橋を渡るとゆるぎ公園があり、通り抜けた先が徳威三嶋宮である。



写真13 御旅所で御面を見送る浮嶋神社総代



写真14 小幟を先頭に、浮嶋神社宮司が祓串を持ち、徳威三嶋宮禰宜が切麻を撒いて御面を先導する

サ 御面奉遷、奉幣行事ほか(午後3時30分)

行列が徳威三嶋宮に到着すると、総代は拜殿及び中殿に用意された胡床に着席する。一方、神職と辛櫃は境内から中庭東側の門を通過して本殿へ向かい、扉を開けて中に入る。警蹕をかけて本殿の御簾を上

げ御面を迎えると、両神社の神職が確認しながら辛櫃から取り出した御面を内陣前の案上に奉安する。なお、神職の座る位置は浮嶋神社本殿内の位置と同じである。また、小幟は総代の手で本殿入り口に立てかけられていた。



写真15 徳威三嶋宮本殿へ運び込まれる辛櫃

御面の奉遷が終わると、今度は徳威三嶋宮禰宜を齋主として奉幣行事、祝詞奏上、玉串奉奠といった神事が行われる。浮嶋神社における神事とほぼ同様であるが、異なる点は、神職の着席する位置が浮嶋神社での位置と逆になること、参加する氏子は渡御先である徳威三嶋宮の総代及び区長であることなどである。

神事が終わると徳威三嶋宮禰宜の挨拶があり、解散となる。

シ 片付け

神事後、幕や幟は総代によって直ちに片付けられる。なお、直会は時勢に配慮して行わなかった。

6. 参考文献

- 相原 宗正 2011 『浮嶋便り 第17号』浮嶋神社
- 相原 宗正 2012 『浮嶋便り 第21号』浮嶋神社
- 重信のむかし話編集委員会 1983 『重信のむかし話』重信町教育委員会
- 宮脇通赫 1924 『伊予温故録 続』松山向陽社

7. 調査日

令和4年12月20日

(佐伯 直紀)

20. 磐根神社の投げ奴

別称：無

伝承地：西条市丹原町鞍瀬

実施時期：10月第3日曜日

指定：西条市指定

テーマ：30

1. 地区の概要

西条市丹原町鞍瀬地区は江戸時代前期には鞍瀬村（村高79石、内畑73石）として成立していた集落地区で、明治22年（1889）に近隣の5村とともに桜樹村となっている。この地区は、周桑平野を形成した中山川上流から分岐している鞍瀬川沿いの平地の少ない谷間に集落が展開する地域である。

2. 実施場所

磐根神社と同社を出て東に約200mの御旅所の間で奴行列が行われる。

3. 伝承組織

磐根神社毛槍投げ奴保存会

4. 由来伝承

磐根神社の創始は毛利元就の家臣佐伯小太夫行忠が、天文12年（1543）に安芸から帰って祭祀を始めたことによるといわれている。祭礼は弘化4年（1847）の神社台帳に赤坂流行列の記載があり、江戸時代には大名行列を模して奴道中が始められていたといわれている。

5. 実施内容

祭礼の一週間前の土日に役員（氏子区長・氏子副区長・氏子総代4人）を中心にしめ飾りの作製や、幟立て、しめ飾りなどの準備が行われる。

祭礼当日、祭礼に参加するもの（役者）は潮垢離を行う。

午前10時から役員が拝殿にあがって神事が始められ、午前11時から宮出しが行われる。神輿は役員等の氏子によってかかれ、本殿・拝殿の周りを右回りに3周した後、御旅所に向かう（かつては太鼓・獅子・奴が本殿・拝殿の周りを右回りに3周した後、神輿が同じく3周して行列に加わっていた）。

御旅所は本来東に200mのところであるが、コロナ禍以降は神社下の高座集会所北の空き地で行われている。御旅所に着いた後、神事が行われ、午前12時に集会所で神主・役員のお会食が行われる。



写真 宮出し

午後2時から神輿の神社への還御が行われ、宮入の後、神社で神事が行われて祭礼が終わる。その後に参加者によって幟等の片付けが行われる（奴等が出ていた時は午後4時から）。

コロナ禍まで御旅所までの神輿渡御には、太鼓・獅子（8人が入るムカデ獅子）・奴行列が神輿を先導していた。奴行列は、挟み箱持ち2人2組、長刀持ち2人1組、毛槍持ちで、毛槍は4人一組で一番と呼び（槍2本と4人で一番）、六番奴まで出て総勢30名の奴道中が行われていた。奴は4人1組2列で、後の奴2人が垂直に立てたまま毛槍を前の奴に投げ渡し、片足跳びで毛槍を受けた奴の前に回って次に毛槍を受け、その繰り返しで行列を進める赤坂流道中奴であった。

なお、奴等は鞍瀬地区の人及び鞍瀬地区出身者・旧居住者で行っていたが、近年では地元丹原西中学校生にも参加してもらっていた。

6. 参考文献

丹原町誌編さん委員会 1991 『丹原町誌』
吉本勝 2011 『続・西條のおまつり』

7. 調査日

令和4年10月16日

（日和佐 宣正）

21. ひとりずもう 一人角力

別称：御田植祭・抜穂祭

実施時期：旧暦5月5日・9月9日

伝承地：今治市大三島町大山祇神社

指定：愛媛県指定

テーマ：10

1. 地区の概要

大三島は、今治市に属する芸予諸島の有人島。愛媛県の最北に位置し、同県に属する島の中では最大。大三島町は、平成17年1月16日の旧今治市などとの合併により現在の今治市となった。

今治市人口：151,672人（うち大三島町：2,575人）

2. 実施場所

今治市大三島町宮浦に所在する大山祇神社の御棧敷殿と神饌田の間に設けられた土俵で実施。

3. 伝承組織

地元の有志により奉納。

4. 由来伝承

担い手は、力士（一力山）と行司役の二人。

力士は、まわし一丁。行司は烏帽子・直垂・軍配団扇。稲の精霊と力士（一力山）が3番勝負を行い、稲の精霊が2勝1敗で勝つことで、稲の収穫や豊作が約束されるという奉納神事。

神社に残る古文書には、貞治3年（1364）に奉納された記録があり、古くからの神事であったことが察せられる。

5. 実施内容

大山祇神社で旧暦5月5日に実施される御田植祭、旧暦9月9日に実施される抜穂祭において、地元の有志二人により奉納される神事で、御田植祭では、御田植神事の前、抜穂祭においては、抜穂神事後に奉納。

稲の精霊と一力山が角力を取り、稲の精霊が勝つことで稲や作物の豊作が約束され、また感謝するという神事。

神事の最中には、精霊の姿は見え、傍目には力士が一人で角力をとっているように見えることから「一人角力」と呼ばれるようになったとされる。

全国的にも珍しく、昭和39年（1964）に県の無形文化財の指定を受け、昭和52年（1977）に無形民俗文化財の指定替えとなった。

すもうは、一般に「相撲」の字を当てるが、「相撲」を含めた広義の力比べである「角力」の文字を用いて、一般の相撲とは違い、神様との力比べを表すとされる。

江戸時代は現在の上浦町瀬戸の力士によって行われ、それも一番勝負であったといわれている。また、明治以降の力士として、堀田金八（1838～1904年）、藤原岸蔵（1848～1916年）、藤原初治（1857～1929年）、越智直治（1936年亡く89歳）、松岡栄太郎（1870～1953年）、藤原忠八（1910～95年）などの氏名が記されており、いずれも10年、20年と奉仕してきたようである。

先代が高齢のため、昭和59年を最後に途絶えていた当該神事は、平成2年には地元中学生による伝承、平成11年には、現在の奉仕者に継承されている。

6. 参考文献

愛媛県生涯学習センター 2000 『愛媛の祭り（平成11年度地域文化調査報告書）』

7. 調査日

令和5年6月22日

（多和 祥栄）



22. お供馬の行事

別称：走り馬

伝承地：今治市菊間町浜 加茂神社

実施時期：10月第3日曜日

指定：愛媛県指定

テーマ：2・10・22

1. 地区の概要

瀬戸内海の斎灘に臨む海岸線には国道196号線が走り、JR菊間駅と菊間港の周辺が繁華街となっている。

当地域は、藩政時代以降、粘土瓦「菊間瓦」の産地として知られているが、農業も盛んで、当行事にかかわる「菊間町愛馬会」の会員は農家である。1年に1度の当行事のために、競馬場で廃馬となったサラブレッドなどの外来馬を譲り受け、飼育を行っている。

菊間町は大きく菊間校区と亀岡校区に分かれるが、本行事が行われる祭礼は菊間校区で催され、世帯数1,766戸、人口3,500人である（令和5年1月31日時点/今治市住民基本台帳）。

2. 実施場所

加茂神社の参道 ※パレードは菊間町浜の商店街

3. 伝承組織

菊間町愛馬会

4. 由来伝承

「お供馬」の名称は、神輿が御旅所まで練り歩く際、これに神馬がお供をすることに由来する。起源は、当地が京都上賀茂神社の荘園で、その競馬会の神事を維持するために年貢金を納めていたことに由来するという。菊間の遍照院文書の明応4年（1495）祭礼条に「侍競馬」の記事がある。藩政時代以降、当地方は製瓦業で栄え、窯焚き燃料の薪の運搬で多くの馬が飼われていた。



写真 お供馬の走り込み（令和4年10月16日）

加茂神社境内にある「お供馬資料館」の年表には、大正11年（1922）のお供馬行事に128頭の農耕馬の参加があったと記される。走り込みには五穀豊穰・家内安全などの願いが込められ、昭和30年（1955）頃まで飼育馬鍛錬の目的で農閑期に旗競馬も実施されていた。

5. 実施内容

当行事は、2日間にわたって開催される加茂神社の秋季例大祭（菊間祭り）の中で実施され、300mの参道を、艶やかな衣装と馬具を身にまとった少年の騎手（乗り子）と馬が人馬一体で駆け抜ける。今治地方随一の集客を誇る年中行事である。

走り込みの練習は1か月前から始まり、毎週日曜午後後に実施する。1週間前になると300mの参道に柵が設けられ、本番まで毎日練習を行い、この日より乗り子と口引きは参籠に入る。毎日海で禊をとって神社に参拝し、厩舎には注連縄を張って、禊の際に持ち帰った塩水で清めることになる。

祭礼初日は、少年を乗せた馬が午前中に浜地区の商店街をパレードし、翌日の走り込みのPRを行う。この際、経由地の海岸で塩水をまいて清めを行う。本番の2日目は、早朝に浜地区の海岸で乗り子・口引きは塩ごりを行い、各馬はそれぞれの厩舎から歩いて午前8時頃に神社境内に集合する。到着順に、社殿で乗り子と口引きは安全祈願のお祓いを受け、いただいたお守りを乗り子のハチマキや襷に装着する。

走り込みは、町内各社の牛鬼・神輿・ダンジリ・獅子舞の宮入り後の午前9時頃から始まる。一斉に全頭が走ることはなく、数頭単位で乗り子と馬をローテーションさせながら実施し、愛馬会の会長がマイクで進行役を務める。出走しない馬は、参道脇の馬場で待機する。最後は、中学生とその日勢いのある馬数頭が競い合うように参道を駆け抜けて、午前11時の神輿宮出し前にフィナーレを迎える。その後、各馬は参拝客の試乗や記念撮影に応じた後、12時20分からの御旅所神事に向けた御旅行列に加わる。

令和4年は3年ぶりに実施され、小学2年（7歳）から中学3年生（15歳）の男子12人の乗り子と12頭の馬が出走した。年々、出走馬は減少傾向にある。

6. 参考文献

加茂神社のホームページ <https://kamo.j.sakura.ne.jp/>

7. 調査日

令和4年10月15日・16日

（大成 経凡）

おと い おおずもう
23. 乙亥大相撲

別称：乙亥相撲・乙亥祭り

実施時期：11月26日・27日（令和4年）

伝承地：西予市野村町および周辺地区

指定：無

テーマ：10

1. 地区の概要

西予市野村町は同市を貫流する肱川（宇和川）の中流域に位置する人口約7,000人の在郷町である。野村町の範囲は平成16年（2004）の5町合併による西予市設置以前の旧野村町に一致し、明治期行政村に相当する野村、溪筋、中筋、貝吹、横林、惣川（大野ヶ原を含む）の6地区から構成されている。旧野村町は「シルクとミルクの町」をキャッチフレーズとしていたように、その産業上の特色は養蚕・製糸業と酪農業にあり、現在では前者が衰微しているものの、農業を中心とする産業構造に変化は見られない。また、近年では平成30年西日本豪雨により野村地区を中心に死者5名と約900軒の建物被害に達する甚大な被害が発生している。現在の野村町は災害復興の途中にあり、乙亥大相撲はそのシンボルの一つとして位置付けられる存在でもある。

2. 実施場所

本行事は野村町野村地区の中心市街地に位置する乙亥会館で実施されている。平成17年（2005）に開館した乙亥会館は両国国技館を模した方形型の屋根をもつ複合施設であり、収納式の常設土俵が備えられているメインアリーナのほかに相撲練習場、相撲資料館、トレーニング室、会議室等が併設されている。完成時には温浴施設（カロト温泉）も併設されていたものの、平成30年西日本豪雨により復旧不能となっている。

なお、乙亥会館完成以前の実施場所は、昭和40年（1965）まで旧緒方酒造横広場、同47年（1972）まで町営グラウンド、平成6年（1994）まで野村公会堂前、そして平成16年（2004）まで野村町児童館前となっており、いずれも野外または天幕下の特設土俵で行われていた。

3. 伝承組織

令和4年現在における主催者は西予市・せいよ野村観光協会・西予市教育委員会であるが、実質的な運営を担うのは観光協会内に設置される相撲部会である。同部会は野村地区組長会、市体育協会野村支部、市相撲連盟、観光協会、商工会野村支所等の諸団体役員か

ら構成されており、特に諸団体の会長職等から構成される一団は「勸進元」と総称され、実施内容の決定と実施当日の総合進行について大きな職責を担っている。また、主催者の変遷については、明治期から第2次大戦後しばらくは組長会（専務区長会）、昭和30年代半ばから組長会と商工会からなる乙亥相撲協会、昭和40年代半ばから観光協会、そして平成に入ってから観光協会に加えて旧野村町と同教育委員会が連名するようになり、現在に至っている。

一方、主催者はあくまでも運営を担う組織であり、その実施に参加者の存在が必然となる。乙亥大相撲の参加者は野村町民を中心とする地域住民、大学や実業団のアマチュア招待選手、そして日本相撲協会所属の招待力士からなる。このうち、伝承母体として重要なのは地域住民であり、その年齢層は小学生から還暦を迎える初老の方まで幅広く、小中学生には女性も含まれている。また、その参加単位は概ね地区単位となっており、これらの地区には常設土俵をもち、乙亥大相撲に向けた練習を実施するのはもちろん、独自の相撲大会を実施している地区も存在する。加えて、地区とは別に野村中学校や野村高校に相撲部が設置されているとともに、民間の相撲道場も開設されており、青少年と相撲との距離は他地域に比較して近いものと考えられる。その意味で、乙亥大相撲の伝承基盤は野村町に連綿と伝わる相撲文化と、これを継承し次代に伝えていこうとする個々の地域住民と言えよう。

4. 由来伝承

嘉永5年（1852）6月に発生した野村大火の発生を受け、当時の野村庄屋であった緒方惟定の勸進により同年10月乙亥の日に火伏神として愛宕神社が三島神社境内に鎮座（明治42年に現在の愛宕山に移設）されるとともに、その奉納行事として100年を満願とする三十三結びの火伏願相撲が開始された。この願相撲が現在の乙亥大相撲の起源である。昭和27年（1952）に満願を迎えたものの、当時すでに乙亥大相撲はその神事的意味を超えて、地域の娯楽として確立されていたことからそのまま継続され、令和4年（2022）現在で171年目を迎えている。なお、往時の三十三結びは1

日目の開会直後に行われていた。三十三結びは奉納相撲として重要であったことはもちろん、勸進元が力士の力量を見極め、後述する選抜戦である「役相撲」への出場力士を選出する意味でも重要であったとされる。

一方、過去の新聞記事を渉猟した限りでは満願を迎えた昭和27年（1952）に特段の行事が行われた形跡はなく、観察の限りでは現在も三十三結びを意識した演出は行われていない。加えて、昭和30年代初頭から乙亥大相撲に出場されていた方の聞取記録からも「わたしが知ってからは数は関係なし」と記載されていることから（愛媛県生涯学習センター 2000）、満願前後から三十三結びへの意識は薄れ、その後に自然消滅したと考えられる。また、現在では九州場所（11月場所）を終えた日本相撲協会所属の力士を招待する関係から、実施日は必ずしも乙亥の日ではなくなっている。

しかし、現在でも10月初旬に勸進元による愛宕神社火鎮擁護祈願祭、実施直前の休日に行われる土俵整備に合わせて、相撲部会行司による土俵祭および神職による愛宕神社より渡御した神輿を迎える御幸祭がそれぞれ執り行われており、愛宕神社との関係や奉納行事としての色彩が完全に消えたわけではない。また、勸進元の一部が、平成30年西日本豪雨時やコロナ禍の危機的状況を回想して「最低でも三十三結びだけはやらなければと思っていた」と口にしてきたように、乙亥大相撲の由来が奉納行事としての願相撲にあるという意識は、少なくとも現在の勸進元には通底しているものと考えられる。

5. 実施内容

令和4年現在の乙亥大相撲は2日間で実施されており、各日程は表1のとおりである。表1中の記載は体裁と表記ゆれを一部修正した以外は原文ママであるが、下記に記載する実施行事とその開始時間とは異なる場合がある。なお、通常であれば両日のアマ招待選手取組に日本相撲協会所属の招待力士（幕下以下）の参加、両日の中入時に同招待力士（幕内三役級）による稚児土俵入りと相撲指導が行われているが、今年はコロナ禍により招待力士の参加が見送られたため、これらは実施されていない。加えて、招待力士の参加が見送られたことにより、通常は観覧料（一般1,500円、升席15,000円）を徴収しているところを無料開放にて実施されている。

乙亥大相撲の開催時には会場周辺に相撲幟が設置されるとともに、市商工会野村支部による商工祭や軽食や玩具の露店市が行われており、野村町随一のハレの

表1：第171回 乙亥大相撲日程表

初日 11月26日(土)		千秋楽 11月27日(日)	
時間	予定	時間	予定
8:30	小学生の部開会式 市内小学校団体対抗戦 個人勝抜戦 試合順 団体戦 個人戦 (3年→4年→5年→6年)	9:00	一般青年の部開会式 一般青年団体対抗戦 個人勝抜戦 試合順 2部団体予選 1部団体予選 個人軽量 個人無差別
10:30	小学生の部閉会式	12:20	一般青年の部閉会式
10:45	中学生の部開会式 市内小学校団体対抗戦 個人勝抜戦 試合順 団体戦 個人戦 (1年→2年→3年)	12:40	アマ招待選手取組 小五人勝抜戦 中五人勝抜戦 アマ招待選手による県内・外対抗戦
13:35	中学生の部閉会式	13:45	中三役
13:50	アマ招待選手取組 小五人勝抜戦 中三役	13:45	中入 乙亥太鼓披露 初っ切り
14:35	中入 相撲甚句 乙亥太鼓披露 主催者挨拶 初っ切り	14:15	アマ招待選手取組 中五人勝抜戦 大五人勝抜戦 未三役
15:20	アマ招待選手取組 中五人勝抜戦 大五人勝抜戦 等	15:20	千秋楽打ち止め
16:40	初日打ち出し		

資料：第171回乙亥大相撲日程表

場としての雰囲気には花を添えている。

1日目は午前8時より会場外の櫓から触れ太鼓が乙亥大相撲の開催を告げたのち、午前8時30分の小学生の部開会式を皮切りとして、小学生の部の団体戦と個人戦、そして中学生の部の団体戦と個人戦と続く。両部ともに団体戦は学年男女混合チームの3番勝負で行われ、ブロック別の総当戦を行った後、ブロック1位のチームが勝抜戦に進み、優勝チームを決定する。一方、個人戦は学年（小学3年生以下は1部門）及び男女別に分けられた総当戦となっている。

なお、小中学生の部は少なくとも昭和50年代には開始されており、団体戦については両部ともに野村地区が細分化されている以外は概ね旧小学校区単位のチーム編成となっている。そして、個人戦については、過去の成績表を見る限りでは、平成初期に小学生が学年別に分けられ、平成10年代初頭に中学生の部が学年別になるとともに小中学生の部が男女別に分けられるようになっていく。

中学生の部終了後の午後2時43分から中高生を中心

とする三人抜きおよび五人抜きの勝抜戦が行われた。往時の勝抜戦は「誰が出てもいい」取組であり、三十三結びと併せて「役相撲の取り組みを決め」る役割を果たしていたとされる（愛媛県生涯学習センター2000）。しかし、現在の役相撲の取組は事前に勸進元が決定していることから、この成績が役相撲に反映されることはない。加えて、現在の勝抜戦は時間調整と役相撲前の場内の盛り上がりを支える意味が強いいため、表1に記載が無いように、この実施の有無と出場者は予め決められているわけではない。これらの点から現在の勝抜戦は乙亥大相撲の実施上で特段に重要視されているわけではない。

しかしながら、満願以降は「三十三番とかの数は関係なし」で勝抜戦が行われていたことを念頭に置くと（愛媛県生涯学習センター2000）、三十三結びは勝抜戦の中に吸収されて自然消滅したものと考えられ、その意味では三十三結びの「数」は別にしても、その形式は勝抜戦の中に今もなお生きているものと考えられる。なお、今回の勝抜戦では三人抜きと五人抜きが各1回のみ行われているが、これらが複数回繰り返されたり、「飛びつき」と呼ばれる仕切無しの勝抜戦が行われたりする場合もある。

勝抜戦の終了後の午後2時59分より表1中に「アマ招待選手取組」と記載されている「役相撲」が開始された。役相撲は少々五人、小五人、中三役、中五人、特別中五人、大五人、番外大五人、特別大五人、末三役から構成されている。中三役と末三役以外は「五人」の名称が付されているように東西5名による5人抜きとなる。中三役と末三役については後段に詳述するが、前者は両日の中入前、後者は2日目の打ち止め前にそれぞれ行われる。なお例年では少々五人、小五人、中三役を終えたのちに中入になるものの、1日目は予定よりも1時間ほど押していたためか、小五人は中入後に行われている。

役相撲の「少々」や「小」は各役相撲に出場する選手の実績に応じた「格」を表しており、「少々」や「小」では地域内外の中高生が主体となり、「中」以上になると大学生・実業団選手、そして今回は参加が見送られた日本相撲協会所属の招待力士が主体となる。よって、今回の役相撲は「アマ招待選手取組」と表記されているが、本来は「プロアマ招待選手取組」と表記され、現在の乙亥大相撲を指して「日本唯一のプロアマ対抗相撲」と言われる由来はここにある。

近代以降の乙亥大相撲は三十三結びも含めて宇和川を境に野村町を東西に分けた地区対抗戦で行われてお

り、対抗意識から草相撲や宮相撲で名を馳せた地域外の力士を招聘することは良く行われていたが、プロ力士については大正10年（1921）頃に虎林なる力士を招聘したことが始まりとされる（愛媛県生涯学習センター2000）。これ以降、戦中戦後の一時期を除き、現在まで勸進元と相撲団体との折衝によりプロ力士の招聘及びプロアマ対抗戦が連綿と続いている。「プロアマ」というカタカナの名称にアトラクショナルな感を受けるきらいもあるが、プロ力士の招聘は少なくとも100年以上続いており、乙亥大相撲の核的な伝統の一つであることを強調しておく。加えて、聞取の限りでは役相撲の形式に往時より大きな変更はなく、三十三結びが自然消滅した現在にあっては、このプロアマ対抗戦からなる役相撲が乙亥大相撲の伝統的形式を色濃く残している部分と言えよう。

役相撲の出場選手を決めて取組を作成することは「割り」と呼ばれる（松廣2016）。上述した通り現在の「割り」は勸進元により事前に決められているが、出場選手に「格」をつけることから選手のプライドを傷つけない気配りと、実力拮抗の取組を実現させて観客を満足させる気配りとが同時に必要とされるため、乙亥大相撲における勸進元が一番の悩みどころであり、腕の見せ所でもあるとされる。また、各役相撲は参加選手が5人抜きをしない限り終わらないものの、終わりそうにない場合は勸進元の判断で3人抜きにしたり、勝負を預かたりすることもあるという。

少々五人を終えた午後3時14分から中三役となる。中三役は中入前の成績に応じて三役を決定する意味を持つが、他の役相撲と同様にその出場選手は当日の成績とは別に勸進元により事前に決められている。中三役では東西から3名ずつが出場し、揃踏みの後に小結戦・関脇戦・大関戦の3取組が行われる。そして、他の取組は概ねアマチュア相撲の制服を纏った「審判員」の下で実施されているが、中三役は正式な装束を纏った相撲部会所属の「行司」の下で実施される。各取組の勝利選手には行司より格付けの勝ち名乗りと共に長さ1.5mほどの竹に紙垂が付された梵天（ボンデン）と呼ばれる御幣と弓等の幣帛が授けられる。

中三役は行司の登場や勝者への様々な幣帛授受が行われるように、出場選手を明確に三役に位置づける格付けの意味よりも、儀礼的な意味が強いとされる。そのため、勝敗はそれほど重要視されず、出場選手には同額の祝儀が授けられているとのことである。そして、中三役終了後に、中三役の出場選手が勸進元の用意した清酒一升瓶2本と丸桶に入った「力飯」を囲んで揃

踏みし、中入となる。

午後3時17分より始まった中入では乙亥太鼓の披露、西予市長による主催者挨拶、相撲甚句の披露、そして初っ切りが行われるとともに、先ほどの清酒と力飯が関係者と観客に縁起物として振舞われる。乙亥太鼓は昭和61年(1986)の乙亥大相撲130周年を記念して商工会青年部や青年団を中心に結成された創作太鼓グループである。相撲甚句は昭和63年(1933)に結成された野村相撲甚句会によるものである。往時の乙亥大相撲では三十三結びの後に力士による相撲甚句が披露されており(松廣 2016)、現在の相撲甚句は当時とは歌詞こそ異なるものの、相撲とは別に乙亥大相撲の伝統を今に伝えるものといえよう。

中入終了後の午後4時21分より小五人から役相撲が再開され、午後5時42分の特別大五人の終了をもって初日打ち出しとなった。初日打ち出しの後には、各家々において遠方からの客や親類を迎えての接待が始まり、中には招待力士を自宅に招待し豪華な郷土料理等で接待する家庭も存在する。特に招待力士がこうした家々を回る行事は「お宿まわり」と呼ばれ、乙亥大相撲1日目夜の名物となっているものの、現在ではこうした接待を行う家は少なくなっている。

2日目も1日目と同様に午前8時から触れ太鼓が乙亥大相撲の開催を告げたのちに、午前9時の開会式より一般青年の部の団体戦と個人戦が開始される。特に団体戦は往時の東西対抗戦であった形式を現代に受け継ぐものといえ、役相撲と並ぶ乙亥大相撲のハイライトであり、各地区の応援団による太鼓や垂れ幕による賑やかな応援合戦が行われる。団体戦は2部制に分けられた5番勝負となっており、各部をブロックに分けた総当戦が行われたのちに、体重別の個人戦を挟んで、各ブロック上位2団体による勝抜戦により各部の優勝を決定する。そして、1部の総当戦最下位団体と2部の優勝団体は翌年の実施時に部の入れ替えとなる。なお、団体の編成単位は小中学校の部と同様に概ね地区単位での編成となっているが、企業単位で編成されている団体も少なくない。

午後1時に一般青年の部が終了し、1日目と同様に役相撲である「アマ招待選手取組」が開始される。2日目の役相撲もその出場者は前もって勸進元に決定されているが、1日目の様子から調整が行われることもある。末三役以外の役相撲は1日目と同様であることから、ここでは末三役のみを記載する。

午後3時20分から始まった末三役は乙亥大相撲の最終行事であり、全日程を通じた三役を決定する意味を

持つ。末三役は中三役以上にその勝敗よりも儀礼的意味が強い役相撲であり、小結戦と関脇戦は中三役と同内容で行われるものの、大関戦では勝負をつけない。すなわち、両者が四つに組んだところで行司が「待った」をかけ「両々とも御名人に御名人になりますれば、乙亥大相撲勸進元にお預けし、明年、乙亥会館にて取って御覧に入れます」と口上を述べ、両者に勝敗をつけずに千秋楽の打ち止めとする。

その後、土俵中央にバケツに入った力水と徳俵が用意され、力水に梵天が立てられる。次いで大関戦の両者が徳俵上に立ち、梵天に両手をかけて相対し、関係者一同がこれらを囲むように土俵に上がる。最後に行司が塩を撒き「ハア、沖は大漁、陸は満作、富貴繁盛と打ちましよう。ハイ、シャン、シャン、もう一つ祝って、シャン、シャン、祝ってシャンで、シャン、シャン、シャン」と口上を述べて、全日程の終了となる。全日程が終了したのは午後3時32分であった。



写真1 実施時会場全景(一般青年団体1部)

6. 参考文献

- 愛媛県生涯学習センター 2000 「町に幟がひるがえる」『愛媛の祭り』愛媛県生涯学習センター
 松廣義忠 2016 「乙亥大相撲」愛媛県相撲連盟HP
 (<http://ehimesumo.la.coocan.jp/PDF/otoisumo.pdf>)
 2023年7月31日閲覧。

7. 調査日

令和4年11月23・26・27日

(渡邊 敬逸)

24. ^{しもなだ} ^{わせんきょうそう} 下灘の和船競漕

別称：はだか祭り

伝承地：宇和島市津島町下灘

実施時期：7月14、15日

指定：無

テーマ：10

1. 地区の概要

宇和島市津島町下灘地区は、宇和島市の最南端にあり、真珠養殖・魚類養殖が盛んな漁村である。人口は1,674人（令和5年7月時点）、リアス海岸で湾が入り組んでいるため集落が分散し、かつては小学校が7校あったが、現在は下灘小学校（児童数47名）に統合されている。

2. 実施場所

由良神社（写真1）、^{ねずなき} 兎鳴湾内、下灘小学校前の御旅所

3. 伝承組織

由良神社の夏祭りに実施される和船競漕は、^{おしぶね} 押舟保存会により運営されている。

4. 由来伝承

天保8年（1837）、由良神社を須下の赤碓から現在地の山崎鼻に遷座したところ、神の怒りによって水堤が現れ、船の航行ができなくなった。そこで、浦人は2隻の新しい網船で押し合い（競漕）を行い、その突波で水堤を崩し、神の怒りを鎮めたという。以来夏祭りの神事として和船競漕を続けている。

網船の押し合いは、昭和30年代の民俗調査ではまだ各所で行われていたが、令和の現在、残っているのは下灘だけである。通称、はだか祭りとも言われる。

5. 実施内容

7月14日宵宮

例年、由良神社において神事が行われ、参拝者も多数訪れる。神事には、総代会・漁協・自治会・下灘公民館・小学校・押舟保存会・御座船関係者が参加。地元の小中学生による浦安の舞と権現太鼓が奉納される。神社は陸路で訪れることは困難で船で参拝するが、神社の前の海上で3回船が回ることを慣わしとしている。令和4年（2022）宵宮は中止だったが同5年は再開、神事は午後4時20分に始まり5時に閉式、5時30分頃から権現太鼓奉納、午後6時に終了した。

7月15日例祭

午前9時より神事（写真2）が行われた。参列者は各地区自治会長、神社総代、漁業理事、小学校長などであった。神事では、浦安の舞、権現太鼓が奉納された。神事を終えると、神輿は御座船（各地区持ち回り）で、御旅所の下灘小学校前に出御した（写真3）。



写真1 由良神社

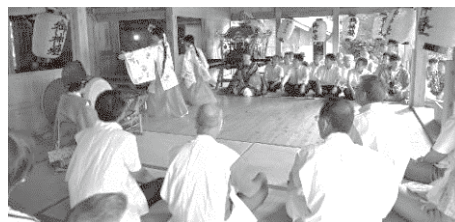


写真2 神事

神輿が御旅所に着き、ここでの神事を終えると、競漕がスタートする。

兎鳴には、かつて下灘浦庄屋赤松家があり、その前の浜が御旅所で、現在の下灘小学校前となっている。御旅所はもう一ヶ所あり、その年の御座船を出した地区に御旅所が設けられる。

和船競漕

2隻の和船は、神社前面の海でゆっくり時間をかけて3周して競漕の開始を待つ（写真4）。近年は報道関係者の乗せる船が随伴し、撮影を行うようになった。神社の前の海で3周することは、かつては各所で見られたが、現在は狩浜（西予市明浜町）の春日神社秋祭礼の海上渡御で見られる程度となっている。

午前11時にスタートである。距離は800メートルで、神社沖から下灘小学校前の御旅所までである。

途中で真珠筏があり、経路は、くの字形となるので、毎年外側、内側のコースを交代して漕ぐ。

この競漕は、勝ち負けを競う時代もあったが、現在は、漕ぎ手不足から勝敗にこだわらず、奉納することに意義があるという考えになりつつある。

網船でイワシ漁を行っていた戦前には、勝った船は大漁があるとして対抗意識が強かった。多いときには4艘が出ていた。また、距離も今より長く、2回戦を行うほど漁師には体力があった。現在、練習は7月の第1日曜日、船おろしの時に1回行われる。15日までにもう1回日曜日があれば行うこともある。

紅組（奥組、地方組）は横浦から田之浜・竹ヶ島まで、白組（沖組）は、嵐から須下までである。これら組分けは伝統的なものである。各自治会がこぎ手を出し、紅白の組が人数の融通をしあうことはしない。

漕ぎ手の数は一定していない。令和元年（2019）の前回は各組28名ずつであった。櫓は10挺あり、前の5挺は2人で漕ぎ、後ろの5挺は3人が担当し、2人が漕いで1人が交代要員として待機した。後ろの櫓は重いので、交代が必要なのである。漕ぎ手は25人であった。ミヨシ（船の先端）で1人がザイを振った。その近くに拍子木を打つ人がおり、この2人が漕ぐ音頭をとる。トモ（船の一番後ろ）に、舵取りがおり、船のコースが最短距離となるように操船した。年によっては、他に水かけ役がおり、漕ぎ手に水をかけて暑さを和らげる。

コロナ感染症によって3年の休止期間を経て、再開した令和5年（2023）は、宇和島水産高校の生徒や地区外者の参加を得て、各組35人で実施した。地元外からの参加者は初めてである。1、2番櫓が2人、3番櫓が3人、4、5番櫓が4人で受け持った。本年は水かけ役もいた。

櫓は、現在の人は力任せに漕ぐので折れやすい。令和5年の競漕には、1本25万円の櫓を10本新調した。櫓を作る職人は広島県にただ一人いるだけと言う。

現在使用している和船は、1985（昭和60）年の保存会結成の際、地元弓立の船大工山下氏によって造船された。これは昔の網船での競漕を復活させようとしたものである。船長13m、船幅3mである。昔のイワシ網船は8丁櫓であったが、2丁を増設して10丁櫓とした。長さは、従来の網船（8尋が標準）とほぼ同じであるが、船形はイワシ漁時代とは違い、競漕用としている。従来、網船は2隻をもやって、網を積んでいたもので、真ん中が広いずんぐりした船形であった。この新造船では、10丁の櫓に4人ずつとりつき、ザイ、拍子木、舵取り、水かけの4人が加わって44人乗りとした。2隻で88人が参加したものであるが、現在は確保できなくなっているため、年によって漕ぎ手の

数はバラバラである。漕ぎ手が足りないため、距離は新造当時の1,600mから半減している。

この押船競漕は昭和10年（1935）から長らく中断し、昭和49年（1974）に、1丁櫓の伝馬船によって復活したものであった。真珠産業の景気によって祭りは左右され、景気が良ければ盛大となり、不景気で競漕が中止になったりしてきた。令和5年（2023）は、地区外者の参加を得るなど、祭りの存続のために新しい展開が見られた。



写真3 神輿の海上渡御



写真4 スタート地点へ出発



写真5 追い風によって白組が先着

6. 参考文献

- 北宇和郡下灘第一尋常高等小学校 1935 『郷土讀本 卷4』
 和歌森太郎編 1961 『宇和地帯の民俗』 吉川弘文館
 武智利博 1996 『愛媛の漁村』 愛媛文化双書刊行会

7. 調査日

令和5年7月15日

（宮本 春樹・廣瀬 岳志）

25. おみどり^{しんじ}神事

別称：折居祭り

実施時期：旧中島町の各地区の秋祭りの宵宮

伝承地：松山市中島町（旧中島町）の全域

指定：松山市指定

テーマ：11

1. 地区の概要

旧中島町は、旧松山市の沖合にあった、離島の自治体で、広島県・山口県と県境を接する。旧中島町の人口は3,079人（令和5年8月時点）。

2. 実施場所

おみどり神事（折居祭り）は、旧中島町内各集落の神社と怒和島の若宮八幡神社の拝殿内で行われる。愛媛県内では、旧中島町の区域内でしか行われていない貴重な神事である。

3. 伝承組織

各神社とその氏子組織に、各地区組織が協力する形で行われる。

4. 由来伝承

出雲系の荒神神楽の演目の一部が、おみどり神事として残ったと云われている。中島大浦の忽那島八幡宮には、おみどり神事の式次第などが細かく記載された古文書「大代記」が伝わっており、同書奥書に嘉永五年（1852）に書き写された旨のことが記されていることから、おみどり神事自体は、それ以前から行われていたと思われる。また、「大代記」には、この神事を「折居行事」と記されているが、これを「おみどり」というのは、かつては、引き綱が緑色に染められていたことに由来する。

5. 実施内容

事前に、太陽や鳥居などを図案化した白い切り紙を四面に貼り付けた木製の四方桁に、綱を結び、拝殿の天井に取り付けられた器具を通して、綱の片方の端を本殿側の柱などに括り付けておく。

当日は、大祓詞・奉幣行事・祝詞奏上・皇代記奉読などの後、宮司が、四方桁に繋がれた綱を持ち、祝詞とともに、その綱を引っ張ったり、緩めたりすることにより、切り紙が張り付けられた四方桁が、拝殿内を上下・前後左右に動き、拝殿内を舞うようにも見える。

神事に集まった、氏子等は、四方桁が下に降りてきた時に、貼られた切り紙を、引きちぎり、自宅に持ち帰る。また、怒和島の各神社では、おみどり神事後、折居札の奉納が行われる。

四方桁から引きはがされた切り紙を、竹などに括り付け、畑に立てておくと、作物が豊かに実ると伝えられている。

他に、睦月地区などでは、家内安全や火災予防のお守りとして、家に置いておく地区もある。



写真1 天井につるされた四方桁



写真2 切り紙を引きちぎる氏子ら

6. 参考文献

中島町誌編集委員会 1968 『中島町誌』

7. 調査日

令和4年10月1日・15日

(能田 筆和)

26. ^{みやじま}宮島さんの^{むぎわらふねなが}麦藁船流し

別称：桜井厳島神社祭礼

伝承地：今治市桜井地区（志島ヶ原）

実施時期：旧暦6月17日夕刻～夜

指定：無

テーマ：12

1. 地区の概要

桜井地区は、今治平野の南東部に位置し、沿岸部は瀬戸内海の懸灘に面している。藩政時代の桜井村は、所属が松山藩領、天領、松山藩預かり地の順に変遷する。天領時代に紀州黒江の漆器行商（椀舟）で栄え、江戸後期から漆器製造も行うようになった。一方、村の鎮守の綱敷天満神社は、松山藩主久松松平家の祖・菅原道真を祭神とすることから藩の庇護を受け、商人からの寄進も相次いだ。明治後期以降は、当地から月賦販売で成功する商人たちも現れた。

桜井町は昭和30年（1955）に今治市に編入合併されて現在にいたる。校区の世帯数は4,135戸、人口は8,372人である（今治市住民台帳／令和5年1月31日時点）。

2. 実施場所

厳島神社は、国指定名勝「志島ヶ原」の中にあり、綱敷天満神社の境内社として鎮座する。祭典は厳島神社社殿で執り行い、お祓いを受けた藁船は隣接する桜井海岸から沖へと流す。藁船を流した後、宮司は御神体と御座船に乗って桜井沖で海上渡御を行う。

3. 伝承組織

桜井綱敷天満神社の氏子総代及び桜井漁業協同組合。

4. 由来伝承

厳島神社はもともと綱敷天満神社の境外社（桜井漁協付近に鎮座）であったが、明治41年（1908）7月に現在地へ移転している。

藁船流しは数え歳1歳から7歳までの男児とその家族が対象で、子供の健やかな成長を願って奉納された藁船を家族（一般に父親）が沖へ流す。大正初期には

現在に近い形が見られたようで、本社の安芸（広島県）宮島の厳島神社の祭礼「管絃祭」を模して麦藁船を流すようになったと考えられる。今から40年ほど前は200隻ほどが奉納され、神主も3人態勢で対応し（現在1人）、親戚が集う一大行事でもあった。周辺地区や出身者からも藁船の奉納が見られたという。

5. 実施内容

午後7時頃に社殿に氏子総代が集って祭典を行う。これを終えると、7時半頃から藁船流しの行事に移るが、社殿外の仮設の祭壇前には奉納された全長1.0～1.5mの藁船が並べられる。藁船は奉納者が製作し持参するのが一般的だが、かつては専門の製作者が何人もいた。近年は麦藁の入手も難しくなり、専門の製作者もわずかとなった。

藁船の帆は紙でできており、「奉納 厳島神社」の文字と男児の名前（船名）、赤い鳥居や松の絵などが描かれている。船首水押には日の丸を付け、全体を万国旗で着飾る。船体中央には行燈を設け、海に流す際に蠟燭に点灯する。祭壇前で家族・男児がお祓いする際、船首水押に分け御霊の御幣を取り付ける。

お祓いを受けた藁船から順番に、父親が100m近く沖の御座船（漁船）近くまで泳いで藁船を放す。8時頃になると暗闇の波間に灯りが映えて美しい。藁船流しが終わると、9時頃から御霊の海上渡御に向けた祭典を行い、2人で担げる小さな神輿を御座船へと載せる。宮司も同乗し、1時間ほど沖で太鼓を奏でながら豊漁や航海安全を祈願し、御霊が社殿に戻ると祭礼は終了となる。

令和4年はコロナ禍で途絶えていた行事を盛り上げようと、有志が図って企業・団体などから20隻の奉納があり、個人の奉納者を加えて35隻で賑わった。令和5年は10隻の奉納で、うち1隻は木製であった。

6. 参考文献

近田利勝 2006 「厳島神社祭礼（宮島さん）」

7. 調査日

令和4年7月15日、令和5年8月3日

（大成 経凡）



藁船流しの光景（令和4年7月15日）

27. 五十崎の百八灯・虫送り

別称：無

伝承地：内子町上宿間

実施時期：8月21日

指定：無

テーマ：1・15・19・23

1. 地区の概要

上宿間は、明治6年(1873)宿間村となり、明治22年(1889)には、平岡村、重松村、福岡村、宿間村の4村が合併し天神村となった。昭和29年(1954)に五十崎町、御祓村と天神村が合併し五十崎町が誕生した。さらに平成17年(2005)には、内子町、小田町、五十崎町が合併し、現在の内子町上宿間となった。上宿間地区は、内子町の南端に位置し、地区の西側を小田川が流れており、その小田川に沿って水田や畑が広がり、住民の多くが農業を中心とした生活を営んでいる。人口は、67世帯の166人(令和5年4月1日時点)であり、年々少子高齢化が進んでいる。

2. 実施場所

内子町上宿間

3. 伝承組織

百八灯は、上宿間地区のみ現在も続いており、伝承組織は、上宿間自治会、上宿間自治会青年部、上宿間老人会が中心となっている。虫送りは、上宿間地区・下宿間地区・柿原地区・古田地区・大久喜地区で実施されており、伝承組織は、各自治会が中心となって運営している。

4. 由来伝承

百八灯も虫送しも、はっきりとした伝承は残っていないが、百八灯は、大正時代に大火があり、そのとき亡くなった方々を慰霊するために始められたという云い伝えも残る。以前は、9月28日に行われていたが、現在は、虫送りに合わせて8月21日に行われている。

虫送りは、稲作に害をなす虫が、松明の光に誘われて飛来し、やがては炎に身を焼かれて生を終え、あの世へと送られることから来ているといわれており、先祖代々、五穀豊穰を願って継承されてきた行事である。戦中・戦後しばらく絶えていたが、昭和52年(1977)8月21日に上宿間地区・下宿間地区・柿原地区・古田地区・大久喜地区で虫送りが復活し、現在まで続いている。

5. 実施内容

百八灯は、7月23日(土)午後6時30分に上宿間集会所に自治会役員や青年部員が集まり、今年度の打ち合わせをした後、昨年使用した灯籠の紙をはがし、水洗いをしたり修理をしたりする。灯籠は、縦23cm横18cmの大きさの木組みでできており、横4面に和紙を貼るようになっている。(写真1)



写真1 灯籠の修理

8月7日(日)午後6時30分、集会所に同じメンバーが集まり、108個の灯籠に和紙を貼る。この和紙は、老人会が作成しており、慣用句やことわざなどが印字されている。以前は地区の俳句愛好者などの俳句が印字されていることもあった。8月20日(土)上宿間岩本にある大師堂の清掃を行う。8月21日(日)お大師様の命日に百八灯が行われる。当日の夕方、集会所に役員と青年部員が10人ほど集まり、午後6時より、上宿間の棒の端(はな)の阿弥陀堂から、岩本の大師堂へ通じる田んぼの畦道へ108個の灯籠を立てる。灯籠を立てる棒は、稲木を使用している。午後7時、青年部員が、灯籠に火を点す(写真2・写真3)。午後10時頃、青年部員が、灯籠の回収を行い終了となる。



写真2 灯籠に点火



写真3 百八灯の様子

虫送りは、8月21日(日)午後6時30分、上宿間の棒の端の阿弥陀堂に地区の老若男女20人ほどが集まり、午後7時30分より松明に火をつけ、太鼓、鉦を先頭に阿弥陀堂を出発する。「なんまいだあぶつ」の声に合わせて太鼓や鉦をリズムよく鳴らし、小田川の土手沿いを進んでいく。午後7時から午後8時の間に柿原地区・古田地区・大久喜地区・下宿間地区の虫送りの行列も出発し、同じく小田川の土手沿いを挟んで進んでいく。5地区の虫送りの行列が、手に松明を持って歩く様子は、荘厳で五十崎の夏の風物詩である(写真4)。全ての地区が河原に集合すると、持ってきた松明の火を消し解散となる。昭和の時代には、虫送り当日の夕刻に、青年団員は、参加者を募るため太鼓や鉦をたたいて地区内を回り、当日は80人程度が参加していたようである。現在は、コロナ禍もあり、年々参加者が減っており、他の地区も同じような現状ではあるが、調査を通して、上宿間地区は、自治会役員や青年部員の方々を中心に、百八灯や虫送りを地域の大切な伝統文化として後世に残していこうとする意気込みを強く感じた。



写真4 虫送りの行列

6. 参考文献

- 五十崎町町誌編纂委員会 1998『改訂 五十崎町誌』五十崎町
 田中孝子 2017『愛媛 大洲・内子とその近辺の民間信仰と大師信仰』

7. 調査日

令和4年8月7日・21日

(渡辺 靖)

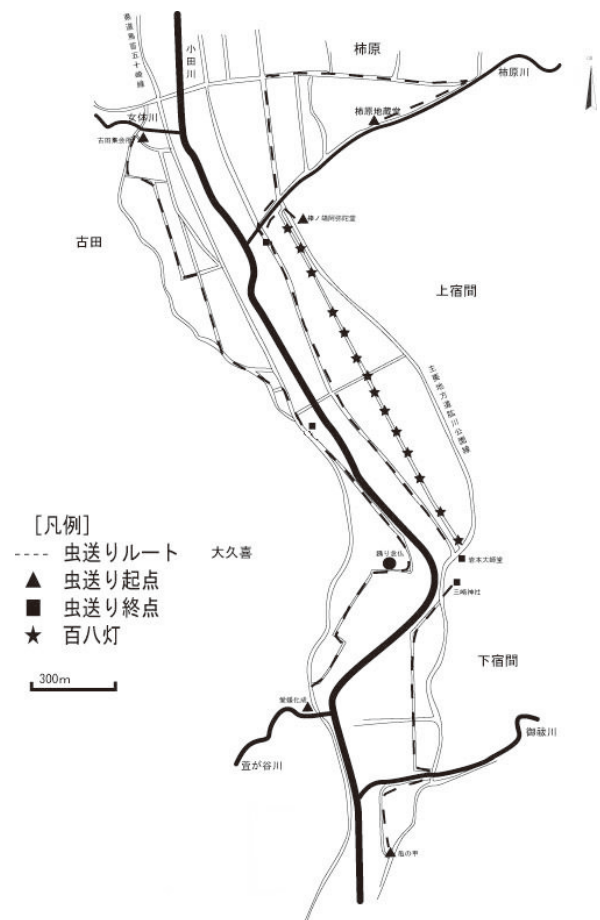


図1 虫送り地図

28. 豊受山の風穴祭り

とようけやま かざあなまつ

別称：無

伝承地：四国中央市豊岡町、富郷町

実施時期：旧暦6月、新暦9月の年2回

指定：四国中央市指定

テーマ：16

1. 地区の概要

豊岡町大町の人口は 1,717 人、富郷町豊坂の人口は 19 人（令和5年）。

祭りが伝承されている豊受山（1,247m）の北側に位置する豊岡町大町と、南側に位置する富郷町豊坂は、日本三大局地風とされるやまじ風の影響が特に強いエリアに属する。生活のあらゆる場面にやまじ風の影響が見られるが、特産品の里芋畑、鉄筋コンクリート住宅の多さや屋根瓦に漆喰を施し重しを吊り下げた光景は、自然との共生を模索してきたが故の文化的景観とも言えるだろう。

2. 実施場所

豊受山の山頂付近にある豊受神社。また、やまじ風が吹き出すと言われる岩穴（風穴）が隣接する。

3. 伝承組織

豊岡町大町連合自治会の6部落（中通り、高野、恵之久保、天関・高塚、西村、宮西）が輪番で担当する。全体的に担い手の減少が続いているが、富郷町豊坂は山間集落であり過疎化が著しく、夏の祭りにのみ参加するようになっている。

4. 由来伝承

縁起によれば白鳳時代より続くとされている。明確な記録には乏しいが、20年に一度の式年遷宮も途切れることなく行われており、その歴史は古いものと推察される。

5. 実施内容

旧暦6月と新暦9月（例年7月、9月）の年2回、市内豊岡町の6部落と富郷町豊坂の住民（豊受神社氏子）15名～20名ほどが、豊受山山頂付近にある豊受神社まで供物を運び、やまじ風が吹き出すと言われる風穴に団子を投げ込んで風の神を鎮める祭礼行事である。

当日の早朝、宮司や総代（自治会長）を中心に参加者が集合の後、山頂を目指す。現在は車で行けるところまで移動、豊受山登山道入り口より登山となる。以前は山頂までほかいと呼ばれる木製の荷箱を背負っていたが現在は使用していない。神社鳥居のしめ縄は行事毎に取り換える。鳥居の側には前神様の祠があり、金平糖を供える。夏は麦の団子、秋は米の団子を365個（閏年は366個）捧げる。神事が執り行われる社殿には団子や米（炊いたご飯=熟饅）、酒、御菓子、野菜、果物、乾物、お揚げなどを祀る。神事には、しめ縄（札付き）、御神酒、三宝へ乗せた供物、太鼓、提灯などが使用され、祝詞奏上や玉串奉典などが行われる。その後、神事を経た団子を参列者が風穴に投げ込んでゆく。投げ終わると、

二礼二拍一礼で終了となる。後、きなこの団子を食す。供物は担いで下山するが、お揚げや米、果物などは自然に置いて帰る。捧げものの一種である。下山後は、地域の寄り合い（打ち上げ）が行われる。20年に1度の式年遷宮では、御遷宮が行われ、本殿や参道の鳥居がやり替えられ、拝殿の向き（豊岡町側と富郷町側）が変更される。近年では平成26年（2014）に行われた。ヘリコプターによる資材運搬もあり一大行事である。御遷宮式年例大祭として、通常の祭りより多くの参拝者が参加する。

担い手の減少や経済的負担など、課題はあるものの、途切れることなく往時の祭りが継承されている。やまじ風という当地方特有の自然現象と共にあり続けた住民の信仰と民俗文化を代表する行事と言える。

6. 参考文献

- 愛媛県生活環境部 1981 『ふるさとの歳時記』
合田正良 1984 『伊予三島市嶺南』
伊予三島市史編纂委員会 1984 『伊予三島市史』

7. 調査日

令和4年9月11日

(近藤 弘樹)



写真1 風穴に団子を投げ入れる氏子



写真2 夏の麦団子



写真3 秋の米団子

29. 湯祈禱^{ゆぎとう}

別称：無

伝承地：松山市道後湯之町

実施時期：3月19日

指定：無

テーマ：16

1. 地区の概要

松山市の東側に位置する道後地区は、13,142世帯、24,848人（令和5年4月時点、道後公民館HP）で、住宅地である一方で、道後温泉を中心に多くの旅館やホテルが立ち並ぶ観光地でもある。

2. 実施場所

通常、道後温泉本館玉の石前で神事を執り行ってきたが、本館が工事中（平成31年1月～）のため、令和4年度は道後温泉別館飛鳥乃湯泉の中庭で行った。

3. 伝承組織

道後温泉旅館組合、道後商店街振興組合、道後温泉事務所など道後温泉及び地元関係者で実施する。

4. 由来伝承

宝永4年（1707）10月4日の地震により、温泉の湧出が停止したため、温泉湧出の祈禱を行い、翌年の1月29日に再び湧出した。その感謝の意を込めて神樂が奉納されたのが湯祈禱の起源とされている。

昭和21年（1946）12月21日の南海地震の際にも温泉が止まり、24日より湯神社において21日間の湧出祈願が行われた。翌年1月28日に湧出が始まり、出湯を知らせる太鼓が鳴らされ道後の街は喜びに沸いたとのことである。3月20日に復旧祝賀式が行われ、温泉の営業が再開された。昭和25年（1950）からは「温泉祭」として3月19日から3日間、湯祈禱を皮切りに様々な行事が行われるようになる。昭和31年（1956）年には新源泉の湧出による配分施設が完成し、各旅館の内湯が実現した。内湯完成を祝って、竹筒に汲んだ湯を湯神社に捧げる献湯の行事も行われるようになった。

5. 実施内容



写真1 神事の様子

当日の朝、午前8時すぎより、旅館の関係者が湯を入れた竹筒を持参し供える。竹筒は湯祈禱の数日前に各旅館へ配られ、湯祈禱当日の朝一番の湯を汲むが、注意事項は特にない。午前9時より飛鳥乃湯泉の前で神事が開始し、神樂が奉納され、温泉の湧出への感謝と地域の発展が祈願される。午前9時40分に神事が終了後、献湯祭のため、神職、巫女、ダイバ、神輿、湯桶を持った関係者が行列となって湯神社へ向かう。



写真2 道後商店街を抜けて湯神社へ向かう行列

午前10時20分、湯神社において献湯祭が開始。出湯の感謝とそれが続く事を祈願した後、午前10時54分に終了。記念撮影の後、直会の弁当が配られ、旅館関係者はお札をもらい、それぞれの竹筒を持ち解散した。祈禱してもらった湯は旅館へ持ち帰り湯船に戻す。

湯祈禱及び献湯祭が終了した後、3月21日まで道後温泉まつりとして郷土芸能大会や女みこしのかきくらべ、餅まきなどの催しが行われた。

6. 参考文献

- 松山市立子規記念博物館 1994 『第30回特別企画展 図録 伊予の湯』
- 松山市教育委員会 2000 『松山の民俗 無形民俗文化財調査報告書』

7. 調査日

令和5年3月19日

（松井 寿）

30. ^{やわたはま とおか}八幡浜の十日えびす

別称：無

伝承地：八幡浜市沖新田

実施時期：令和5年2月1日（旧暦1月10日）

指定：無

テーマ：17

1. 地区の概要

八幡浜市は愛媛県の南西部に位置し、北は瀬戸内海伊予灘、西は宇和海に面している。平成17年に旧八幡浜市と旧保内町が合併し、人口は31,987人（令和2年国勢調査）で、トロール漁業の基地として、また、みかんを中心とする柑橘類の産地として全国的に名高い。

2. 実施場所

八幡浜市沖新田の市営魚市場で実施される。

3. 伝承組織

水産会社や市場関係者で実施する。関係者への調整など準備を行う当番は、八幡浜漁業協同組合と玉岡水産が隔年で担当する。参加者は関係者に限られるため、新型コロナウイルスの影響を受けず、行われてきた。

4. 由来伝承

天保年間（1830～1844）に八幡浜沖の佐島へ流れ着いたえびす像を山伏が拾い上げ、堂を建てて奉納したと伝えられている。現在は八幡浜大神宮内の恵美須神社に祀られている。出港前に豊漁を願い、帰港後は感謝を捧げるえびす信仰は、漁業関係者に信仰されている。十日えびすは、もともと海から流れ寄った神を一度海に戻し、再び拾い上げることで、航海の安全と豊漁を祈願する行事である。

5. 実施内容

前日に神社から神棚などを運び、準備を行う。今年の当番は玉岡水産で、市長や県議、生産者や仲買人など10名程度の出席者には事前に案内を行っておく。

午前7時頃より魚市場に設けられた祭壇で神事が行われる。祭壇には、下の段、向かって左の三宝にみかん、リンゴ、バナナの果物、中央は塩と筒状に丸めた和紙を挿した徳利、右には人参、大根、キュウリ、白菜、茄子の野菜、上の段の左には鯛、中央に木製のえびす像、右には紅白の丸餅が供えられている。祭壇には、「大漁豊獲」、「海上安全」、「漁場保全」と書かれた3枚の札が貼られ、鯛が竹竿で吊るされている。

7時20分過ぎに神事が終了し、三宝に載せられたえびす像が玉岡水産の代表の手によって、魚市場の建物の外へ運ばれる。早朝に帰港した中型トロール船（昭和水産の海幸丸）が接岸しており、関係者が見守る中、神職により船首からえびす像が海へと投げ入れられる。

ふんどし姿の若者3人が海中へ飛び込み、そのうちの1人がえびす像を拾い上げる。若者達はトロール船の上へ戻り、えびす像も再び三宝の上に戻る。



写真1 海へ投げられたえびす像を拾い上げる



写真2 船の上に戻ったえびす

参加者は魚市場の中へ戻り、「恵美須神社」のお札、お神酒、紅白の餅、縁起笹を頂き、十日えびすは無事終了した。飛び込む若者は、例年1月半ばに決定される。自ら希望する人もいれば、過去に経験した人が再度飛び込むこともある。飛び込みにあたって、禁忌などは特にない。

6. 参考文献

愛媛県教育委員会 1975 『ふるさと年中行事調査報告書』

八幡浜市 2018 『八幡浜市誌 第2巻 自然環境編、民俗・文化編、産業経済編』

7. 調査日

令和5年1月18日、2月1日

（松井 寿）

31. ^{た き じん じゃ か さ ほ こ ま つ}多伎神社の笠鉾祭り

別称：無

伝承地：今治市山口地区

実施時期：5月1日

指定：無

テーマ：17

1. 地区の概要

山口地区はかつて古谷地区の一部であったが、寛永年間（1624～44）に今治藩主が日吉村から農民を移住させて開拓に当たらせたと伝えられる。明治期に山口村となり、朝倉村山口を経て現在の今治市山口となる。

2. 実施場所

多伎神社、荒神社。

3. 伝承組織

山口地区には、昔から山口に住む旧住民が約60軒、新興住宅地に住む新住民が約40軒住むが、笠鉾祭りに関わるのは旧住民である。1～4班に分かれて1年交代で多伎神社の神社総代など務めるが、笠鉾祭りに関してはとくに関与はない。

4. 由来伝承

『朝倉村誌』では「この「笠鉾祭」は三〇〇年ほど前、この地方で牛馬が多く病死したので牛馬の健康を神に祈願するために始まったのが今に行われている」とする一方、翌日5月2日が多伎神社の大祭で、この大祭が終わると高市郷では豊年を祈願して、苗代の種まきを行うことにふれ、「これはずっと以前では、氏子祭祀集団によって山口部落のすぐ上の山の上にある石神（巨石＝男神）が祝谷を越えて、古谷多伎神社の奥宮であるという、磐座神社（三段の巨石で「ふすべ岩」「雨乞い岩」という）女神を妻訪いするという太古からの神事であったというが、山口が古谷から独立して以来、山口の荒神社から、古谷の多伎神社までの渡御行事となつたらしい。この「サーマイト、カーカイト、牛馬が繁盛するように」というのは、子孫が繁盛するようにと子孫繁盛を祈願して笹竹の先に幼児の衣服を付けたものらしい。この子孫繁栄の行事が、たまたま三〇〇年程前に牛馬の疫病防止祈願に変わったと考えられる。この男神と女神の妻訪い結婚の形式は非常に古く、母系家族形態の基本であった。だからこそ、その翌日が氏子たちによる結婚祝福の大祭が行われるのである。またこの子孫繁栄の神事にあやかっ、氏子たちも豊作を祈願して、苗代に「もみ」の種おろしをするのである。」と説明している。なお文中にある多伎神社の大祭は現在5月5日の開催となっている。

5. 実施内容

笠鉾について 笠鉾祭りの大きな特徴である笠鉾（カサホコと呼ばれ、現在確認できる文献・資料にいずれも「笠鉾」と表記している）は、現在は過去に制作したものや、細工の

得意な人に作ってもらったものを家々で保管しており、古くなつたら作り替えるなどして、それを祭りの当日に使用する。

その形状は2m前後の竹を取ってきて、枝葉を多少落とし、幹の上部、先端数十cmほどを4分割に割る（割いた根元は割れ過ぎないようにテープ等で補強する）。それとは別に細く割いた竹で小さな籠のような輪を作り、それを水平にしてさきほどの割った竹に挿し挟む。輪と4分割した竹との接点はそれぞれ針金等で結んで固定する。放射状に広がった4分割の竹の先端部はそれぞれ内側に曲げて対角の先端どうしを針金で結んで固定する。さきほどテープ補強した竹の割け目の根元部分に葉の付いた笹の枝を挿し込み、その枝葉が最も上部に出るような形にする。仮にひとつ実際の笠鉾を計測したものは、全長が173cm、上部の竹を割いた部分の長さ45cm、輪などで曲げて膨らんだ上部の最大幅22cmであった。

こうして出来上がった竹に各家で産着や子どもの浴衣の着物を着せるが、50年前、70年前、80年前と古い産着が集まる。薄手の夏物、綿入れの冬物、男女なども関係なく模様や絵柄もさまざまな着物が使用されている。仕事で参加できない人の家の着物を借りたり、他の家から古い着物を借りたりして参加することもあるという。肩揚げや腰揚げをした三つ身のような着物も見られたが、多くは背縫いのない一つ身の着物で、背守りなどは確認できなかったが、胸あたりに別布で付け紐をつけており、その縫い付け部分にしつけ糸で扇子や熨斗、幾何学模様などを表す。これらの着物を割り竹の膨らんだ部分に掛けて衿をあわせ、付け紐で胴を括り、衿上部から笹竹の先端が少し見えるという状態に作る。

笠鉾祭りの開催は3月末の地区の総会で決定して宮司に連絡するが、コロナ前はやるのが当たり前だったという。令和5年度の場合、4月29日のイデザラエ（地区の草刈り・清掃）の時に参加者を確認する。前掲の『朝倉村誌』によればこの清掃は当日午前中だったようで「毎年五月一日になると朝はやくから各戸一名ずつがでて山口氏神、荒神社から古谷氏神、多伎神社までの道掃除、草刈をし、笠鉾様の通行しやすいようにする」とある。ここで出てくる昔からの道があるそうで、祭礼の際に山口から多伎神社までの行き来はそこを通るのが恒例だった（現在は車で移動するため、古い道は草などで覆われ途切れているようだが、山口集落内に「瀧之神社正 八丁」と刻まれた慶応3年（1867）の道標が残っており、そこから神社に向かったと思われる）。

第3章 詳細調査報告

5月1日14時30分頃、多伎神社に宮司が到着。徐々に山
口の人々が各家から一人1本ずつ笠鉾を持って集まりはじめ
る。調査時は11人（うち女性1名）が集まった。

同15時より拝殿内に入って神事開始。修祓、開扉、献饌、
祝詞、玉串奉奠（神社総代2名）といった次第で進む。祝詞
中に「竹葉ハ産着ハ著ハ笠鉾ハ持ハ持ハ」などの文言が入る。

15時20分神事が終了し、人々が笠鉾を持って拝殿内で右
回り（上から見て時計回り）に歩きはじめ、全員で「マーマイ
ソ、カーカイト、牛馬が繁盛するように」次に「マーマイ
ソ、カーカイト、家内安全なるように」さらに「マーマイソ、
カーカイト、交通事故がないように」と3つの唱え言を繰り返
し唱えながら3周回る。調査時には拝殿内を回る際に宮司が
唱え言に合わせて太鼓をたたいたが、基本的に楽器の伴奏
はない。続いて外に出て同じ唱え言で境内を右回りに1周。
終わるとそれぞれ軽トラックなど乗ってきた車で山口地区に
戻り、15時40分頃から荒神社に移動し、社殿内では宮司が
神事を始める中、参加者は傘鉾を手に持って、社殿の周囲を
右回りに1周回り、終了する。

社殿の脇でナオライ（直会）としてクズシ（かまぼこ）、
ジュースやビールがふるまわれ、その場で飲食したり、持ち
帰る人などがおり、また参加者にお札が配られて解散となる。
お札は「神璽」の朱印とともに「式内大社 多伎神社笠鉾祭
牛馬繁盛守護」と書かれている。

なお、前掲『朝倉村誌』によれば、かつてはまず荒神社に
集まって神事で「荒神社の神を笠鉾に乗りうつらせて」、社
殿内で3回、外に出て社殿周囲を3回回り、同じ唱え言を唱
えながら多伎神社へ向かい、多伎神社で社殿周辺を3回、社
殿に入って中で3回、神事が行われて、また外へ出て社殿の
周囲を3回回り、それがすむと笠鉾を社殿に立てかけて殿内
に入り、お神酒を頂いて解散と記録している。

また、かけ声について現状では「マーマイソ、カーカイト、
牛馬が繁盛するように」と唱えるが、参考に隣接する玉川町
域ではお盆前後に「まんど」と呼ばれる行事が小鴨部・高
野・日之浦・法界寺などでおこなわれるが、このうち高野で
は藁を棒の先に付けたサイトを作って子どもたちが「まーま
いど、かーかいど」と唱えるといい、法界寺でもさいとに火
をつけて鐘を鳴らしながら「牛馬繁盛なあまいど」と唱えて
回ったという（『玉川町歳時記』昭和61年、玉川町教育委員
会）。

6. 参考文献

朝倉村誌編さん委員会 1986 『朝倉村誌 下巻』

玉川町教育委員会 1986 『玉川町歳時記』

7. 調査日

令和5年5月1日

（高嶋 賢二）



写真1 カサホコの骨組み



写真2 多伎神社拝殿にて



写真3 多伎神社社殿を回る



写真4 荒神社社殿を回る